

か な が わ の 考 古 学

2018.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

か な が わ の 考 古 学

2018.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

はじめに

1990（平成2）年11月に神奈川県埋蔵文化財センターより刊行された『かながわの考古学』第1集から、1995（平成7）年刊行同第5集までを引き継いで、1996（平成8）年に神奈川県立埋蔵文化財センターと財団法人かながわ財団によって、新たに研究紀要Ⅰ「かながわの考古学」が刊行されました。2000（平成12）年の研究紀要5からは財団法人かながわ考古学財団によって単独で刊行することとなりました。2012（平成24）年に当財団は財団法人から公益財団法人に移行した後も、引き続き研究紀要の刊行を続け、おかげさまをもちまして本書は研究紀要23となりました。

発刊以来続けている神奈川県内の考古学について各時代の研究プロジェクトによる研究成果に加え、本書では当財団の研究助成制度による当財団職員の論文も掲載しております。

本書が考古学研究の一助となることを願うとともに、皆様のご高評、ご批判を賜りますようお願いしております。

2018（平成30）年3月

公益財団法人 かながわ考古学財団

目 次

相模野旧石器時代研究の現在とこれから	
旧石器時代研究プロジェクトチーム	1
神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅷ	
ー後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その9ー	
縄文時代研究プロジェクトチーム	13
弥生時代後期竪穴住居の研究(2)	
弥生時代研究プロジェクトチーム	29
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡(15)	
ー通称「赤星ノート」の古墳時代資料紹介ー	
古墳時代研究プロジェクトチーム	39
神奈川県における古代の仏教関連遺物(1)	
奈良・平安時代研究プロジェクトチーム	53
神奈川県 of 県央地域の中世遺跡(3)	
中世プロジェクトチーム	65
近世道状遺構の集成(3)	
近世研究プロジェクトチーム	77
研究助成論文	
相模・武蔵における山林寺院の様相について ー瓦塔を中心にー	
高橋 香	89
研究ノート	
破鏡に残された分割の加工痕跡	
ー厚木市戸田小柳遺跡出土鏡破断面の観察と比較ー	
戸羽康一・岸本泰緒子	103

例 言

1. 本書は、公益財団法人かながわ考古学財団の職員で構成する研究プロジェクトチームが、時代ごとに共同研究を行った結果を掲載するものである。

また、公益財団法人かながわ考古学財団が平成28・29年度に研究助成を行った研究成果を掲載する。

2. 各研究プロジェクトチームの構成は以下のとおりである。

(五十音順・◎はプロジェクトリーダー、○はサブリーダーを示す)

・旧石器時代研究プロジェクトチーム

井関文明・大塚健一・○栗原伸好・鈴木次郎・砂田佳弘・西井幸雄・◎畠中俊明・三瓶裕司・脇 幸生

・縄文時代研究プロジェクトチーム

阿部友寿・天野賢一・井辺一徳・岡 稔・小川岳人・小島 清・◎粕谷 隆・○野坂友広・村松 篤・山田仁和

・弥生時代研究プロジェクトチーム

飯塚美保・池田 治・伊丹 徹・新開基史・◎戸羽康一・○渡辺 外

・古墳時代研究プロジェクトチーム

◎植山英史・岡戸哲紀・○柏木善治・岸本泰緒子・長澤保崇・新山保和・吉澤 健

・奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

池田敏宏・加藤久美・◎川嶋実佳子・相良英樹・○諏訪間直子・高橋 香・中田 英・西田真由子・宮井 香

・中世研究プロジェクトチーム

菊川英政・信田真美世・中村淳磯・◎松葉 崇・○宮坂淳一・山口正紀

・近世研究プロジェクトチーム

◎木村吉行・桑原安須美・後藤信義・福佐美智子・眞鍋早紀・○南出俊彦

相模野旧石器時代研究の現在とこれから

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

2018年は、「野川・月見野以前以後」と学史的な画期に位置づけられる神奈川県大和市の月見野遺跡群が発見されてから50年という節目の年である。神奈川県内における旧石器時代遺跡は、相模川東岸に広がる相模野台地を中心に発見例が増大し続け、現在その数は500箇所を超える。相模野台地は火山灰の供給源に近く層位的に恵まれており、石器群の変遷を検討するのに良好な地域である。この地の利を活用した相模野編年は、県内のみならず列島地域の石器編年の要として、重要な位置を占めてきた。

近年、新東名や国道246号線厚木秦野道路建設事業など大規模道路開発に伴う発掘調査事例の増加に伴い、神奈川県西部地域において旧石器時代の調査事例が増加している。そこで今回は、増え続ける旧石器時代資料の把握に向けて、県内における旧石器時代研究の礎となってきた相模野編年を再確認することにより今後の指針とすることを目的に本テーマを設定した。

(畠中俊明)

1. 研究史

日本の旧石器時代研究は、1949年に行われた群馬県岩宿遺跡の発掘調査を契機として本格的に開始され、本県での調査・研究が開始されたのは1952年以降のことである。以下、相模野台地を中心とした県内の旧石器時代研究・調査の歩みを辿ることにしたい。

県内において、最初に人類活動の痕跡を示す遺跡が確認されたのは1952年であり、鎌倉市栗山遺跡での黒曜石製剥片の発見(吉崎 1954)と、相模原市南区下溝古山等のローム層断面に露出した燧の確認である。特に、後者は、地形・地質学研究者の戸谷洋が関東ロームの露頭調査で発見したもので、人類の活動面がローム層中に複数存在することと、暗色帯の対比から他地域とのロームの対比や出土石器の比較が可能なことを予測しており、その後の相模野台地での旧石器時代研究の方向性を暗示している(戸谷・貝塚 1956)。

考古学研究者による発掘調査は、1957に行われた横浜市瀬谷区本郷遺跡の調査が最初で、個人住宅の建設に際して発見された遺跡の小規模な調査であった(和島 1958)。研究初期の発掘調査としては、その後、1961年の箱根町朝日遺跡(坂詰 1967)、1963年の相模原市中央区塩田遺跡(岡本 1964)と藤沢市稲荷台地遺跡群S地点(小田 1965)があり、朝日遺跡と稲荷台地S地点ではナイフ形石器、塩田遺跡では細石器の出土が報告された。また、その後の相模野台地の調査・研究に大きな影響を与えた調査として、岡本勇と松沢亜生が1960年から行った相模野台地中・北部の遺跡分布調査(岡本・松沢 1965)がある。岡本等は、戸谷の調査結果に影響を受け、考古学の立場から相模原市内～大和市北部の各河川流域において関東ロームの露頭調査を行い42遺跡を発見した。そしてローム層中の石器出土深度(層位)から石器の編年研究の可能性を指摘した。塩田遺跡の発掘調査は、この分布調査で発見された遺跡の内容を明らかにするのが目的であった。岡本等の調査は、その後に行われた相模考古学研究会の遺跡分布調査に大きな影響を与えた。相模考古学研究会は、1968年2月から組織的に継続して遺跡分布調査を行い、相模野台地全域と多摩丘陵の一部を含め170遺跡を発見・確認した。そして、ナイフ形石器や槍先形尖頭器等のおもな石器の出土層位と、関東ローム層位の

中で遺跡数の増減や礫群の消長などを明らかにした(相模考古学研究会 1971、小野 1979)。明治大学が発掘調査を行った大和市月見野遺跡群と綾瀬市土上棚遺跡はこの遺跡分布調査で発見された遺跡である。1968・1969年に行われた月見野遺跡群の発掘調査は、4遺跡10地点に及び、ローム層最上層からA T直上(当時はまだA Tは確認されていない)までの各層位から石器群が出土した。そして、出土層位に基づく石器群の編年研究や、石器の集中する「ブロック」と礫群などの分布から遺跡の構造研究の可能性を提示した(明治大学考古学研究室月見野遺跡群調査団 1969)。しかし、月見野遺跡群の調査成果は、概報が発表されただけで正式な報告書は未だに刊行されていない。なお、月見野遺跡群は、相模考古学研究会により発見される前年に、酒井仁夫・松浦寛一郎によって発見されており、採集した石器が報告されている(酒井・松浦 1968)。また、相模考古学研究会は、その後、相模野No.149遺跡(大和市教委 1989)・小園前畑遺跡(綾瀬町教委 1972)・地蔵坂遺跡(綾瀬町教委 1974)・報恩寺遺跡(鈴木・矢島 1979)の発掘調査を行い、遺跡分布調査や月見野遺跡群調査の成果なども踏まえ、相模野台地の石器群を出土層位に基づき第Ⅰ期～第Ⅴ期に区分し、第四紀の環境変動の中で人類活動の変遷を捉えようとした相模野編年を提示した(相模考古学研究会 1972、矢島・鈴木 1976)。

1970年代後半になると、相模考古学研究会による遺跡分布調査と月見野遺跡群などの発掘調査成果が行政内でも周知されて開発事業に伴う発掘調査に旧石器時代遺跡も加えられるようになり、綾瀬市寺尾遺跡(神奈川県教委 1979)と大和市上和田城山遺跡(大和市教委 1979)の発掘調査を嚆矢として大規模な行政発掘が相次いで行われるようになった。そして、こうした発掘調査で蓄積された成果をもとに、石器群の変遷を12段階に細区分した相模野段階編年が発表された(諏訪間 1988)。また、神奈川県内外の旧石器時代遺跡の発掘調査に従事する行政内研究者を中心とした研究活動も活発に行われるようになった。1979・1982年には神奈川県考古学会によるシンポジウムが開催され、1989年に発足した石器文化研究会の研究活動に引き継がれた。さらに、1994年には、神奈川県立埋蔵文化財センター及びかながわ考古学財団職員による共同研究が開始され、財団職員によって今日も継続している。

(鈴木次郎)

表 1 相模野台地等の旧石器研究・発掘の歩み

年 月	調 査・論文等	調査者(報告者)	文 献
1905	酒匂川・早川流域の調査で旧石器状の角礫を採集	N. G. マンロー	1911 Prehistoric Japan
1939	横浜市港北区日吉等の砂礫層から発見した骨角器(?)等を報告	永沢謙次	1939 史学 18-1
1949	岩宿遺跡の発掘調査	明治大学	1956 明大文学部研究報告 1
1952	鎌倉市栗山道路から黒曜石製石器を採集	古崎昌一	1954 貝塚 49
1952	相模原市南区下溝古山・下原で礫群を発見	戸谷 洋・貝塚寛平	1956 地質学評論 29-6
1954	横浜市都筑区東方村中村で黒曜石製石器を発見	坂詰秀一	1954 貝塚 10
1957	横浜市瀬谷区本郷遺跡の発掘調査	和島誠一(岡本 勇)	1958 横浜市史 1巻
	横浜市神奈川区羽沢町東康寺付近の礫群発見を紹介	和島誠一(岡本 勇)	1958 横浜市史 1巻
1960 ~	相模野台地中・北部の遺跡分布調査	岡本 勇・松沢聖生	1965 物質文化 6
1961. 11	箱根町戸ノ瀬朝日遺跡の発掘調査	坂詰秀一	1967 箱根町誌 1巻
1963. 3	相模原市中央区田名塩田遺跡の発掘調査	岡本 勇	1964 相模原市史 1
1963. 8	藤沢市稲荷台地S地点の発掘調査	小田静夫	1965 藤沢市調査報告書 2
1967. 6	大和市下鶴岡(月見野第Ⅱ遺跡)で石器を採集	酒井仁夫・松浦寛一郎	1968 大塚考 9
68. 2 ~ '70	相模野台地の遺跡分布調査	相模考古学研究会	1971 遺跡分布調査報告書
		小野正敏	1979 日本考古学を学ぶ(3)
1968. 3	大和市下草柳大下遺跡の発掘(礫群を調査)	明治大学	1971 遺跡分布調査報告書
1968. 8-9	大和市月見野遺跡群の発掘調査	明治大学	1969 概報 月見野遺跡群
1968. 12	綾瀬市土上棚遺跡の試掘調査	明治大学	

相模野旧石器時代研究の現在とこれから

年 月	調 査・論文等	調査者(報告者)	文 献
1969. 2	綾瀬市上土棚遺跡の発掘調査	明治大学	
1969. 2	綾瀬市寺尾代官遺跡の発掘調査	明治大学	1991 明大博物館報 6
1969. 4	大和市月見野遺跡群の第2次発掘調査	明治大学	
1970. 2	大和市相模野No.149遺跡の発掘調査	相模考古学研究会	1989 大和市調査報告書 34
1970. 12	南老名市上今泉谷遺跡の発掘調査	渡辺 勲	1971 海老名市教委の機関報
1971. 8	綾瀬市小園前遺跡の発掘調査(相模野編年の資格提示)	相模考古学研究会	1972 綾瀬町調査報告書 1
72. 3-73. 12	綾瀬市地蔵坂遺跡の第1～3次発掘調査	相模考古学研究会	1974 綾瀬町調査報告書 2
1975. 3	綾瀬市福見寺遺跡の発掘調査	相模考古学研究会	1979 神奈川考古 6
1976. 5	相模野編年の提示	矢島國雄・鈴木次郎	1976 神奈川考古 1
1976. 6	広域火山灰ATの発見	町田 洋・新井房夫	1976 科学 46-6
1977. 7-12	綾瀬市寺尾遺跡の発掘調査(大規模な行政発掘の開始)	神奈川県教育委員会	1979 県史文調査報告 18
79. 4-80. 3	大和市上和田城山遺跡の発掘調査(※)	大和市教育委員会	1979 大和市調査報告書 2
1979. 12	神奈川考古第1回シンポジウム	神奈川考古同人会	1979 神奈川考古 7 1980 神奈川考古 8
1982. 11	神奈川考古第2回シンポジウム	神奈川考古同人会	1983 神奈川考古 16
1988	相模野段階編年の提示	諏訪明順	1988 神奈川考古 24
1989	石器文化研究会発刊(1985) 研究集「AT降灰以前の石器文化」	石器文化研究会	1989 石器文化研究 1
1990-1994	綾瀬市吉岡遺跡群の発掘調査(B5層から最古の石器群出土)	かながわ考古学財団	1996 財団調査報告 7
1994	旧石器時代研究プロジェクトによる共同研究の開始	かながわ考古学財団	1994- かながわの考古学
1997. 5	用田バイパス関連遺跡群ローム層中出土炭化材に関するセミナー	かながわ考古学財団	1998 同誌録集
1997	相模原市中央区田名向原遺跡の発掘調査(「居住状況」を発見)	同遺跡群発掘調査班	2003 相模原市調査報告 30
2001	考古学講座「相模野旧石器編年の到達点」	神奈川県考古学会	2001 考古学講座予稿集
2002	吉岡遺跡群と用田島房原遺跡の遺跡間接合の発見	かながわ考古学財団	2002 財団調査報告 128, 153
2003. 12	日本旧石器学会設立	日本旧石器学会	2003 旧石器研究 創刊
2010. 5	日本旧石器時代遺跡のデータベース作成・刊行	日本旧石器学会	2010 日本列島の旧石器時代遺跡

2. 相模野第1期

日本列島における人類の痕跡は、加速器質量分析(AMS: Accelerator Mass Spectrometry)を用いた放射性炭素年代測定法による較正年代は今から38,000年前(中村2014)を遡ることのない測定年代値に始まる。

列島内の最古級の石器群は、熊本県石の本遺跡8区下層・沈日遺跡VIb層、静岡県井出丸山遺跡第1文化層・富士遺跡第1文化層、東京都西ノ台遺跡X層・中山谷遺跡X層・鈴木遺跡御幸第一地点第IV文化層・武蔵台遺跡X層、千葉県草刈遺跡C区第1文化層など列島の旧石器時代の遺跡文化層数全体からみれば0.1%の遺跡出土数にも及ばないが、それだけに貴重な遺跡である。神奈川県下では綾瀬市吉岡遺跡群D区第5黒色帯(以下B5層)出土資料(白石・加藤編1996 以下報文)が第1期唯一最古級の石器群である。

相模川支流の目久尻川左岸の座間丘陵樹状谷頭の東端標高39 m前後のD区では、6ヶ所の集中地点から100点を出土した。出土層序は相模野第2スコリア(以下S2S)の上位(Y-103)と下位(Y-100・99)に挟まれた、地下水による酸化還元グライ化した「緻密な砂質泥じりの層」の青灰色土層である。出土資料の91点がチャート製で、その他は凝灰岩系と頁岩系であり、風化の極めて乏しい信州系黒曜石製剥片1点が出土している。

なお、B5層上面出土として刊行された大和市No.159遺跡第II文化層(村澤編1996)は、その後報告者によってB4層下部と訂正されている。L5とされた「明るい層」は近隣の層厚比較からB4層間層黒色帯である。

また、大和市上草柳遺跡群大和配水池内遺跡(麻生編2008)では、B5層下部(S2S直上)採取の微細炭化物によって相模野台地では最も古いAMS年代が測定されている。補正年代は32,620±170BP(1AA-62325)であり、較正年代をIntCal13で変換すると、37,100-36,090 calBP(範囲は2σ:95.4%、一の位は四捨五入 以下同)、中央値で36,600 calBPを遡る。また、樹種は針葉樹のトウヒ属を同定している。

吉岡遺跡群D区B5層出土石器は、層理面で剥離した分割剥片の先端部や一部に数回の浅い調整加工や、剥片縁辺に刃こぼれが観察されるなど、厚みのある矩形小形剥片を素材とする石器群である。剥片剥離工程は粗雑で、剥片類は螺番剥離や折損、打端裂痕が器体全体に及ぶなどの裂片や転離を含む。なお、横長剥片素材の端部加工痕(報文第20図23)を「裏面鋸歯状石器」(竹岡2005)とすれば、石の本・沈目両遺跡の朝鮮系「鋸歯縁石器群」(長井2016)の拉散現象も可能となろうか。ただし、珪質頁岩製の単剥離単設打面石核から三枚以上の連続剥離痕を有する基部側縦長剥片(第1図7)は本石器群においては一際特異である。

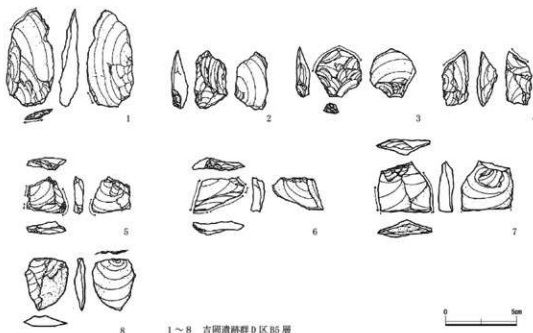
なお、チャート製小形剥片石器群は武蔵野台地の西ノ台・中山谷・鈴木遺跡御幸第一地点の石器群と頗る共通し、Xb層上下にS2Sの上下層を検出するとB5層石器群とXb層石器群の層序の同時期性を示そう。

また、愛鷹山麓最下層の井出丸山遺跡第1文化層(高尾・原田編2011)は、浸食した開析谷を臨む丘陵上にあり、吉岡D区B5層と共通する。なお、6点の炭化物のAMS測定補正年代(IAM-63169~63174)は、IntCal13で変換した中央値は37,210calBPを測定する。また、樹種は落葉広葉樹のタラノキとエノキ属を同定している。

石器群は両設打面や打面転位石核から横長・縦長剥片を剥離する整然とした剥片剥離工程の小形剥片石器群である。吉岡・西ノ台・中山谷・鈴木御幸第一地点のチャート製小形剥片石器群と時期的共通性があるものの、石斧所持の石器群との近似性が異なる。また、90%以上の在地産ホルンフェルス製を占めるが、南海上の神津島恩馳島、北山間の和田鷹山・蓼科冷山産黒曜石産地へ直線110km、北東150kmの湯ヶ峰産下呂石などの遠隔地ブランド石材を補完する点は南関東のチャート製小形剥片石器群の石材環境と極端に異なる。

第1期石器群は列島規模での器種・石材組成にバラツキがあり、第2期前半以降の統一的な時期変遷とは異なる地域的モザイクを呈する。38,000年前を遡る具体的かつ確実な石器群が未検出な現在、異集団の到来と交代(仲田2016)を思考するなど、中期・前期旧石器時代の否定・中庸・肯定の議論は継続しよう。

(砂田佳弘)



1～8 吉岡遺跡群D区B5層

第1図 相模野第1期の石器

3. 相模野第二期

相模野台地は南関東地域で火山灰の供給源に近いローム層の堆積が厚く、層位区分の解像度は高く石器群の変遷を検討するのに良好な地域である。一方、ローム層の堆積が厚いため相模野第Ⅰ・Ⅱ期の調査事例は武蔵野台地等と比べて少なく、後期旧石器時代後半期は相模野台地、前半期は武蔵野台地の調査成果から議論される場合が多い。

1988年に諏訪問によって、それまでの調査成果を基に石器群を12段階に区分した。この相模野段階（編年）は、相模野Ⅴ期区分を層位的に細分し石器群の変遷を捉えたものとして、他地域の石器群を細分する際の基準となっている。相模野第Ⅱ期は、相模野段階では段階Ⅱ～Ⅳに細分されている。なお、段階区分と層位の関係は、2010年の『講座日本の考古学1』の諏訪問論文に従った。

段階Ⅱ L5上部～B4層上面を出土層位とする。本層位は吉岡遺跡群基本層位において層厚が1mを超えており、B4層は間層を挟んで上・中・下に細分されている。大和配水地内遺跡第Ⅳ文化層、栗原中丸遺跡第Ⅸ文化層のL5層、吉岡遺跡群D区B4層下部、吉岡遺跡群C区B4層中部、吉岡遺跡群D区B4層上部、津久井城跡馬込地区第6文化層のB4層石器群が幾つかの時期区分で捉えられる可能性が高い。

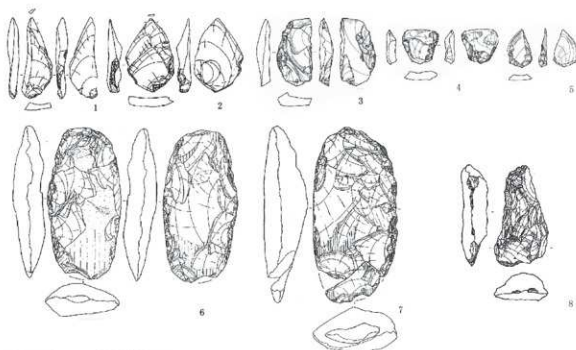
B4層中部～L4層では、ガラス質黒色安山岩を主石材とし黒曜石が一定量用いられている。石器はナイフ状石器、台形礫石器、楔形石器等がみられ、局部磨製石斧が検出されている。また、大和配水地内遺跡第Ⅳ文化層は基部加工のナイフ形石器が出土しており、台形礫石器は検出されていない。

B4層上部は、ガラス質黒色安山岩が主石材として用いられ、ナイフ形石器が主体を占め台形礫石器は出土していない。斧形石器は打製石斧である。以上石器群の様相が、B4層の中部と上部で変わっており、少なくとも2時期に区分される可能性もある。なお、二側縁加工の茂呂系ナイフ形石器の存在が不明確であること、台形礫石器や石斧が主たる器種組成であり、その後の石器群とは大きく一線を画することなどから、ここまでの石器群を相模野第Ⅰ期と捉える考え方もある。

段階Ⅲ B3層下部～中部を出土層位とする。遺跡数は少なく資料的制約があるが、黒曜石の使用頻度が高くなっている。上和田城山遺跡4次第Ⅲ文化層のB3～L4層、吉岡遺跡群C区B3下部、地蔵坂遺跡第Ⅶ文化層が相当する。上和田城山遺跡では厚手の縦長薄片を素材に二側縁加工のナイフ形石器が検出されている。調整加工は交互剥離が施されており、武蔵野台地第Ⅶ文化層のナイフ形石器と共通性がみられる。本段階になると斧形石器は検出されていない。

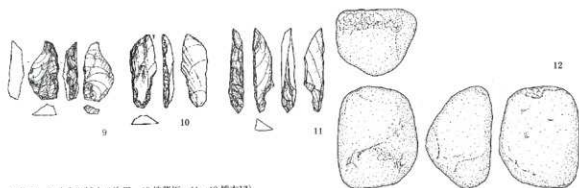
段階Ⅳ B3層上部～B2層下部を出土層位とする。L3層中のSIS（相模第1スコリア）直下にAT降灰層が含まれる。神奈川の旧石器時代研究の画期となった寺尾遺跡第Ⅵ文化層、藤沢校地内遺跡第Ⅵ文化層、第Ⅴ文化層、大和配水地内遺跡第Ⅳ文化層が挙げられる。寺尾遺跡第Ⅵ文化層は鈴木遺跡第Ⅵ層と合わせて武蔵野第Ⅵ層石器群（寺尾期）の基準資料である。信州産黒曜石を主に用いて、二側縁加工のナイフ形石器を多数出土している。剥片剥離は真正の石刃技法が用いられ多量の石刃が伴っている。

本段階は、AT降灰層を挟んだ上下の黒色帯を含んでおり、武蔵野台地の時期区分と異なる。B2層は武蔵野台地の第1黒色帯に対比されることから、武蔵野第Ⅴ～Ⅳ層下部段階の第Ⅴ層下部を含むことになる。武蔵野第Ⅴ～Ⅳ層下部の捉え方も一律ではなく、第Ⅴ層石器群と第Ⅳ層下部石器群の違いよりも第Ⅴ層石器群と第Ⅵ層石器群の方が近いとする考え方もある。その意味では、B2層下部を取り込む形で段階Ⅳを設定するのも一つの捉え方であるが、AT降灰層をもって後期旧石器時代を前半と後半に大別するのであれば、B2層下部の石器群を前期と後期の移行期に置くほうが分かりやすい。（西井幸雄 島中俊明）

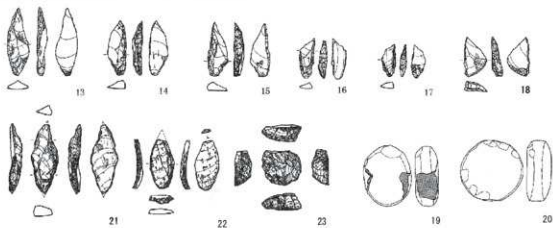


段階Ⅱ (1・2・6・7 大和配水池内XIV、

3～5 津久井城跡馬込地区、8 吉岡遺跡群D区B4)



段階Ⅲ (9 上和田城山4次皿、10 地蔵坂、11・12 橋本VD)



段階Ⅳ (13～20 寺尾VI、21～23 鹿沼湖南キャンパスV)



第2図 相模野第Ⅱ期の主な石器

4. 相模野第三期

「第三期」は、矢島国雄・鈴木次郎によりB2UからB2L上部（B2L層下部を除いたB2層全層）に生活面を持つ石器群とされ、基部加工と切出形のナイフ形石器、尖頭器様石器（角錐状石器）、母指状搔器、鋸歯状の調整加工を施した削器を特徴的な石器として設定された（第3図 矢島・鈴木1976、1978）。その後、層位的出土例の検討によって石器群の段階的把握を行った諏訪間順によって「段階V」に設定された（諏訪間1988、2001）。諏訪間は、層位的範囲をB2L下部からB2Uまでとしており、矢島・鈴木が設定した層位的範囲とは若干の違いはあるものの、両編年は概ね合致し、支持されている。

これに対し、織笠昭は、その後に発見された資料の内容を含めて本時期の石器群を再検討し、本時期の層位的範囲をB2L底部からL2下部付近と位置付け、矢島・鈴木、諏訪間に比べ、本時期の編年の範囲を広範に捉え直した（織笠1987、2001など）。この差異が顕著に認められるのが、慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス遺跡第V文化層の石器群の評価である（第2図21～23）。鈴木はこれらを第II期（段階IV）に帰属させ、後続する石器群を特徴付ける石器の出土が見られることから、第三期への移行期的な様相としている（鈴木2001）。一方、織笠はナイフ形石器の形式的特徴やスクレイパー、石材のあり方から第三期と位置付けている（織笠2001など）。諏訪間は織笠が捉えている該期の層位的範囲と近いが、二側縁加工ナイフ形石器と石刀・縦長剥片剥離技術の強い関係性を保持していることから、鈴木と同様に前段階の所産としている（諏訪間1996など）。服部隆博、栗原等は、第II期と第三期の移行期的な資料と捉えているが、栗原等は敢えて位置付けるなら、使用石材の主体が第II期に特徴的な信州系黒曜石から第三期に特徴的な箱根畑産黒曜石に変化していることから、石材獲得上の社会的システムが既に新たな段階に入っていると捉え、本石器群は第三期の初期の石器群と位置付けている。いずれにせよ、前段階との構造的関連性を顕著に観察できる石器群と位置付けられよう。本遺跡の発見により、第三期の石器群が前段階の石器群と決して断絶的な関係にあるのではないということは明確になったと考えられよう。

次に剥片剥離技術の変化と広域編年を検討する上で重要な要素について紹介する。本時期の石器群は、前後の時期が石刃技法を技術基盤とした石器群であるに対し、横長・幅広剥片剥離技術の基盤とした石器群である。この技術を用いて作出される代表的な器種の一つに国府型（系）ナイフ形石器が存在する。国府型（系）ナイフ形石器の発見例は、数量的には少量ではあるものの、海老名市の柏台長ヲサ遺跡など本時期の石器群の中に組成することは各遺跡の出土状況から明らかであり、本時期の石器群の広域な編年の位置付けを考える上で極めて重要な資料と捉えられる（第3図4）。

近年、当財団の旧石器時代研究プロジェクトチームが神奈川県内の国府系ナイフ形石器の集成を行い、7遺跡11文化層21点の資料を抽出した。しかし、明確な瀬戸内技法を有した資料は、本県では今のところ見つかっていない（鈴木、晶中・三瓶・大塚ほか 2016）。この傾向は、南関東地域全体に共通しており、国府型ナイフ形石器製作に適した石材が供給されにくい地域との指摘もある（会田1994）。石器製作に適さない環境下での当該石器の出土には、製品の搬入や有底横長剥片製ナイフ形石器の生産等の類似技術の登場（橋本2017）が考えられる。後者については、県内の遺跡において横剥ぎ石核が認められることから、類似技術の存在は確実と考えられる。

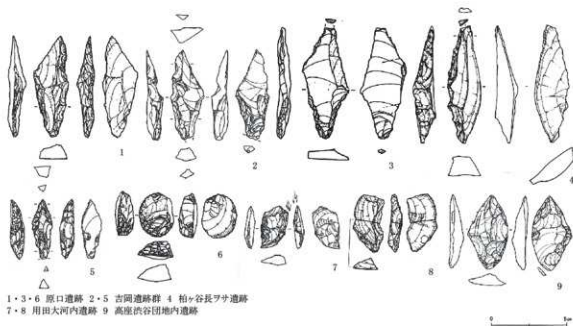
本時期の遺跡数は、本県の各時期の石器群の中でも最も多く100箇所以上の存在が確認されている。関東地方というエリアまで視点を広げてみると、この時期の石器群は北関東エリアの遺跡数は減少し、代わって南関東エリアでの遺跡数が集中することが分かっている。これらを北関東からの集団の南下・移住とする考

え方もあるが、前段階の立川ローム層VI層段階から遺跡数の減少は始まっており、遺跡数の増加要因が北関東エリアからの南下・移住とは限らないとの見解もある（関口2008）。また、北関東エリアから南関東エリアへの製品の南下が確認されていないという指摘もあり（橋本2017）、必ずしも本時期の遺跡数の増加が、北関東エリアからの人々の南下・移住とは限定出来ない様である。

本時期の石器群のもう1つの大きな特徴としては、礫群の多さが指摘される。ほぼ全ての遺跡で検出されるというくらい、各遺跡から普遍的に検出される。また、礫群とは異なるが、磨石の出土状態も特徴的なものが確認され、一定の範囲内に磨石のみがまとまって出土するという状態もこの時期の特徴である。

続く第四期・段階VIの石器群は、再び石刃等の縦長剥片剥離技術を主体とした石器群が登場する。また、これと併せ、槍先形尖頭器が出現する。しかし、その萌芽は本段階に既に確認されている。大和市の県営高座渋谷団地内遺跡では、B2層上部から本時期の石器群と共に安山岩・黒曜石製の槍先形尖頭器が出土している。上層のL2層からは大和市Na210遺跡や藤沢市の用田島居前遺跡から槍先形尖頭器の出土が確認されており、槍先形尖頭器の出現・使用石材・出土層位等を総合的に観察すると、第三期・段階Vの石器群は、後続する石器群にも段階的に推移していったと考えられるのではないだろうか（第3図9）。

第三期・段階Vの石器群は、前後の石器群と技術的な断絶があったように見られがちであるが、それを繋ぐ石器群の存在が前後で確認されており、決して突然変異的に現れた石器群ではないと位置付けられよう。但し、遺跡数の増加や石器形態・使用石材の変化から、当時の人々のライフスタイルに大きな変化が生じたことは否定できない。近年、新東名高速道路の建設により、これまで旧石器時代の遺跡の発見例が極めて少なかった相模川以西地域からも本時期の石器群の存在が確認されている。西部に行くほど層位の堆積は厚くなり、相模野台地と同様な規模でB2層までの調査を行うことは極めて困難であるが、新たなフィールドとして細々とながらもデータの蓄積が進んでいる。当時の人々のライフスタイルの変化を総合的に把握し、相模野台地を中心とした本県の当該期の石器群の評価を再構築するためには、相模川以西出土資料との比較・検討は重要な作業であり、今後の本県の旧石器時代研究に欠かせない視点であろう。（脇 幸生・栗原伸好）



1・3・6 原口遺跡 2・5 古岡遺跡群 4 柏ヶ谷長ヲサ遺跡
7・8 用田大河内遺跡 9 高座渋谷団地内遺跡

第3図 相模野編年第三期の主な石器

5. 相模野第Ⅳ期

相模野編年案が発表された当初、相模野第Ⅳ期は、L 2層およびB 1層から出土する石器群をまとめて捉え、ナイフ形石器を主体とする石器群に槍先形尖頭器が一部加わるものとして設定された。石器製作技法は、砂川型刃器技法に代表される石刃を大量生産する技術の特徴とし、こうした技法から作出される石刃を元にした茂呂型ナイフ形石器が特徴の一つとして挙げられる。ただし、第Ⅳ期にみられるようになる槍先形尖頭器は石刃との間わりは薄いと判断された。

その後の出土事例の増加や研究の進展も相まって、相模野第Ⅳ期は、B 1層中～L 2層に生活面をもつ前半とB 1層上部～上面に生活面をもつ後半とに細分された。Ⅳ期前半は発達した石刃技法と石刃を用いたナイフ形石器、槍先形尖頭器は数こそ少ないが、先端にファシット状の剥離痕を持つものが特徴的に見られるとしている。いわゆる有樋尖頭器である。Ⅳ期後半は槍先形尖頭器が量的に多くなっていくこと、前半の特徴とされる砂川型刃器技法がほとんど見られなくなり、ナイフ形石器の形態が多様化することを特徴としている。ナイフ形石器は小形の幾何形ナイフ形石器が多く見られるのも特徴の一つと言える。また前半はいわゆる在地系の凝灰岩などの石材を多用するのに対し、後半は黒曜石の使用が多く見られることも一つの特徴として挙げられている。

こうした編年研究は、その後も段階的把握として、段階Ⅰ～Ⅹまでとして再検討されたが、相模野第Ⅳ期については、前半を段階Ⅵ、後半を段階Ⅶとし、そのまま踏襲された捉え方がされている。特に段階Ⅶは砂川型刃器技法の崩壊段階、ナイフ形石器文化の終末として設定されている。

これら編年研究の成果は、今現在も、変ることなく神奈川県内に限らず、南関東における研究の柱とされている。こうした編年を見返すたびに、当時の研究者の情熱、熱量がひしひしと伝わってくる感覚に陥るのは私だけだろうか。

県西部では前項でも取り上げられている通り、土壌の堆積が厚く、秦野市周辺ではローム上面まで2m～3mを測るのが常である。

さらに相模野第Ⅳ期の遺跡が包含されている深さまではさらに2m～4m掘り下げなければ到達しないという土壌の堆積環境となっている。このことは各遺跡（文化層）が分離された状態で真空パックされやすいというメリットがある一方、4m～7mを掘削するような開発行為自体がほとんどなく、当該期を対象とした調査が行われることもほとんど皆無であった。まして発掘調査によって発見される確率については言わずもがなであり、結果としてこれまで出土事例が積み上がってこなかった証左ともいえる。

しかし近年、新東名高速道路の新設工事等の大規模開発に伴う埋蔵文化財発掘調査によって、これまで希薄であった神奈川県西部の旧石器時代遺跡の発見が相次いでいる。

相模野第Ⅳ期の検出事例では、秦野市養毛小林遺跡B 1層下部において前半のナイフ形石器の製作址を検出している。

本遺跡は2018年3月段階で未だ調査中であることから、詳細な報告は時を待たなければならないが、見学会や速報展示を通して情報が開示されている。

同遺跡では、相模野第Ⅳ期前半に帰属する文化層が調査範囲の東端で検出した。L 1 H層下部の石器群とは平面的には重複するような分布を見せるが、垂直方向には間層があり、それぞれの文化層は完全分離している。

相模野第Ⅳ期に限るわけではないが、こうした県西部における資料数の増大や土層観察記録の蓄積を受

け、当プロジェクトでは県東部から相模野台地や伊勢原台地を抜け秦野までの県内の出土事例や土壌堆積状況の対比を行ない、県下の全容解明に向け注力している。

数年続く予想される発掘ラッシュの中、引き続き対比作業を継続し、神奈川県西部から見た丹沢や箱根を越えた周辺地域を視野に検討を加えてみたい。
(三瓶裕司・大塚健一)

6. 相模野第Ⅴ期

前半 養毛小林遺跡の興隆

新東名建設事業に伴う秦野市養毛小林遺跡(公益財団法人かながわ考古学財団編 2017b)では最集中地点500㎡から信州系の黒曜石と箱根系のガラス質黒色安山岩と黒曜石を素材とした254点の槍先形尖頭器と3万点を超える剥片・砕片類が出土している。L1H層下部層(Y-137-1・2より下位)出土の槍先形尖頭器を主体とする石器群は21,400calBP前後であり、大形のガラス質黒色安山岩製の製品は長さ8cm前後幅2~4cm、小形の黒曜石製とガラス質黒色安山岩製は、長さ3cm前後幅2cm未満と長幅比に幅があるが、中形のガラス質黒色安山岩製と黒曜石製の製品は長さ5cm前後幅2cm未満に収斂する。槍先形尖頭器の目的形態は微視的観察と接合作業によって明らかとなるが、刺突時の衝撃剥離による先端部の欠損品、あるいは被熱による赤化、白色化、ヒビ割れ等の痕跡を有する製品を含んでいる。遺跡は槍先形尖頭器の製作跡のみならず、移動帰郷した当時の拠点集落の一端をも示している。

養毛小林遺跡石器群の全貌は出土品整理と報告書刊行に期待せざるを得ないが、県内では大和市月見野遺跡群の同時期出土点数を凌駕し、日本列島内でも有数の槍先形尖頭器石器群の大遺跡である。群馬県桐生市新里町の武井遺跡群は60年以上も継続調査する遺跡であり、複数時期を含むが養毛小林遺跡と同時期の遺跡である。保存地区を含む遺跡は6万㎡、槍先形尖頭器1,330点、うち完形品420点、全体で20万点以上の石器類を出土する巨大遺跡(関口 2013)である。ただし、養毛小林遺跡と武井遺跡群の分布密度は総数(10㎡)・槍先形尖頭器(100㎡)で600点:3点・50点:2点となり、養毛小林遺跡の出土密度の高さを物語っている。

神奈川県内では、綾瀬市寺尾遺跡第Ⅱ文化層では木葉形の両面加工・片面加工・周縁加工と各形態があり、凝灰岩・チャート・黒曜石など多くの石材種を使用している。寺尾よりやや上層から出土した清川村宮ヶ瀬遺跡群サザランク遺跡第Ⅲ文化層、藤沢市用田南原遺跡第Ⅱ文化層は、箱根系ガラス質黒色安山岩製の剥片素材を搬入し、多様な形態の両面加工の槍先形尖頭器を製作している。

後半 細石刃石器群の出現

細石刃石器群は日本列島全域で出土し、相模野台地では、細石刃石器群はL1H層上部~L1S層から出土し、石材、細石刃の大きさ、細石刃核を中心とする細石刃製作工程などの特徴が出土層位によって異なることが明らかとなっている(砂田 1994)。

L1H層上部から出土した綾瀬市吉岡遺跡群B区、藤沢市代官山遺跡第Ⅲ文化層、横須賀市打木原遺跡、西富岡・向畑遺跡では伊豆柏峠を中心に箱根畑宿産の黒曜石製の細石角礫や分割剥片を石核素材として「代官山細石刃製作工程」の細石刃石核から長さ10mm余りの極小の細石刃を剥離している。伊勢原市西富岡・長竹遺跡では信州系黒曜石製細石刃石器群が、ホルンフェルス・安山岩製の下腿れ厚手の槍先形尖頭器、ホルンフェルス製の礫器が配石を伴っている(麻生 2016b)。礫面・層理面・分割面の非調整打面とした側面調整のみによる細石刃製作工程は伊豆箱根系黒曜石を素材としたが、新たに信州系が加わることとなった。

なお、吉岡遺跡群のAMS測定値16,860±160(Tka-11599)、16,490±250(Tka-11613)をIntCal13で算定する

と20,750-19,290calBPであり、中央値20,020calBPを測定する。

B0層下部の上粕屋・石倉中遺跡では、神津島産黒曜石製の細石刃・細石刃核を含む3,500点以上の関連石器が出土している。焼土を伴う大形配石遺構はこの時期の一端を顕している。

また、B0層下部の秦野市葛蒲平台遺跡ではガラス質流紋岩製の細石刃石器群が2,000点余り出土している。石核形態にとらわれない非調整打面の打面転位による細石刃石核で、17,600calBPが算出されている。

B0層からL1S層下部では、サザランケ遺跡第II文化層など信州系黒曜石を限定利用する時期から綾瀬市報恩寺遺跡のように神津島産黒曜石に凝灰岩やチャートなど在地系石材を利用する遺跡が加わる。L1S層上位の大和市下鶴間長堀遺跡第I文化層や同市上和田城山遺跡第I文化層では、凝灰岩など在地石材を中心に利用する。また、非黒曜石製の細石刃石核の形態は下鶴間長堀遺跡第I文化層を除き角柱状の「野岳・休場型」となり、細石刃を含め石器群全体が徐々に大形化する。下鶴間長堀遺跡第I文化層の細石刃石核は大形船底形態の「船野型」となる。これらの細石刃石器群は、西南日本一帯とも共通し、相模野台地の層位的変遷は他地域の変遷過程を明らかにする上でも重要な出土事例となっている。

縄文時代草創期の石器群

16,000年前、日本列島では土器の登場とともに縄文時代草創期に移行する。同時期全遺跡で土器が出土するとは限らず、旧石器時代の石器製作を踏襲しながら主要利器が変遷する。

L1S層上部からは槍先形尖頭器主体の石器群が出土し、大和市月見野遺跡群上野遺跡第1地点第II文化層、同市長堀北遺跡第II文化層では、槍先形尖頭器とともに細石刃・細石刃石核が出土する。細石刃石核は、従来の剥片剥離工程の石核依存形態とは全く異なり、両面調整の大形槍先形尖頭器状石器を長軸方向に分解して細石刃剥離の打面を作出する削片系細石刃石核である。北海道島から本州島東北地方に分布する北方系細石刃技術基盤に立脚する。

綾瀬市寺尾遺跡第I文化層、同市吉岡遺跡群A区・C区、座間市栗原中丸遺跡第I文化層は、槍先形尖頭器の形態が石器群によって異なる。この時期長者久保神子柴文化と呼称する横断面三角形の大形打製石斧や小形刃部磨製石斧、大形槍先形尖頭器の出現と同時に消滅する。綾瀬市吉岡遺跡群A区では、大小石斧群・槍先形尖頭器を製作するが、出土層位、石器群種組成、石材種など検討すべき課題の多い時期である。養毛小林遺跡L1H層下部層出土地点の西北160m西側の丘陵尾根上L1S層下部からガラス質黒色安山岩製の槍先形尖頭器、東北頁岩製の掻削器が900点の剥片類と出土し、秦野市柳川竹上遺跡の標高265m丘陵頂部から東北頁岩製の大型槍先形尖頭器が単独出土している。

なお、長堀北遺跡第II文化層と大和市相模野No.149遺跡では有舌尖頭器、吉岡遺跡群C区では石鏃の新器種が散見され初め、新たな石器群への交代錯綜する時代の到来である。

また、黒色土層最下部から横浜市花見山遺跡、同市長津田宮之前遺跡、伊勢原市三ノ宮・下谷戸遺跡など有舌尖頭器を主体とする石器群が多数発見され、隆起線文土器が共伴している。伊勢原市神成松遺跡第5地点では微隆起線文土器、ガラス質黒色安山岩製の槍先形尖頭器、硬質細粒凝灰岩製の打製石斧等が出土し土器付着炭化物3点の中央値は13,620 calBPを測り(野尻 2014)、北東200mの神成松第9地点から神子柴型打製石斧未成品が出土した(神奈川県教育委員会編2017)。秦野市寺山中丸遺跡からは市内初の隆起線文土器を出土し、ガラス質黒色安山岩製の有舌尖頭器の製作跡が発見され、三廻部東耕地遺跡でも隆起線文土器無文部が出土している。この時期、槍先形尖頭器に有舌尖頭器や石鏃が組成し始める。

有舌尖頭器は、基部突出胴部長の「小瀬ヶ沢型」、基部胴部同等の「花見山型」である。神奈川県内では「花

見山型」が多数である。石材種は多摩丘陵の花見山遺跡や宮之前南遺跡では多摩川産チャート製を中心にガラス質黒色安山岩・流紋岩・珪質岩、丹沢南麓の三ノ宮・下谷戸遺跡では箱根産ガラス質黒色安山岩製など、在地石材を中心に利用する。

その後、爪形文土器を伴う大和市深見諏訪山遺跡第Ⅰ文化層では、有舌尖頭器は幅広い槍先形尖頭器とともに僅かとなり、先端部と基部が屈折し腸挟りは三角形織と共通する。

なお、秦野市戸川諏訪丸遺跡の漸移層上面からは厚手爪形文土器の同一個体破片30点、同一層序から箱根産黒曜石製の凹基三角形織1点、中粒凝灰岩製礫器3点を出土し、炭化物粒3片の中央値は12,600caBPを測定している。(砂田佳弘)

おわりに

新東名高速道路、国道246号線バイパス建設と県道等のアクセス道路の建設に伴う本発掘調査において伊勢原・秦野地区ではかつてない大規模調査が始まり10年余を経過した。

この間、旧石器時代から近世に至るまで数多くの発掘調査が進捗し、とりわけ縄文時代草創期から旧石器時代の新たな遺跡が次々と検出されている。

伊勢原丘陵では大半の遺跡で旧石器時代の調査を実施し、第Ⅳ期前半の茂呂系ナイフ形石器再登場の時期と、第Ⅳ期後半の月見野期を中心に、第Ⅴ期後半の細石刃石器群の新たな遺跡が発見されている。秦野盆地では第Ⅴ期前半の糞毛小林遺跡の成果が屈指で、質量ともに列島内有数の遺跡である。その他の地域でも同時期の石器群を小規模ながら検出している。

これまで、相模野台地を中心にすすめられてきた旧石器時代の編年作業は相模川以西の伊勢原・秦野地区の新発見によって、従来不明であった石器群間の微視的変遷が地域テフラを鍵として新たな編年構築が可能となろう。これまで以上に列島における石器群の編年作業をさらに推し進めるとともに日本標準の編年網作成を大いに期待するのである。(砂田佳弘)

【引用・参考文献】

- 麻生順司 2008 『神奈川県大和市上草柳遺跡群大和配水池内遺跡Ⅰ発掘調査報告書—本文編—』 p. 346 大和市Na199遺跡発掘調査団
- 織笠 昭 2001 「相模野ナイフ形石器文化の終焉」『平成12年度 神奈川県考古学会考古学講座』 神奈川県考古学会 pp. 55-72
- 神奈川県教育委員会編 2008 『かながわの遺跡展2008・巡回展 発掘された石の道具—旧石器時代～弥生時代の石器・石製品—』 p. 29 神奈川県教育委員会 * 第1期・5期の内容は本書の編年に基づき改編した。
- 旧石器時代研究プロジェクトチーム 2016 「神奈川県における国府系ナイフ形石器群の様相」『研究紀要21 かながわの考古学』(公財)かながわ考古学財団 pp. 1-10
- 栗原伸好・島中俊明・大塚健一・井間文明・加藤学 1996 「Ⅴ～Ⅳ層下部の石器群～相模野台地の様相～」『石器文化研究』5 石器文化研究会 pp. 25-48
- 鈴木次郎・矢島國雄 1978 「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』有斐閣 pp. 154-182
- 諏訪問 順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について—層位的出土例の検討による石器群の段階的把握—」『神奈川県考古』24 神奈川県考古学会 pp. 1-30
- 高尾好之・原田有紀編 2011 『沼津市文化財調査報告100 井出丸山遺跡発掘調査報告書』p. 120 沼津市教育委員会
- 中田大 2016 「日本旧石器時代の現代人的行動と交代制」『現代思想』44-10 pp. 150-164 青土社
- 村澤正弘編 1996 『大和市文化財調査報告書第63集 大和市Na202遺跡第1地点1～3次調査・大和市Na159遺跡』p. 58 大和市教育委員会

神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅷ

－後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その9－

縄文時代研究プロジェクトチーム

I. はじめに

縄文時代研究プロジェクトチームでは平成21年度より後期前葉期堀之内式土器文化期の様相についての研究を行っており、今年度で9年次目を迎える。初年度以降の研究の基礎となる遺跡のデータベースを報告書を中心とした文献から作成し、それとともに、堀之内式土器文化期の研究略史の整理と主要遺跡地名表・参考文献リストの作成と提示を行った。それ以降、住居址検出遺跡を中心とした主要遺跡の集成、土器編年案構築に向けた一括出土事例や貝塚等の層位的出土事例の検討、堀之内1式土器、堀之内2式土器の編年案の作成、主要遺跡の分布図の作成を行い、そして平成26年度では検討した堀之内1式土器・2式土器の編年案にもついた住居址のデータシートと、編年案で得られた時期ごとの主要な住居址形態を抽出した集成図を作成するとともに、平成27年度では住居址のデータシートから各段階の住居址数から見た遺跡の分布状況、住居址の平面形態・張出部形態、平面規模、主柱穴配置・壁下構造・建替え、拡張、炉址、埋甕・その他付帯施設等の要素を抽出し検討を行い、堀之内式土器文化期の住居址の様相を明らかにした。平成28年度は出土遺跡の資料の増加を見て報告書を基本とした資料の補遺に努めたが、今年度は平成26年度、27年度の住居址研究を受けて、堀之内式土器文化期の文化的様相をさらに明らかにするために住居址以外の遺構の様相について扱うこととした。対象とした遺構は、墓坑・埋葬人骨、配石遺構、堅穴状遺構、掘立柱建物跡、土器集中、屋外埋設土器、貝塚・住居内貝層、焼土址・灰土址・炭化物集中、集石、その他の土坑、木道、帯状粘土列、水場遺構であるが、貯蔵穴については次年度以降に掲載することとする。

住居址以外の遺構を整理するため、まず遺構種別ごとに分類し、データベースとなる法量などを記載した属性表を作成した。今回の各遺構についての論述はそのデータベースに基づいている。

各遺構のうち、墓と配石遺構や、墓と貯蔵穴、その他の土坑などについては区分が不明瞭である場合が多々あったため、各遺構の論述担当で適宜区分基準の調整を行ったが、基本的には報告書に記載された遺構の評価に準拠しており、名称も報告書に従っている。

また、今回扱った遺構は、平成21年度に収集した報告書を基本とした基礎的な遺跡のデータベースと平成25年度と28年度に追加した遺跡のみから抽出している。しかし、近年継続中の第二東名高速道路建設等に伴う広域、大規模な発掘調査によって伊勢原、秦野地域において縄文時代では特に縄文後期前葉から中葉にかけての集落址等が顕著に確認され膨大な資料の増加をみており、遺跡見学会や遺跡調査研究発表会等によって世間にも知られるところとなっている。仮にこれらの資料を加えた場合は前年度以前も含めて内容が変化するほどの影響があるものと考えられるが、今回は報告書に刊行された資料のみを扱うこととし、これらについては触れないことをお断りさせていただきたい。

(粕谷)

II. 住居址以外の遺構

1. 墓坑・埋葬人骨（第1・2図）

ここでは、堀之内式期の墓について分析する。対象としたのは、17遺跡436基の墓坑および埋葬人骨である。なお、墓としての判断基準は、人骨の有無、副葬品の有無、墓群の形成（平面形態・断面形態の類似性）等が挙げられるが、原則として報告書の記述に拠った。分析対象とした属性は、墓の種類、立地（集落内における位置）、平面形態、帰属時期、副葬品、地域性である。なお、貯蔵穴等の転用墓については、報告書に記述がない限りは除外している。また、報告書において堀之内式～加曽利B式期とされている伊勢原市下北原遺跡の第1配石墓群・第2配石墓群については、墓群全体に対する上部配石と個別墓としての配石墓・土坑墓の同時性について議論があるため、今回は分析対象から外している。特に石棺状をなす配石墓については、加曽利B式期以降に多い墓制であることも踏まえ、個別墓と上部配石の関係性および時期的な問題については、ここでは保留しておきたい。

まず墓の種類であるが、土坑墓428基、配石土坑墓（上部配石を伴う土坑墓）5基、埋葬人骨1体、土器棺墓1基となり、圧倒的に土坑墓が多い。なお、ここでいう埋葬人骨とは、貝塚等における墓坑を伴わない埋葬人骨のことであり、人骨が検出されていても、墓坑が見つかっているものについては土坑墓・土器棺墓としてカウントしている。

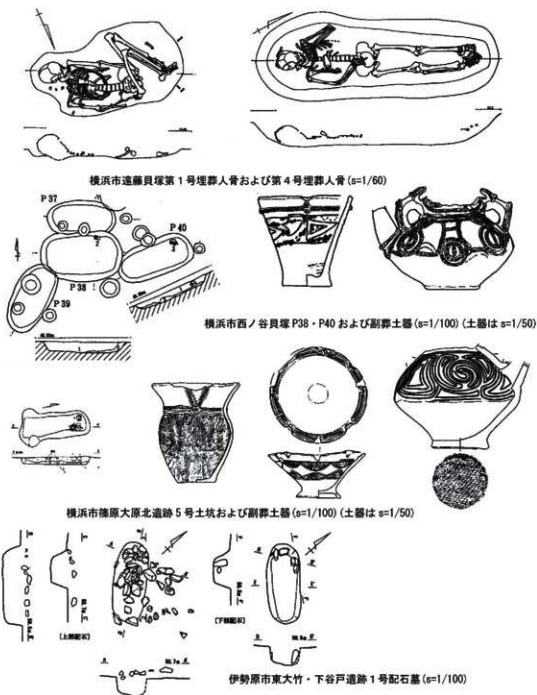
立地については、基本的に集落内に墓域を形成し、同時期の墓坑が集中する墓群をなす場合が多いようである。集落内における位置が分かる事例はそれほど多くはないが、居住域から僅かに離れた空白域に配される傾向にある。また、確定的なことは言えないが、堀之内式期の墓群は、続く加曽利B式期の墓群に比べると切り合い関係、密集の度合いが弱いように感じるのだが、どうであろうか。

墓坑の平面形態については、最も数の多い土坑墓について見てみると、隅丸長方形（隅丸長方形）299基、楕円形67基、長楕円形19基、長方形11基、不整長方形10基、不整楕円形10基、隅丸方形5基、不整長楕円形3基、円形2基、不整形1基、不整隅丸長方形1基、不整方形1基となり、長方形基調と楕円形基調に大きく分かれている。数の上からは隅丸長方形が多いのだが、次に述べる墓坑の帰属時期・副葬品の問題とも絡むので、堀之内式期の土坑墓は隅丸長方形が一般的であると一概には言えない。

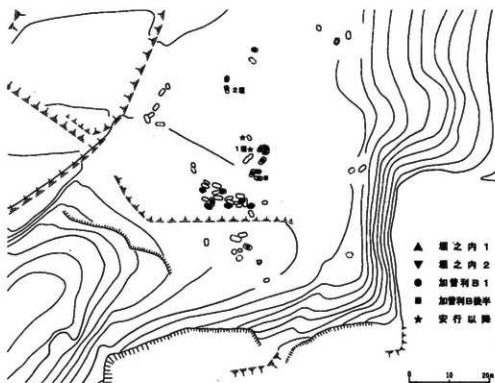
墓坑の帰属時期は分からないことが多いが、副葬品がある場合のみ明確に比定されうる。ただし、副葬品の有無は時期的な偏在の問題もあり、堀之内式期の副葬土器は概して少ない。例えば、横浜市三の丸遺跡の事例では、後期土坑墓群241基（加曽利B式期が多いとされる）のうち副葬品が検出されたのは31基（13%）であり、そのうち堀之内式期に属するものは僅か2基（1%）であった。今回対象とした墓坑についても、帰属時期を特定できたのは、副葬品がある事例（堀之内1式期8基・堀之内2式期12基・後期前葉2基）および特定時期の単純集落の墓群のみであり、時期別に集計すれば、堀之内1式期27基、堀之内2式期23基、後期前葉130基、後期前半140基、後期前葉～中葉110基、堀之内1式～加曽利B1式期4基、堀之内2式～加曽利B1式期1基となり、時期を特定できない場合が多い。これらの中には、加曽利B式期の墓坑も数多く含まれていることが想定されるのであり、前述した隅丸長方形の平面形態についても、加曽利B式期に一般的な形態として知られている。堀之内1式の土坑墓27基のうち、平面形態は隅丸長方形12基、楕円形基調14基となり、数量的には拮抗している。対して堀之内2式期の土坑墓22基では、隅丸長方形18基、楕円形4基となり、隅丸長方形が主体となっている。

地域性は言うまでもなく多摩川・鶴見川水系363基が圧倒している。これは横浜市内の調査事例が多いこ

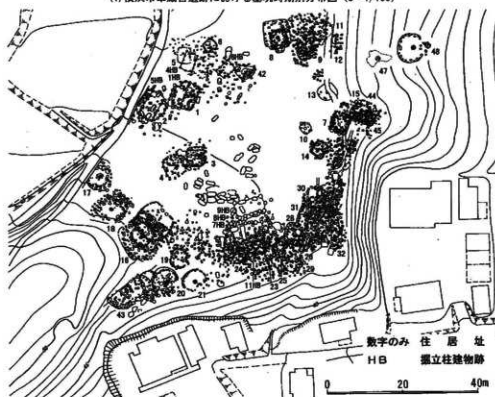
とに起因しており、調査されている集落遺跡の数量がそのまま墓坑の数量に反映されていると理解することができる。なお、数は少ないが、配石土坑墓5基はすべて相模川水系以西に分布しており、墓坑数量で卓越している横浜市内では1基も発見されていない。いずれにしても、今回の分析では、神奈川県内における堀之内式期の墓坑は土坑墓が主体であり、集落内に墓域を形成すること、平面形態は隅丸長方形・楕円形が多いこと、副葬品は少ないこと、多摩川・鶴見川水系に多く分布することが確認された。(野坂)



第1図 堀之内式期の墓坑(1)



(1) 横浜市華蔵台遺跡における墓坑時期別分布図 (S=1/100)



(2) 横浜市華蔵台遺跡における遺構配置図 (S=1/100)

第2図 堀之内式期の墓坑 (2)

2. 配石遺構 (第3図)

ここでは、報告書で「配石」と記載された遺構を対象としているが、報告書にて墓とされる配石や墓上の配石は墓坑としてあつたため除外する。対象となる遺跡数は22遺跡、配石遺構もしくは配石群の数は、報告書による記載をもとに79基を数える。これらの配石遺構を便宜的に付随もしくは関連する遺構で分類すると、①住居に隣接するもの、②下部土坑を伴うもの、③その他の遺構(焼土址や埋壺、ピット、炭化物等)を伴うもの、④遺構を伴わず単独のもの、に分けることができる。また、配石遺構にはさまざまな形状のものがあるが、ここでは、平面的広がり重視して列状、環状、塊状、散在に分けて記載した。

住居跡に隣接する配石遺構には列状(帯状)をなすものが多い。相模原市緑区はじめ沢下遺跡では、後期前葉に帰属する1区列状配石が確認されている。この列状配石は、15mほどの列状に配されたJ1号～10号配石(J8号配石のみ土坑を伴わない)およびJ1号、J2号列状配石からなる。この北側の斜面上に3棟の住居(J1号、J2号、J8号敷石住居)があり、列石はそれらの前面に展開する。愛甲郡清川村馬場(№6)遺跡では、10m×4mの範囲に弧状をなすJ1号配石が、北端に土坑状の掘り込みを伴って確認されている。出土遺物から堀之内2式期とされるが、J4号住居跡(加曽利B1式期)の張出基部に連なる位置にあり、加曽利B1式期に下る可能性もある。同遺跡J2号配石とされるものも、9m×5mの範囲に弧状に礎を配するもので、J1号、J2号掘立柱建物跡にまたがり、隣接地にJ4号、J5号焼土址がある。堀之内1式期と思われる下北原系土器が出土している。一方、伊勢原市下北原遺跡南側配石群(堀之内1式期)は、同時期の第21号、第22号敷石住居跡に隣接して発見され、第22号住居跡の張出基部付近から西に展開する。南側配石群は環状もしくは塊状をなす4つのユニットから構成され、全体として等高線に沿うように幅2.3mほど、長さ10.8mほどの列状を呈する。また同遺跡では、堀之内1式期の所産とされる北側配石遺構B群がある。北側配石遺構は、第3号環状方形配石遺構とそれを取り囲む配石群からなるA群と方形にめぐる配石群のB群から構成される。B群は10m四方ほどの帯状に礎を配するもので、一部に石棒や磨石、石皿を配し、下部遺構をもたない。本遺構は、2号、3号環状方形配石(いずれも加曽利B1式期)にはさまれた位置にある。くわえて同遺跡には、北側配石遺構から12mほど西の位置に該期の環状組石遺構もある。環状組石遺構は長径9.5m、短径6.5mの範囲に川原石を環状にめぐらせるもので、東側と北側、南側の一部に立石を伴うものの、下部遺構の検出はない。同様に住居に隣接する配石で該期に帰属する可能性があるものとして、秦野市曽屋炊土遺跡(1974年度調査)がある。等高線に沿って堀之内2式期～加曽利B1式期の住居が並び、それらを覆いながら横に連結する列石が構築される。報告で各遺構の時期について言及はないものの、5号敷石住居址炉体土器が堀之内2式で、1号、6号敷石住居址から出土した土器の多くが堀之内2式で、状況からみて最も新しい10号敷石住居が加曽利B1式と想定される。列状配石は、最終段階で構築された可能性もあるが、住居に伴うもしくは住居に後続するものがあるとすれば、堀之内2式期に列石の構築が開始されたと考えられることも可能である。

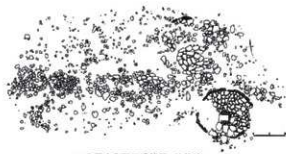
つぎに、下部土坑を伴うものとして、横浜市緑区住撰遺跡配石遺構SH001、保土ヶ谷区帷子峰遺跡1号、2号配石土坑、相模原市緑区葉山島中平遺跡J5号配石、同青根馬渡№2遺跡J1号配石、南区下溝川遺跡B地区1号、2号配石土坑、伊勢原市子易・大坪遺跡1区J3号、J4号配石、3区J1号、J3号～7号配石、秦野市中里遺跡J8号～10号配石、寺山金目原遺跡9904地点配石群がある。このうち土坑が長径1.5～2.0mの長方形もしくは楕円形をなすものとして、青根馬渡№2遺跡J1号配石、下溝川遺跡B地区1号配石土坑、小易・大坪遺跡1区J3号配石、同3区J5号配石、中里遺跡J8号、J10号配石、寺山金目



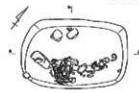
菅屋吹上74地点遺構配置図 (1/600)



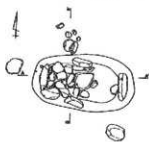
栗山島中平5号配石 (1/60)



下北原南側配石遺構群 (1/240)



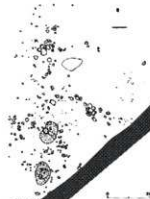
下清橋川田地区1号配石土壕 (1/60)



子島・大坪1区3号配石 (1/60)



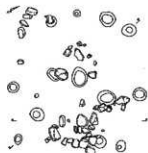
子島・大坪3区J1・2号配石 (1/60)



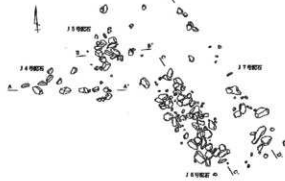
間の原配石遺構 (1/180)



東向2号配石 (1/60)



子島・大坪1区5号配石 (1/120)



中里J4~7号配石 (1/120)

第3図 配石遺構

原遺跡9904地点配石群があり、墓坑に伴う配石遺構の可能性もある。これら以外は1mほどもしくはそれ未満の土坑を伴い用途は不明である。

その他の焼土址や埋設土器、ビット、炭化物等を伴うものを一括する。焼土址を伴うものとして、横浜市青葉区稲ヶ原遺跡A地点において環状に縄を配するB-1号配石遺構が、座間市間の原遺跡では、2単位のものを含み散在する配石遺構と3カ所の焼土が検出されている。太岳院遺跡93-4地点では3、4カ所の塊状のまとまりをもつJ1号、J2号配石があり、同一確認面で焼土が発見されている。埋設土器を伴うものとして、中井町東向遺跡では、一部環状に配された塊状の2号配石に隣接して上部に縄をもつ埋設土器（1号屋外埋設土器）が発見された。同様に埋設土器に隣接するものとして子易・大坪遺跡3区J2号配石があり、土器集中を取り囲む配石として大磯小学校遺跡A4～5区配石遺構がある。ビットを伴うものとして相模原市寸嵐二号遺跡2号配石、伊勢原市子易・大坪遺跡1区J5号配石があり、炭化物や獣骨（シカ）に隣接する配石として大磯小学校遺跡A14～15区配石がある。また、寺山金目原遺跡9904地点配石群の下部では、土坑のほかに、焼土址や埋設土器、多数のビットが検出された。

遺構を伴わず単独で構築されるものとして、横浜市都筑区華蔵台南遺跡では、堀之内1式土器を出土し比較的細かな縄からなる1号散石（散在）が確認された。相模原市南区新戸遺跡では、堀之内式土器を出土したJ-52号配石（塊状）、相模原市緑区葉山島中平遺跡にてJ1号～4号、J6号～8号配石（塊状もしくは散在）、相模原市南区下溝嶋川遺跡C地区で1号配石（散在）、伊勢原市池端・坂戸遺跡にてJ1号配石（塊状）、下北原遺跡ⅡではJ1号配石（環状）、子易・大坪遺跡1区にてJ1号配石（環状）やJ2号配石（散在）、同遺跡3区J2号配石（列状）があり、東大竹・下谷戸（八幡台）遺跡では1号配石（塊状、堀之内式期）がある。秦野市曾原吹上遺跡にて1～4区からなる集縄（環状、塊状、散在）があり、太岳院遺跡92-2地点ではJ1号配石（塊状）、同遺跡92-5地点でJ1号～5号配石（環状もしくは塊状）、中里遺跡で一部に堀之内2式土器を伴うJ1号～7号配石がある。中里遺跡J3号配石には近接した位置にJ1号埋設土器があり、一方、同遺跡J1号、J6号配石は長軸2m×1mほどの長方形に縄を配していることから墓坑であった可能性がある。（阿部）

- 石井 寛 1994 「縄文後期集落の構成に関する一試論－関東地方西部域を中心に－」『縄文時代』第5号、pp.77-110
 石坂 茂 2002 「縄文時代中期末葉の環状集落の崩壊と環状列石の出現－各時期における拠点集落形成を視点とした地域的分析－」『研究紀要』第20号、財団法人群馬県縄文文化財調査事業団、pp.71-102
 石坂 茂 2004 「関東・中部地方の環状列石－中期から後期への変容と地域的様相を探る－」『研究紀要』第22号、財団法人群馬県縄文文化財調査事業団、pp.51-94
 石坂 茂 2017 「「核家屋」集落の構造－群馬県榎壁中村遺跡を中心とした分析－」『縄文時代』第28号、pp.1-26
 松田光太郎 2007 「南関東地方の諸遺跡」『季刊考古学 日本のストーンサークル』第101号、pp.60-64
 山本曜久 1991 「環状集落と墓域」『古代探叢Ⅲ』早稲田大学出版部、pp.137-178
 山本曜久 2002 『敷石住居址の研究』六一書房

3. 竪穴状遺構

堀之内式土器文化期に属すると思われる竪穴状遺構と呼称される遺構の検出例は井ノ口平治山遺跡の第1号竪穴状遺構の1例のみである。この遺構は調査区外に延びているため正確な規模は不明だが、現存長で13.86m×8.64mの規模で不整形を呈する。縄文時代中期から堀之内式までの時期の土器が出土しており、土器に完成品がないことから廃棄場としての機能が考えられ、不整形を呈するもの何度でも作り替えが行われたためではないかと報告されている。（粕谷）

4. 掘立柱建物跡（第4図）

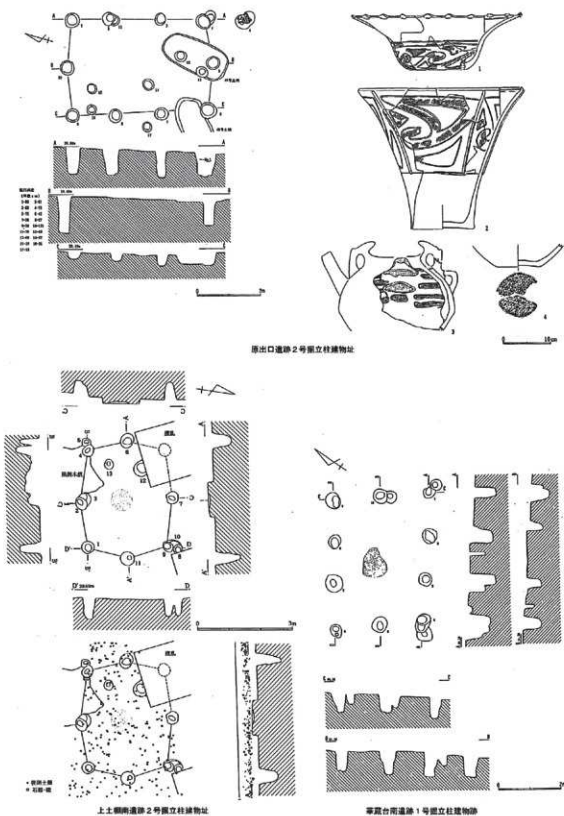
縄文時代後期の堀之内式期の掘立柱建物跡を調査報告書から6遺跡40例を抽出した。その内容は、横浜市所在の原出口遺跡4例、華蔵台南遺跡3例、川和向原遺跡9例、川崎市所在の井田中原遺跡4例、綾瀬市所在の上土棚南遺跡17例、伊勢原市所在の東大竹・下谷戸（八幡平）遺跡3例となっている。

これらの遺構の分類にあたっては、掘立柱の列から大きく2種に分類することができる。A類は、柱穴が2列に一周するもので、1辺につき2本から4本があり、その中間にあたる主軸線上に棟持ち柱の位置を推定する2本の柱があり、それを含めると6本から10本の柱穴列となるものである。B類（群）は、A類の柱穴列の中央や副軸線上に1本から3本ほどの柱穴列を伴うものである。抽出した堀之内期の柱穴列は、A類に属するものがほとんどで、棟持ち柱の位置を想定する2本の柱穴が主軸線上にあり、僅かに外に「く」の字状に出るタイプが多い傾向を得ることができ、いわゆる「亀甲形」を呈するものである。なお、縄文時代中期に多く見られた、柱穴が1辺3本から4本で長方形に一巡、あるいは2重に巡るものはほとんど見られなくなるようである。

そして、柱穴列を構成するピット群の中、あるいは周辺から出土する土器を基準に時期区分すると、堀之内期の掘立柱建物跡を2時期に分類することができる。1期にあたるのが横浜市の川和向原遺跡の1・19号掘立柱建物跡、綾瀬市の上土棚南遺跡の1号掘立柱建物跡などがあげられる。2期では横浜市原出口遺跡1・2・3号掘立柱建物跡、横浜市川和向原遺跡5・7・8・10・11号掘立柱建物跡、華蔵台南遺跡2号掘立柱建物跡、綾瀬市の上土棚南遺跡8号掘立柱建物跡があげられる。なお、遺構の性格上、遺構に伴う遺物を限定することが難しく堀之内1式から2式期、あるいは、堀之内2式から加曽利B式期という報告になってしまうものも少なからず存在してしまうようである。

次に、事例として図示した3例について規模等を見ていきたい。柱穴列のあり方は1辺に3～4本×2列に棟持ち柱2本が付随するものが多く、定型化されるように見えている。各遺構の規模は、次のとおりである。まず、原出口遺跡2号掘立柱建物跡は妻側3本、桁（平）側4本の柱穴から構成され、梁行3.0m×桁行4.6mを測る。この遺構に伴う遺物は、南東隅に配置された柱穴4より出土しており、口径36cmほどに復元され胴部に渦巻文を横位に連続させる浅鉢形土器、口径35cmの深鉢形土器などである。いずれも、堀之内2式期の位置づけられるものである。上土棚南遺跡2号掘立柱建物跡は妻側3本、桁側3本の柱穴から構成され、梁行2.92m×桁行3.05m、棟持ち柱間3.66mを測る。また、桁行の中央部が膨らむように張り出し、柱穴間の中央部に炉跡（焼土）を配するものである。出土遺物は小片ながら堀之内式期の所産と報告されている。華蔵台南遺跡1号掘立柱建物跡は妻側3本、桁側4本の柱穴から構成され、梁行4.60m×桁行3.40m、棟持ち柱間は張り出さない形態のものである。また、遺構の中央部に炉跡（焼土）を配するものである。遺構の時期は、炉址の検出状況のあり方から『縄文中期に検出されている「長方形大形住居跡」のそれに共通する』としながらも、同遺跡内の土坑との切り合い関係から堀之内式期の範疇と報告されている。

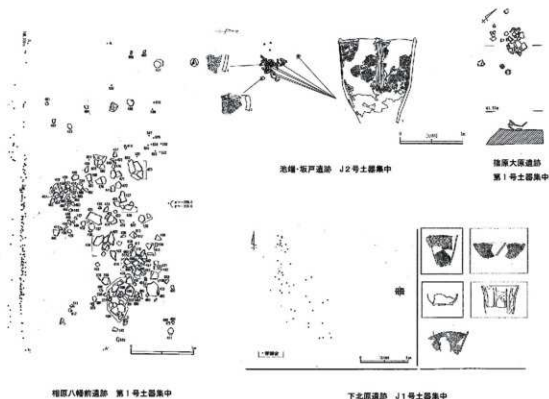
また、この掘立柱建物跡に付随する遺構として取り上げられているのは、上土棚南遺跡6・7・8号掘立柱建物跡の柱穴列の中の焼土跡で、検出された柱穴列の上屋構造と床面の位置を想像させるものである。床面や柱の位置を基準とした建物の構造、さらには建物の利用機能が推定されるが、堅穴住居跡とは相違する施設として共同作業の場や、祭祀や葬送、倉庫など多くの遺構の場合、建物の認定という観点では、柱穴が重なっていることもあり、柱の位置など発掘調査現地での判定が重要となってくるものと思われる。（小島）



第4図 竪立柱建物跡

5. 土器集中 (第5図)

該期の土器集中は、7遺跡から8基が報告されている。遺構名も土器集中・遺物集中・土器溜まり等様々である。土器集中として報告されている遺構は、包含層中の遺物密度が高い範囲のもの、完形に近い状態で出土したもの、一時期に廃棄されたものなど様々である。一般的には掘り込みを伴わないものがほとんどである。また、遺構としての統一的な基準が無いため各遺跡・遺構間の比較が難しく、遺構として捉えて良いかどうか課題の多い遺構である。



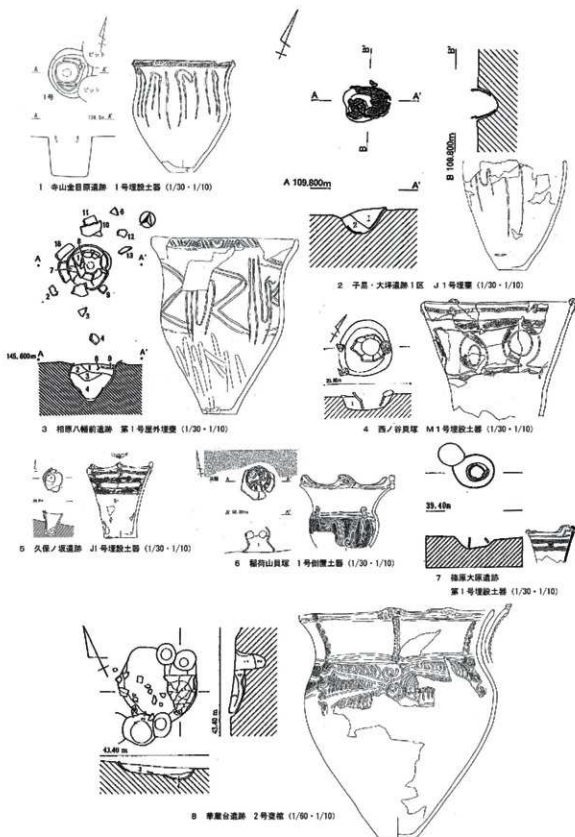
第5図 土器集中

6. 屋外埋設土器 (第6図)

該期の屋外埋設土器は、24遺跡から39基が発見されている。39基の内、堀之内1式の屋外埋設土器が35基、堀之内2式の屋外埋設土器が4基と圧倒的に堀之内1式の屋外埋設土器が多い傾向が窺える。

埋設状態は、ほぼ完形で正位に埋設されるものとして寺山金目原遺跡1号埋設土器(第6図1)と相原八幡前遺跡第1号屋外埋壺(3)久保ノ坂遺跡J1号埋設土器(5)、口縁部～胴部が正位で埋設されるものとして西ノ谷貝塚M1号埋設土器(4)、胴部～底部が正位で埋設されるものとして子易・大坪遺跡1区J1号埋壺(2)、口縁部～胴部が逆位で埋設されるものとして篠原大原遺跡第1号埋設土器(7)、掘り込みを伴わず口縁部～胴部が逆位で置かれるものとして稲荷山貝塚1号倒置土器(6)、ほぼ完形で掘り込み内に横位で埋設されるものとして華藏台遺跡2号甕棺(8)などが挙げられる。なお、8の華藏台遺跡では、甕棺として1号甕棺・2号甕棺が報告されているが、土器内部から人骨等が検出されていないため、屋外埋設土器として取り扱っている。

(図)



第6図 屋外埋設土器

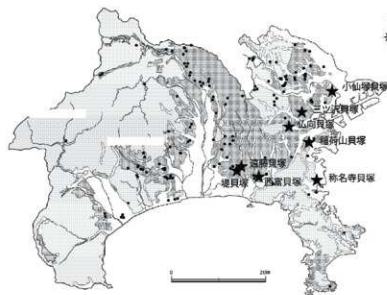
7. 貝塚・住居内貝層 (第7図、第1表)

神奈川県内の縄文時代の貝塚は113箇所が知られ、時期が明らかな主要貝塚90箇所内、後期前葉に属する貝塚は40遺跡ほどである。ただし発掘調査された遺跡は、更に少なく東京湾沿岸では稲荷山貝塚や称名寺貝塚が知られる程度で、早期から中期の遺跡の調査成果に比べると少ない。また、相模湾周辺の貝塚としては、藤沢から茅ヶ崎にかけての内湾沿いの貝塚があげられる。神奈川県内の縄文時代後期前半の貝塚の特徴としては、内湾に向けて形成される丘陵・台地縁辺部の斜面貝塚が主体であり、環状・馬蹄形をなす大規模貝塚は見当たらない。また、中期から継続して営まれる貝塚や遺構内に貝層を堆積させる例は少なく、比較的短期間に形成された貝塚が多いことが特徴といえる。(村松)

中村若枝 1994「神奈川県下の縄文時代貝塚を概観して(序)」考古論叢神奈河第3集所収

第1表 神奈川県内における主な縄文時代後期前半の貝塚

貝塚名	時期	備考
1 横浜市内仙居貝塚	II～B1式	ハマグリ、カキ、シオフキ主体。A貝塚は、20×30mで貝層の厚さは0.9mを渡る。
2 横浜市内三ツ沢貝塚	II式	ハマグリ、アサリ、シオフキ。
3 横浜市内仙向貝塚	1号貝塚 II～B1式 2号貝塚 II～B1式	10.8m×6.1mで0.3mの厚さを確認した。ハイガイ主体でハマグリ、オキシジミで93%を占める。 0.6m×0.4mで円形の土坑内に0.2mの厚さで堆積。ハイガイ主体でハマグリを含む。
4 横浜市内稲荷山貝塚	第1地点 I～II式 第2地点 I～II式	純貝層と間層が互層となり、10層に分層。アサリ、ハマグリ・シオフキ・イボキスゴ主体。調査区全体で土器片は多量。
5 横浜市内称名寺貝塚	C貝塚 II式 D貝塚 II式～B1式 H貝塚 ～I式	キスゴ、ハマグリ主体。 ハマグリ主体。
6 藤沢市内西富遺跡	第1貝層 不明 第2貝層 不明 第3貝層 不明 第4貝層 不明 第5貝層 不明	チョウセンハマグリ (26%)・タンベイキスゴ(63%)を主体とする貝層、調査区全体で土器片は多量。
7 藤沢市内藤島貝塚	貝層	I～II式 タンベイキスゴ、チョウセンハマグリ主体。30×20mの範囲で厚さ0.5mをはかる。調査区全体で土器片は多量。
8 茅ヶ崎市内堤貝塚	東貝塚 II式 西貝塚 I・II式	タンベイキスゴ主体。10m×10mの範囲に純貝層厚さ0.85～1mで、貝層下に住居跡。 タンベイキスゴ、チョウセンハマグリ主体(以降で90%)。25m×8m厚さ0.2～0.5cm層かにヤマトシジミを含む。



第7図 主な縄文時代後期前半貝塚遺跡分布図(・は集落遺跡)

8. 焼土址・灰土・炭化物集中 (第2表)

ここで取り扱う「焼土址」・「灰土」・「炭化物集中」は、屋外と判断される空間で発見された焼土等の痕跡を対象とする。当該遺構のデータベース作成にあたっては、平成21・25・28年度に集成した県内該期遺跡のデータシートから抽出作業を行い、平面形態、遺構計測値、時期、用途・機能といった各属性の入力作業にあたっては報告書の記載に拠ってこれを実施した。第2表は、該期に帰属する焼土址等が検出された遺跡の一覧で、帰属時期の確実なものを中心に、3市・1村に所在する10遺跡129事例(焼土址112、灰土16、炭化物集中1)を抽出することができた。以下、最も検出事例の多い焼土址を中心に、各属性毎に傾向を概観する。

遺跡分布 確認された10遺跡112事例中8遺跡94事例(約83.9%)が県央部に所在する。極端な偏在傾向が窺われる結果となったが、県東部の大規模遺跡では集落等の営造期間が長期に亘ることから、特に伴出遺物のないものについての帰属時期特定が困難な場合多々あるため、結果については一定の留意が必要であろう。

平面形態 形態別の比率は、円形基調16基(約14.3%)、楕円形基調47基(約42.0%)、方形基調8基(約7.1%)、長方形基調5基(約4.5%)となっている。全体の約32.1%が不整形の範疇で捉えられ、定形化した遺構ではないことが窺われる。

規模 切り合い等のない84基を対象として集計した結果、長軸長は0.22～2.36m(平均約1.05m)、短軸長は0.18～1.60m(平均約0.77m)の間に偏在していることが明らかになった。数値的には偏在幅が大きく、長短比についても極端なピークがみられないことから規格だった遺構とは考え難い。

掘方 112基中109基(約97.3%)が掘方を有している。土坑状に掘方を掘削しているケースのほか、埋没しきっていない遺構や窪地等を利用しているケースもあるようだ。

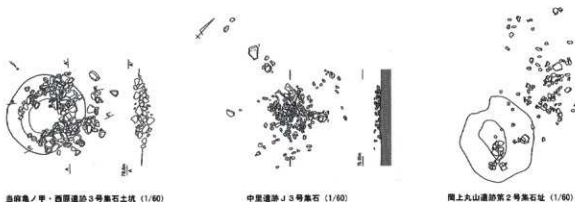
用途・機能 112基中91基は遺構の性格(用途・機能)についての記載がある。その所見を集約すると、屋外炉・調理加工施設(74基:約66.1%)と廃棄跡(18基:約16.1%)とに大別される。住居址内に設えられた炉や所謂穴穴等では、屢々赤化した火床面や焼土純層が確認されるが、今回集成したものにはこれに類する火床面や焼土純層が生成されているものはない。当該遺構の性格を廃棄跡と解釈する場合には、このことが根拠のひとつとなっている。全体の62.5%にあたる70基が確認された宮ヶ瀬遺跡群では、中期の事例ではあるものの、恒常的な火処として使用されたものについては屋外の「炉址」として報告されており、屋外炉的な機能を想定している「焼土址」については、焚き火跡のような一時的な火処とみるべきかもしれない。(井辺)

第2表 焼土址・灰土・炭化物集中検出遺跡一覧

遺跡名	市町村(区)	種別	検出数	時期	掘方	用途・機能	備考
稲葉山貝塚第1地点	横浜市の南区	焼土址	4基	縄文1内1式・ 縄文2内1式	有	不明	貝層範囲外縁部に分布
稲葉山貝塚第2地点	横浜市の南区	焼土址	14基	縄文1内1式・ 縄文2内1式	有	不明	貝層範囲内に分布
		灰土	16基	縄文2内1式	無	不明	
はじめて下遺跡	相模原市緑区	焼土址	3基	縄文2内1式	有・無	廃棄跡	集落内に分布
伊久保西遺跡	相模原市緑区	焼土址	15基	縄文2内1式・ 加曽利式	有	廃棄跡	土器廃棄域内に分布
青山島中平遺跡	相模原市緑区	焼土址	5基	縄文2内1式	有・無	調理加工施設	集石との関係性
		炭化物集中	1基	縄文2内1式	無	不明	
東谷戸遺跡3地区	厚木市	焼土址	2基	縄文2内1式	有	不明	
宮ヶ瀬遺跡群表の原遺跡	愛甲郡津川村	焼土址	34基	縄文2内1式・ 縄文3内1式	有	屋外炉	9～11基の小群で検出
宮ヶ瀬遺跡群北原遺跡No. 9	愛甲郡津川村	焼土址	29基	縄文2内1式・ 縄文3内1式	有	屋外炉	後遺土器の主体的な分布範囲内に点検
宮ヶ瀬遺跡群北原遺跡No. 10	愛甲郡津川村	焼土址	1基	縄文2内1式	有	屋外炉	小形の粗製土器を主体で検出
宮ヶ瀬遺跡群北原遺跡No. 11	愛甲郡津川村	焼土址	6基	縄文2内1式・ 縄文3内1式	有	屋外炉	

9. 集石 (第8図)

堀之内式土器が出土し該期のものと推定しうる集石は5遺跡11基を数えるのみである。他の時期の集石同様、掘り込みを伴うものと伴わないものがあり、伴うものが8例、伴わないものが3例であるが、岡上丸山遺跡第2号集石址のように伴わないと報告されながらも近接して掘り込みが確認され、関係性が伺われるものもある。礫の分布範囲は1～2mほどで、平均値は1.6mである。掘り込みの平面形は楕円形基調のものが6例、円形基調のものが岡上丸山遺跡のものも含めて3例と楕円形が優位である。掘り込みの長軸の規模は0.7m～1.8mほどで、平均値は1.4mである。他の時期の集石との明確な相違を確認し得なかったが、加曽利E式期の集石で認められた掘り込みの底面に礫を敷き並べたような例は認められなかった。(粕谷)



第8図 集石

10. その他の土坑

土坑とされる小形の堅穴状の遺構のうち、その性格が土壌墓、貯蔵穴として一応の定着をみているもの以外が、どのように理解され扱われているのか、いくつかの報告例からみていく。

該期の代表的集落址である川名向原遺跡、原出口遺跡の報告では、土坑から「貯蔵穴と考えられるもの」「墓坑と考えられるもの」を分類抽出した後、「平面形が円形を呈し、深さで劣る一群」として、特に「円形土坑」が設定されている。「円形土坑」は本来貯蔵穴として認定される場合が多いが、墓坑として二次利用されることもあることから分類項目として設けられたと説明されている。ここで問題とされた二次利用や、埋没過程の判断(自然堆積か人為的な埋め戻しが認められるか)の根拠は土坑の性格決定をより困難にしている。また、帷子峯遺跡では該期以外のものも含めて合計201基の土坑が発見され、平面形から3大別、さらに断面形、底面ビットの特徴等から25類に細別した。このうち後期前半には4種類の袋状土坑「貯蔵穴」がみられるとした。そのほか、早期後半の「陥し穴」を除いた、鍋底状・皿状の断面形を呈する土坑に関して、後期前半の土器が出土しているものもあるが、分布その他に規則性は見出せなかったとして「不明のもの」に分類されている。該期を主体とした遺跡においても形態的な特徴からの類型化が難しく、また遺構の時期決定に用いることのできる遺物の出土もみられないといった事例(例としては池之端・坂戸遺跡、寺山金目原遺跡9904地点、太岳院遺跡95-1地点等)。稲ヶ原A遺跡では該期の土坑が22基発見されており、断面形が円筒形、袋状を呈する土坑は貯蔵穴と判断されているが、残りのうち11基は平面形・断面形が「柱穴状」の形状を呈するもので、その性格についての言及はない。類例は篠原大原遺跡で発見されているが、ここでも性格についての記述はみられない。「柱穴状」の土坑は山田大塚遺跡、川名向原遺跡でも発見されており、ここでは貯蔵穴として報告されている。(山田)

11. 木道 (第9図)

縄文時代における木材構造物の発見は、低湿地遺跡での調査が近年増加しており杭列や木組み遺構などの事例も増えつつあるが、県内での報告事例は極めて少ない。木道の調査事例は横浜市区南区港北区所在の古梅谷遺跡があげられる。遺跡は早瀬川左岸の樹枝状に広がる開析谷に立地しており、現在の水田下位2mの深さで広がりを有している。谷の開口部から約500m奥に入った地点に木道が確認され、谷幅100mの低湿地を横断するものと捉えられている。木道は4基のまとまりがある。木道Ⅰは構造が把握できる状態で確認されている。枝打ちされた木材を渡り木として直線的に並べ、端部は枕木を添え杭と結束している構造が明らかにされている。樹種はクスギ・クリが主体である。木道の直下ではその周辺に限定されて堀之内2式期土器が分布しており、木道の帰属時期を示していると捉えられている。木道Ⅱは湾曲や枝分かれした木材が多用されているが木道Ⅰに平行するよう発見され、樹種はヤマグワが2点のほか、クリが圧倒していることから人為的な構築と考えられるものである。その他2基の遺存状態は良好ではないが、木道の残骸や簡略的な構造のもと考えられている。集落との関係では、周辺遺跡の時期と位置関係から木道の延長線上に所在する西ノ谷貝塚で当該期の集落が形成されており、その構築に関わっている可能性が高いと考えられている。

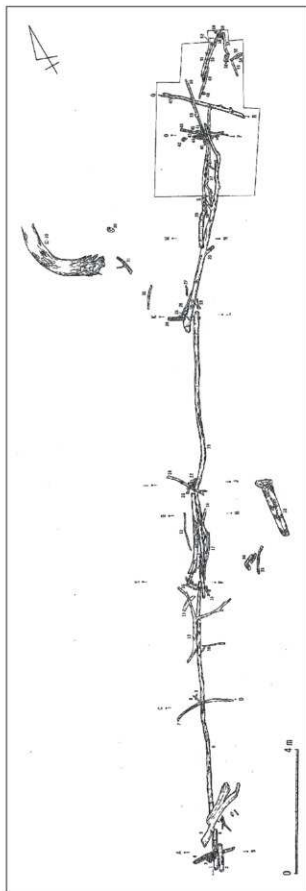
12. 帯状粘土列 (第10図)

伊勢原市所在の西富岡・向畑遺跡では、標高46mの丘陵上に硬化した粘土塊が平面的な広がりを持って断続的に列状に並ぶ「帯状粘土列」が延長22m・最大幅0.4mで発見されている。軸線はほぼ南北で南西斜面に形成されている。これは連続した粘土列が風化により断続的な状態になったものと解釈されている。粘土の由来は関東ローム層起源で、人為的に形成されたものと考えられている。第1面に比して第2面は規模が小さい。帰属時期は近接した同一面などの出土土器から称名寺式期～堀之内式期の所産であると捉えられている。類例が希少であることから用途や機能などは明らかではないが、集落内の道や祭祀などに関連した施設である可能性などが想定できるが、集落の中で分布的な位置づけや他の遺構との関連性も検討した上で評価を行っていく必要がある。

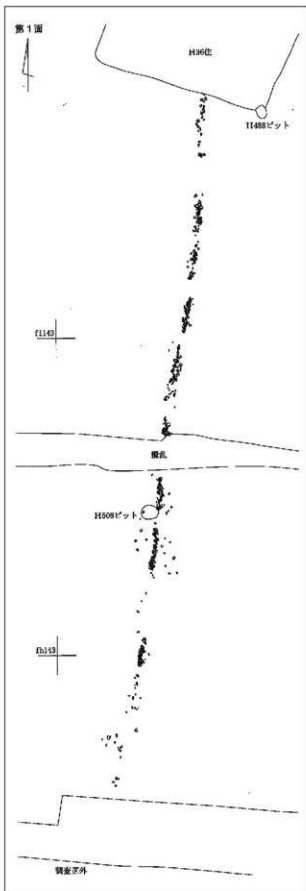
13. 水場遺構

平塚市真田・北金目遺跡群15D・15E区(入谷戸遺跡)では埋没谷の調査が行われ、堀之内式期の土器・土製品・石器などの他、木製品や動物遺存体などが出土している。谷底部では延長61mにわたる硬軟水場遺構が発見され、湧水利用に関連した施設であると捉えられている。斜面部では土坑状の水場遺構が4基発見され、貯蔵や水さらし施設と考えられる。埋没谷の西側にあたる谷頭に近接する台地上に形成された王子ノ台遺跡では当該期の集落が発見されており、水場遺構と直接結びついた集落であると捉えられる。

ここではその他の遺構として、木道・帯状粘土列・水場遺構を概観した。低湿地遺跡の調査では木道や水場遺構などとともに木製品や動物遺存体などの他、有機的な自然遺物も含めて台地上では解明できない豊富な資料が出土している。今後も調査事例は増加しており、他の類例なども併せて比較検討を行っていく必要がある。(天野)



第9図 古梅谷遺跡 木道1 (1/120)



第10図 西富岡・向畑遺跡 带状粘土列 (1/120)

弥生時代後期竪穴住居の研究（2）

弥生時代研究プロジェクトチーム

はじめに

前回の報告では集成と分析の方法について、説明を行った。今回からは神奈川県内市町村ごとに集成データをもとに分析を行い、特徴の把握を行うこととする。今回対象としたのは川崎市内の遺跡である。今回の執筆・編集はプロジェクトメンバーによる検討結果に基づき、戸羽が行った。

なお、前回提示した「神奈川県内における弥生時代の竪穴住居検出遺構一覧表」のNo. 14 末永遺跡において報告書の重複が確認され、No. 15 末永向台遺跡ほか一部の遺跡で住居軒数の錯誤が判明した。上記については本稿で改めて表を提示し訂正を行う。

川崎市内における竪穴住居跡の特徴

縄属時期別住居軒数

縄属時期：今回集成した竪穴住居跡127軒の縄属時期は後期：95軒、庄内併行期：29軒、後期～庄内併行期（不明）：3軒である。

住居形態など

平面形態：後期の95軒中、最も多いのは平面形態が隅丸（長）方形46軒で、以下楕円形19軒、（長）方形9軒、円形1軒となる。平面形態不明としたものは20軒である。庄内併行期では29軒中、隅丸（長）方形が6軒、楕円形5軒、（長）方形が4軒となる。平面形態不明としたものは14軒である。なお、長尾台北遺跡6号住居跡は短軸方向上に炉跡が存在する住居（短軸住居）である。

長短率：長短率は住居の長軸の数値を短軸の数値で除し、それに100を乗じたものである。値が大きくなれば、長軸短軸の差が大きくなり長方形に、小さくなれば正方形に近づき、最低の値は100となる（弥生時代研究プロジェクトチーム1995）。後期で算出できたのは21軒で、基本統計量は最大150、最小102、平均119、中央値119.6、という値を示した。庄内併行期で算出できたのは4軒で、基本統計量は最大109.5、最小100、平均104.2、中央値103.6という値を示した。

方形指数：方形指数を算出可能な住居跡を対象とした。後期は22軒が該当し、方形指数30～40未満および50～60未満がそれぞれ7軒ある。以下方形指数10～20未満および40～50未満がそれぞれ2軒、0～10未満および20～30未満がそれぞれ1軒である。庄内併行期では4軒が該当し、方形指数80～90未満が2軒、40～50未満および60～70未満がそれぞれ1軒である。

主軸方位：主軸を計測可能な住居跡を対象とした。北東方向（N-○°-E）または北西方向（N-○°-W）を0～90°の間で角度を計測し、10°ごとに集計を行った。後期で北東方向を主軸とする住居跡は18軒あり、その内訳は、30～40°未満が4軒、0～10°未満・70～80°未満がそれぞれ3軒、10～20°未満・20～30°未満・50～60°未満がそれぞれ2軒、40～50°未満・60～70°未満がそれぞれ1軒である。北西方向を主軸とする住居跡は31軒あり、その内訳は40～50°未満が11軒と最も多く、次いで50～60°未満が5軒、70～80°未満が4軒、10～20°未満が3軒、0～10°未満・20～30°未満・30～40°未満・80～90°未満がそれぞれ2軒となっている。

庄内併行期で北東方向を主軸とする住居跡は1軒で、30～40°未満のものである。北西方向を主軸とする住居跡は3軒で、その内訳は30～40°未満・40～50°未満・60～70°未満がそれぞれ1軒である。

主柱穴：住居の主柱穴本数が確認できた遺構について集計した。なお、軒数には柱穴配置により、本数が推定可能な遺構を含んでいる。後期では30軒中、主柱穴4本のものが29軒、6本のものが1軒である。庄内併行期では6軒中、主柱穴4本のものが4軒、2本・6本のものがそれぞれ1軒である。

地形と立地

分布する地形面：後期、庄内併行期ともに台地もしくは丘陵に分布する。

水系：川崎市域を対象とするため、大きく多摩川水系もしくは鶴見川水系に分けられる。後期では住居跡95軒中、多摩川水系に41軒、鶴見川水系に54軒分布する。庄内併行期では住居跡29軒中、多摩川水系に7軒、鶴見川水系に22軒分布する。後期～庄内併行期では3軒中、多摩川水系に1軒、鶴見川水系2軒分布する。

住居付帯施設

炉跡：後期では95軒中45軒（47.4％）で確認されている。その内訳は地床炉34軒、枕石炉7軒、地床炉と枕石炉が並存するもの4軒である。長尾台北遺跡7号住居跡では地床炉が6箇所と1軒の中で多数の炉跡が確認される事例もある。庄内併行期では29軒中9軒（31.0％）で確認されており、その内訳は地床炉8軒、枕石炉1軒である。

入口穴・梯子穴：後期では95軒中21軒（22.1％）で入口穴が、5軒（5.2％）で梯子穴が確認されている。長尾台北遺跡10号住居跡で3基、同遺跡19号住居跡で6期と1軒の住居から複数検出される事例がある。庄内併行期では29軒中3軒（10.3％）で入口穴が、5軒（17.2％）で梯子穴が確認されている。

貯蔵穴：後期では95軒中30軒（31.6％）、庄内併行期では29軒中3軒（10.3％）で確認されている。後期に帰属する久地伊屋之免遺跡第2地点S102・S107旧では貯蔵穴に周堤が確認されている。

周溝：後期では95軒中、全周するものが14軒（14.7％）、部分的に存在するものが18軒（18.9％）、存在しないものが19軒（20.0％）となっている。なお、44軒は不明である。庄内併行期では29軒中、全周するものが3軒（10.3％）、部分的に存在するものが13軒（44.8％）、存在しないものが12軒（41.3％）となっている。なお、1軒は不明である。

住居廃絶など

拡張：後期では95軒中13軒（13.6％）で確認された。庄内併行期では、該当事例は確認できなかった。

焼失：後期では95軒中4軒（4.2％）確認されており、うち3軒が久地伊屋之免遺跡第2地点のものである。庄内併行期では1軒、千年伊勢山台遺跡9次調査S1Y02にて確認されている。

埋没過程：大半が自然作用による埋没であるが、後期で人為的に埋め戻されている住居が95軒中3軒（3.1％）確認されている。3軒はいずれも久地伊屋之免遺跡第2地点における住居跡である。

出土遺物

遺物：出土遺物で主体となるのは土器類、次いで石器類である。ここでは特徴のある遺物を出土した住居跡を列挙する。

後期：影向寺遺跡第11次調査3号住居跡：織の石製模造品の可能性がある製品、下原遺跡第6号B住居址：土製勾玉1点、緑ヶ丘霊園内遺跡第2地点第22号住居址：土製円盤1点、元石川-1遺跡YT-3：土製紡錘車1点・土製勾玉2点、元石川-1遺跡YT-5：土製勾玉3点、末永遺跡第2地点2・5住居址：土製紡錘車、末永遺跡第2地点7号住居跡：土製勾玉1点、末永遺跡第2地点8号住居跡：土製勾玉1点、末永遺跡第2

地点、末永遺跡第2地点10号住居跡：甔・土製紡錘車1点

庄内併行期：下原遺跡第7号住居跡：石剣1点・石鏃3点・石皿2点・銅鏃1点・土製紡錘車1点

まとめ

川崎市における弥生時代後期および庄内併行期の住居について、集計データをもとに定量分析を行った。その結果を踏まえ、傾向をまとめておく。

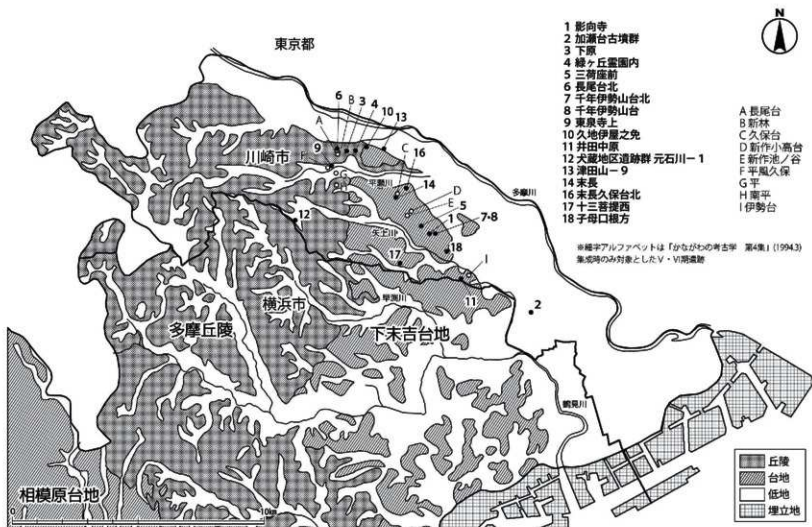
- ・住居の帰属時期は後期の割合が高く、庄内併行期には減少する。
- ・方形指数は後期では30°～60°未満前後に集中して分布するが、庄内併行期では総軒数は少ないものの40°～90°未満と方形指数は高めの傾向を示す。
- ・主軸方位の傾向は、後期では北東を主軸とするものの角度分布が散漫であるのに対し、北西を主軸とするものの角度分布は40°～60°未満に比較的集中する。
- ・主柱穴の本数は、後期・庄内併行期のいずれも4本が主流である。
- ・後期・庄内併行期を通じて、鶴見川水系に多く住居が分布し、ついで多摩川水系に分布する。ただし、両水系は東京都側の状況を反映していないため、実際の件数はさらに増加する点については、前回の分析ですでに指摘されている（弥生時代研究プロジェクトチーム1994）。
- ・炉跡は後期・庄内併行期を通じて地床炉が最も多い。後期では1軒に複数の炉跡が確認される例が散見されるが、庄内併行期では事例がない。朝光寺原式土器を伴う住居は平面形態が隅丸（長）方形で複数基の炉を有することが指摘されているが、長尾台北遺跡で追認できる。一方、東京湾沿岸系土器を伴う住居では平面形態が楕円または隅丸（長）方形が多く、単基の炉を有することが指摘されているが、その傾向も看取される。
- ・住居の拡張については後期では事例が確認されたが、庄内併行期では事例がない。
- ・焼失住居は後期に、久地伊屋之免遺跡第2地点において集中して検出されている。
- ・後期における出土遺物で特徴的なものとして、土製紡錘車、土製勾玉が挙げられる。庄内併行期では1例のみだが石剣と銅鏃が共伴する事例が確認される。

おわりに

今後も各地域における集成作業を行い、データベースの作成を継続する。地域または市町村ごとでの分析を行ったのち、過去に行った集成のデータを含めて総合的な分析・比較を行う予定である。

参考文献

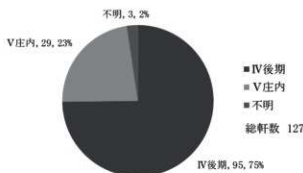
- 弥生時代研究プロジェクトチーム 1994「弥生時代竪穴住居の基礎的研究（1）」『神奈川の考古学の諸問題』 神奈川の考古学第4集 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 弥生時代研究プロジェクトチーム 1995「弥生時代竪穴住居の基礎的研究（2）」『神奈川の考古学の諸問題』 神奈川の考古学第5集 神奈川県立埋蔵文化財センター



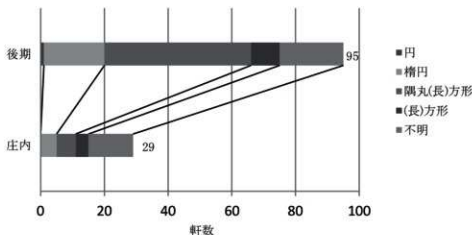
第1図 川崎市内遺跡分布図

第1表 川崎市内における弥生時代の竪穴住居検出道路一覧表

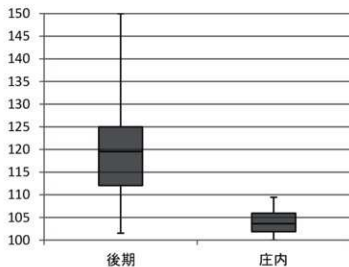
No.	遺跡名	軒数	刊行団体	刊行年	出典
川崎市					
1	影向寺	3	川崎市教育委員会	2007	『川崎市高津区影向寺遺跡第11次発掘調査報告書』 『川崎市文化財調査記録43』
	影向寺	3	玉川文化財研究所	2007	『影向寺遺跡第12次調査発掘調査報告書』
2	加瀬台古墳群	1	川崎市市民ミュージアム	1996	『加瀬台古墳群の研究Ⅰ』
	加瀬台古墳群	3	川崎市市民ミュージアム	1997	『加瀬台古墳群の研究Ⅱ』
3	下原	4	川崎市市民ミュージアム	2003	『下原遺跡』
4	緑ヶ丘霊園内	7	緑ヶ丘霊園内遺跡発掘調査団	1995	『緑ヶ丘霊園内遺跡発掘調査報告書』
5	三荷座前	1	三荷座前遺跡発掘調査団	1997	『三荷座前遺跡発掘調査報告書』
6	長尾台北	11	長尾台北遺跡発掘調査団	1997	『長尾台北遺跡発掘調査報告書』
7	千年伊勢山台北	3	千年伊勢山台北発掘調査団	2000	『千年伊勢山台北発掘調査報告書』
8	千歳伊勢山台	32	川崎市教育委員会	2005	『千歳伊勢山台遺跡第1～8次発掘調査報告書』
	千歳伊勢山台	20	川崎市教育委員会	2008	『千歳伊勢山台遺跡第9・10・11次発掘調査報告書』
9	東泉寺上	4	有限会社 吾妻考古学研究所	2009	『東泉寺上遺跡B地点発掘調査報告書』
10	久地伊屋之免	8	日本竪穴史研究所	2008	『久地伊屋之免遺跡第2地点』
11	井田中原	1	井田中原遺跡発掘調査団	2003	『井田中原遺跡B地点発掘調査報告書』
12	大蔵地区遺跡群	9	日本竪穴史研究所	2004	『大蔵地区遺跡群』
13	津田山-9	4	津田山-9遺跡発掘調査団	2004	『津田山-9遺跡発掘調査報告書』
14	末長	7	玉川文化財研究所	2009	『末長遺跡第2地点発掘調査報告書』
16	末長久保台北	1	有限会社 吾妻考古学研究所	2009	『末長久保台北遺跡第2次発掘調査報告書』
17	十三番櫻西	4	有限会社 吾妻考古学研究所	2005	『十三番櫻西遺跡第2次発掘調査報告書』
18	子母口根方	1	川崎市教育委員会	2009	『子母口根方遺跡第4地点 子母口根方遺跡第3地点』 『川崎市埋蔵文化財報告書第3集・第4集』
※前回掲載した末永遺跡第2地点発掘調査報告書（多摩川文化財研究所2005）は末永遺跡第2地点発掘調査報告書（同2009）の誤植であったこと、末永向台遺跡発掘調査報告書（宮崎No. 4 遺跡発掘調査団2003）は報告書を再確認した結果、竪穴住居跡が検出されていないことが判明したため、本表からは除外した。また、竪穴住居件数についても一部の遺跡で修正を行った。					



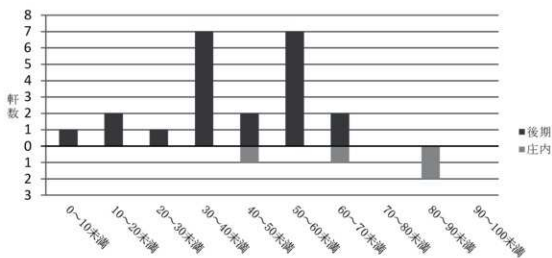
第2図 時期別住居軒数



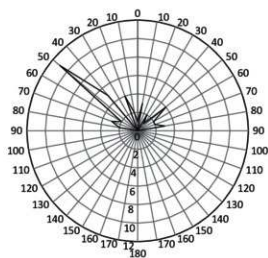
第3図 住居平面形態



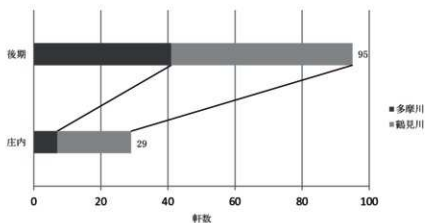
第4図 長短率



第5図 方形指数分布



第6図 主軸方位分布



第7図 水系別住居軒数

第2表 炉跡形態

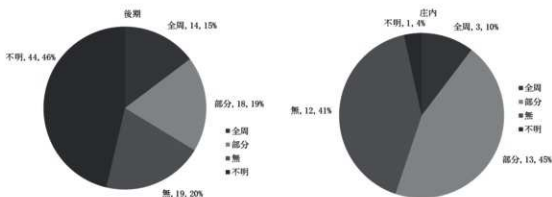
後期	種別	軒数	確認数/確認総数 (%)	確認数/住居総軒数 (%)
	地床炉	34	75.6	35.8
	枕石炉	7	15.6	7.4
	地床炉・枕石炉	4	8.9	4.2
	小計	45	100.0	47.4

庄内	種別	軒数	確認数/確認総数 (%)	確認数/住居総軒数 (%)
	地床炉	8	88.9	27.6
	枕石炉	1	11.1	3.4
	地床炉・枕石炉	0	0.0	0.0
	小計	9	100.0	31.0

第3表 主柱穴本数

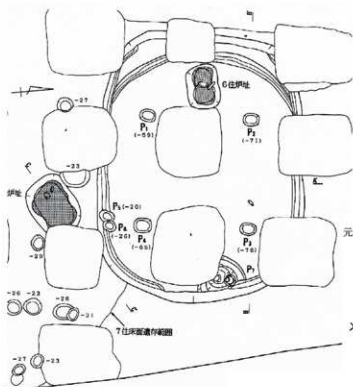
後期	主柱穴数	軒数	確認数/確認総数 (%)	確認数/住居総軒数 (%)
	4本	29	96.7	30.5
	6本	1	3.3	1.1
	小計	30	100.0	31.6

庄内	主柱穴数	軒数	割合 (%)	確認数/住居総軒数 (%)
	2本	1	16.7	3.4
	4本	4	66.7	13.8
	6本	1	16.7	3.4
	小計	6	100.0	20.6

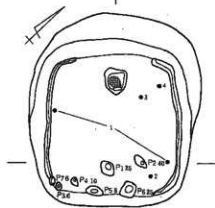


第8図 周溝の有無

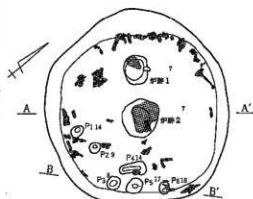
千年伊勢山台北遺跡 6号住居



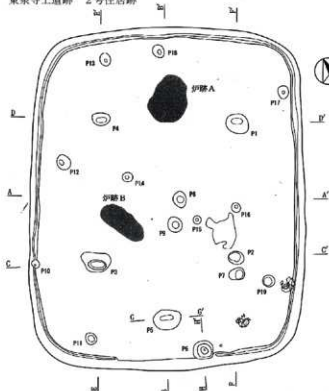
元石川-1遺跡 YT-2



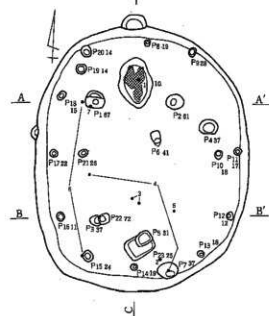
元石川-1遺跡 YT-6



東泉寺上遺跡 2号住居跡

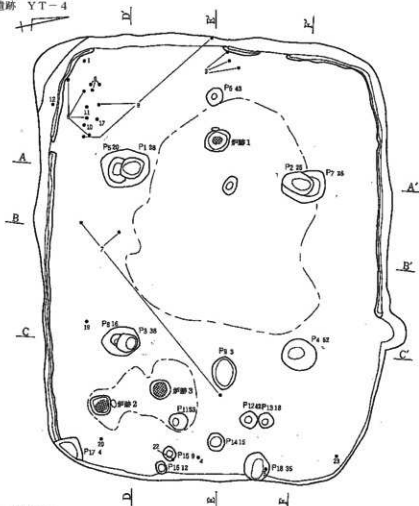


元石川-1遺跡 YT-7

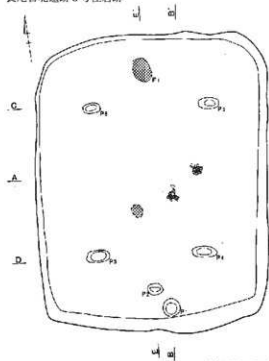


第9図 竪穴住居跡平面図(1)

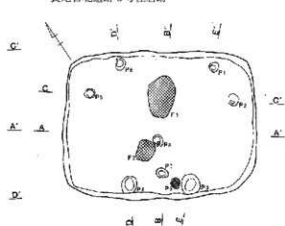
元石川-1遺跡 YT-4



長尾台北遺跡 5号住居跡



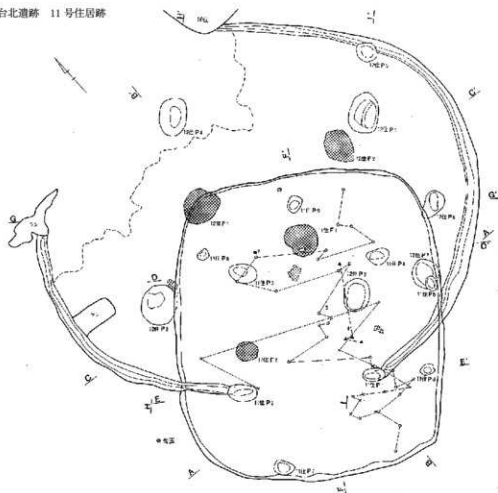
長尾台北遺跡 6号住居跡



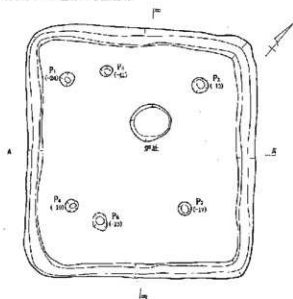
第10図 竪穴住居跡平面図（2）

0 1/80 2m

長尾台北遺跡 11号住居跡



津田山-9遺跡 2号住居跡



下原遺跡 7号住居跡



0 [1/60] 2m

第11図 竪穴住居跡平面図(3)

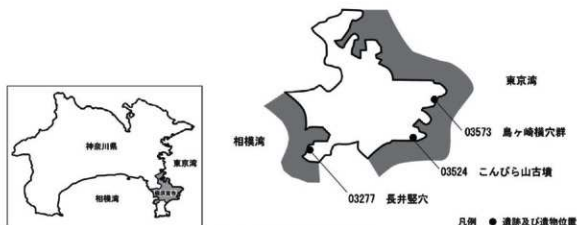
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡 (15)

ー 通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介ー

古墳時代研究プロジェクトチーム

例 言

- ・ 通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・ 研究紀要第23号には横浜市域の12268-1（継続掲載）、横須賀市域の03227・03470・03573番を掲載している。横浜市域の位置図については紀要18を参照されたい。
- ・ 番号は埋蔵文化財センター年報14～19に記載されている番号に対応している。
- ・ 執筆分担は横浜市12268-1：植山英史、横須賀市03227：新山保、03470：長澤保崇、03573：吉澤健が行った。
- ・ 各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1.の細目は「調査（踏査）年月」「資料保管場所」「記載内容概略」とし、2.は「（遺跡及び）遺物（遺構）概要」「掲載図書」「掲載図書概略」「小結」などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・ 挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に關しても同様である。
- ・ 「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のことが多い。



第1図 対象遺跡及び遺物位置図

年報番号横浜市 01268-1 瀬戸ヶ谷古墳(8) 横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月] 1943・1950年

[資料保管場所] 東京国立博物館

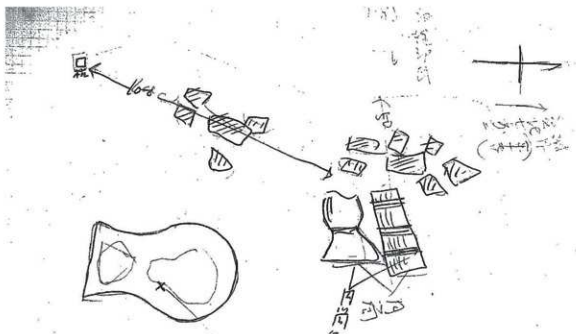
[瀬戸ヶ谷古墳と赤星ノート8]

前回から引き続き今回は01268-1(3)の方眼ノートの記載内容について取り上げる。方眼ノートには、埴輪の出土位置と出土状況などが書かれている。前回は埴丘後円部の西側に並んだ人物埴輪、器財埴輪、円筒埴輪の位置と出土状況の頁を紹介した。今回もその続きの頁を見ていくことにする。

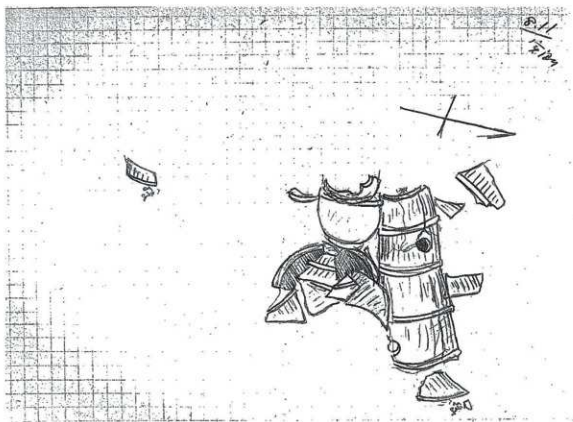
前回の図の一部には(昭和)18年8月1日と記入されていたが、今回紹介する第2図にも右端に8月1日の記載が認められる(図は上を右横方向にして掲載、以下同)。古墳の概略図が右下に記され、後円部東側の前方部に延びる埴頂部端付近に×印が付けられている。

左から中央には埴輪片の出土状況の概略が描かれている。頁中央には円筒埴輪と朝顔形埴輪があり、当時設定したと思われる杭から100cという記載が見え、100cmの距離だと考えられる。また、右側に50という記載があり、先に文字が書かれているが現状では不明瞭で、この数値に関わる記載であるか判断し得ない。古墳の概略図の×の位置から考えると、埴頂部端からの距離を示したものの可能性もあると思われる。

次頁の第4図は頁左上端に「8.11実測」の記載が認められる。円筒埴輪と朝顔形埴輪の出土状況が描かれている。円筒埴輪、朝顔形埴輪の出土関係、方位等から第3図で示した出土位置図の埴輪を実測した図であると考えられる。



第2図 東側斜面埴輪出土位置



第3図 東側斜面墳輪出土状況 (実測)

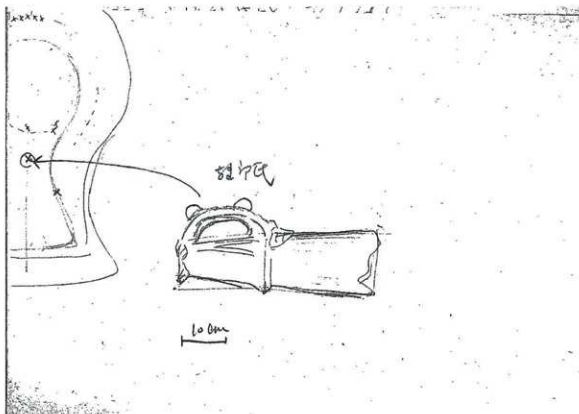
図には墳丘側から墳裾側に向かって倒れた状態の円筒墳輪と朝顔形墳輪が描かれている。円筒墳輪は3条の突帯が巡り、下から2段目と4段目に円形の穿孔が描かれる。残存する最上段の突帯より上は破損しているが、その上方に書かれた破片は形状から口縁部と推定される。底部側は平坦に書かれていることから、剖面ではなく底部が残存し露出した状態が描かれていると考えられ、復元すると4段突帯で円形の透孔を2段目と4段目に持つ円筒墳輪であると考えられる。

この円筒墳輪の南側（前方部側）に描かれている朝顔形墳輪は、円筒墳輪と同様に上部が墳裾に向いている。朝顔部は破損しているが、破片に突帯が描かれており、朝顔部に突帯を有するものだということが判る。形状は丸みを帯びて立ち上がっている。朝顔形墳輪の円筒部は上段のみが残存し全容は不明であるが、上段は半球形状を呈し朝顔部へと接続する。

さて、これらの詳細な出土状況図は瀬戸ヶ谷古墳関係の資料の中で紀要12・瀬戸ヶ谷古墳（1）で紹介した、写真6（台紙1）の円筒墳輪の出土状況写真と極めて類似している。同台紙には「横浜瀬戸ヶ谷古墳（戦前）」の記載がある。紀要12で明らかにしたが、台紙の「昭和19年頃」「(戦前)」という記載は、調査の時期を示したものであると考えられることから、时期的にも合致する。

写真では図で書かれた円筒墳輪は、ほぼ図と同じ状態であり、朝顔形墳輪は朝顔部の破片が取り除かれ、土に埋もれた状態で残存する部分が撮影されている。撮影方向は手前に円筒墳輪、後ろに朝顔形墳輪が写っていることから、後円部側から前方部側に向けて撮影したものであろう。

改めて資料作成の時系列を整理すると、第2図の出土位置図の作成が昭和18年8月1日、第3図の出土状況の実測図作成が8月11日、そして紀要12で紹介した写真6（台紙1）の写真の撮影がその後になり、



第4図 後円部から前方部間埴輪出土位置

これも昭和18年の調査時の撮影と考えられる。

第4図は後円部から前方部にかけての埴輪の出土位置と出土した埴輪の図である。丁度古墳の主軸上に×印が記載され、大刀形埴輪の一部が描かれている。大刀形埴輪は柄部が残存しているが、上部、下部とも欠損している。下に10cmのスケールが手書きされており、残存長は約30cmであることが判る。

2. 記載内容の整理

先に述べたように今回紹介した第2図、第3図の円筒埴輪、朝顔形埴輪の出土状況は紀要12で紹介した写真と合致することが判明し、昭和18年の調査時における後円部東側の埴輪の出土状況がより明確となった。また、第4図では後円部から前方部に向けた個所で大刀形埴輪片が出土していることが描かれており、前回の後円部西側の出土位置図と合わせて、昭和18年調査時の後円部側の様相について、赤星氏が克明に記録していることが改めて判明した。これらはいずれも瀬戸ヶ谷古墳の埴輪配列等を検討する際の元資料になり得る、極めて貴重な資料と言えるだろう。改めてノートの全文を把握した上で検討を行いたい。

【掲載図書】

『神奈川県史』資料編20考古資料 1979

(植山)

参考文献

三本文雄「神奈川県瀬戸ヶ谷古墳(1)」『日本考古学協会年報3』昭和30(1955)年 日本考古学協会
石野 映「神奈川県瀬戸ヶ谷古墳(2)」『日本考古学協会年報3』昭和30(1955)年 日本考古学協会

年報番号 横須賀市03277 長井堅穴 横須賀市長井5丁目

1. 赤星ノートの内容

【調査（踏査）年月日】

昭和25年5月30日

【資料保管場所】

資料中には「横須賀考古学会蔵」とあるが、現在は玉泉考古館に保管されている。

【記載内容概略】

今回紹介する資料は、図面1枚、スケッチ図1、実測図4枚、スケッチ1枚、写真1枚で、横須賀市博物館の封筒に入っている。

図面は、堅穴住居跡の断面図と平面図で、「横須賀市長井字内原（弥生式）堅穴実測す 昭25.5.30」と表記されている（第5図）。住居の規模は、北辺434cm、東辺413cm、南辺426cm、西辺387cmで隅丸方形を呈しており、表土からの確認面は29cm、住居底面までは46cmと記載されている。住居のやや東に90cm×110cmの範囲で焼土が検出されている。住居の中央付近に埴や脚部、台付き甕の破片、東隅には台付き甕、北隅には礎と脚部を欠く高坏、南隅には埴の破片や鉢底などが出土している。この図面と同様な内容のスケッチが描かれている（第6図）。

実測図は、台付き甕、高坏、異形器台、鉢の4点で、壺の口縁はスケッチ風に描かれている。

台付き甕の法量は、高さ25cm、口縁18cm、器台部底形10cmで、「弥生式 脚は埴形土器」と記されている（第7図）。

高坏の法量は、口縁14cm、高さ14.2cm、クビ3.4cm、下22.3cmで、調整については「クシ目が残る 全体にヘラミガキ」と記されている（第8図）。脚部のすかしは「3ヶ所」とあり、「下9/10欠」と記されている。また図面には、「横須賀長井、新宿 市立病院分院前」「長井中学校周辺市立分院前出土」と記載されている。

異形器台の法量は、上14.6cm 高12.2cm 下11.8cm、下クビcm、4.1（下から5.8）cmで、調整については内外面ともに「ヘラ仕上」と記されている（第9図）。また、「口辺4/4欠」、口縁には「穴4ヶ所」、脚部に「穴4カ所」と表記されている。図面には、「横須賀市長井、新宿、市立病院分院前 長井分院前出土」とあり、所蔵者が郷土史家の「玉泉正夫」と書かれている。

鉢には、法量や調整に関する記述はなく、「新宿田分院前 1963」と書かれている（第10図）。

壺の口縁はスケッチで、法量や調整に関する記述はない（第11図）。口縁に棒状浮文が貼付されており、口唇部と口縁下部、頭部の突帯に刻み目が表現されている。「長井分院裏」と記載されている。

写真は4枚で、すべて同じ台付甕である（写真1）。それぞれにコメントが記入されており、「市内 長井分院前 畑 堅穴出土」や「（脚付甕形土器）（横須賀考古学会蔵）（横須賀市長井出土）」（「横須賀長井堅穴出土」横考）などと記載されている。

2. 記載資料の整理

【遺構・遺物概要】

発掘調査の概要及び経緯に関しては、赤星氏1950に詳しい。発掘までの経緯については、赤星氏が昭和24年12月初旬に長井の知人を訪問した際に、近所に土器らしきものが出土していることを聞いたことに端を発する。12月11日に横須賀考古学会のメンバーと現地を踏査し、病院前の麦畑で広範囲に土器が分布し

ていることを確認し、その後30日に横須賀考古学会のメンバー3名で発掘調査を実施した成果と見られる。調査はまず、幅60cm、南北5mのトレンチを深さ46cmまで掘削したところ、弥生土器が出土した。その後、トレンチ調査を継続したところ、竪穴住居の発見に至る。竪穴は4m四方の隅丸方形を呈し、耕作下17cmほど掘り込まれていた。東隅では完全な形の土器1点、南隅からは数個の土器片（埴）、西端では凝灰岩塊7～8個がかたまって見つかり、傍らには脚部の欠損した高坏が見つかった。竪穴中央部では、床面から15cmほど上で「前野町期」に属する埴1個体分が散在して見つかった。同じ高さで焼土が1m×50cmの範囲で見つかったが、これは竪穴住居埋没後の所産と見ている。まとめとして、本竪穴住居は弥生時代の所産で、その広さは8畳敷に等しい。この穴の上に藁葺き屋根が作られたもので、農家の1棟にあたる。出土土器から弥生時代末の「前野町期」ものと見られ、「その古さはおおよそ2000年前と思われる。」と記されている。しかし、これらの遺物や図面については掲載されていない。

【掲載図書概略】

先に触れた調査に関する概要は記されているが、遺構図や写真などの掲載はない。遺物の実測に関しては、横須賀市史に掲載されている（中村2010）（第12図）。

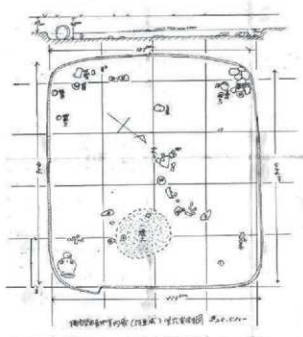
中村 勉 2010 「長井町内原遺跡」『新横須賀市史』別編考古 横須賀市

【小結】

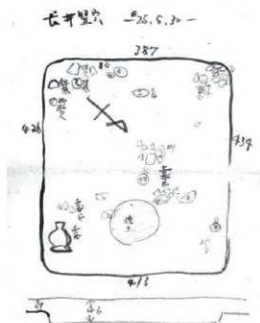
これらはすべて、古墳時代初頭から前期に帰属する土器である。長井内原遺跡は、古墳時代初頭から前期の大規模集落で、これらの資料は同遺跡の資料を補完する遺物と考えられる。（新山）

引用・参考文献

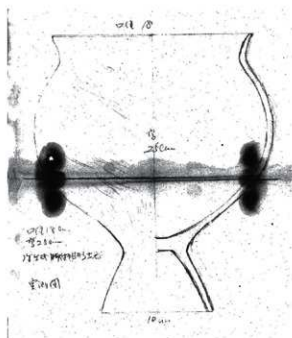
- 赤星直忠 1950 「長井竪穴発掘覚書」『三浦半島研究会会報』第2号 三浦半島研究会
 赤星直忠 1955 「神奈川県横須賀市長井遺跡」『日本考古学年報』3 日本考古学会
 大塚真弘ほか 1982 「長井町内原遺跡」『横須賀市文化財調査報告書』第9集 横須賀市教育委員会
 中村 勉 2010 「長井町内原遺跡」『新横須賀市史』別編考古 横須賀市



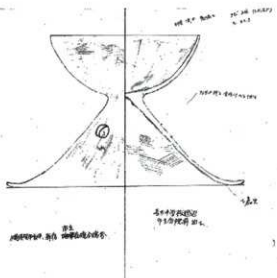
第5図 住居跡の図面



第6図 住居跡のスケッチ



第7図 台付き甕



第8図 高環



北信 白土寺金堂 (200.11)
1911.7

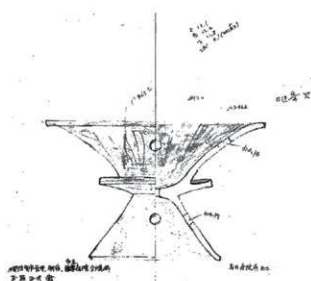
横濱市立井、物産、~~市立~~病院金堂
玉泉正史蔵

第10図 鉢

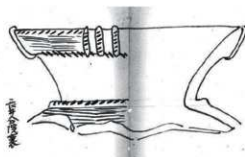


(昭和付蔵工器) (横濱市立金堂)
横濱市立井、物産、~~市立~~病院金堂

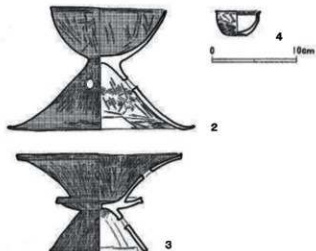
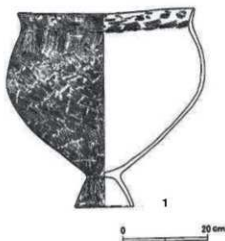
写真1 台付き甕



第9図 異形器台



第11図 甕の口縁



第12図 出土遺物 (1: 台付き甕、2: 高坪、3: 器台、4: 鉢)

年報番号 横須賀市03470 こんびら山古墳・ふくざく谷横穴群 横須賀市久里浜

1. 赤星ノートの内容

〔調査年月日〕

昭和32年11月4～10日。

〔資料概略〕

資料は、こんびら山古墳および横穴群の発掘調査記録一式であり、昭和32年より開始された東京電力久里浜火力発電所の建設工事に先立って横須賀市博物館（当時）が調査を実施した。赤星氏はこんびら山古墳の調査を担当している。

資料1は、こんびら山古墳および横穴群の位置図。「1/25000地形図より」とメモされた久里浜湾南岸の簡略地図で、火力発電所建設に伴う丘陵切り崩しおよび埋め立て地造成以前の海岸線がわかる。墳丘の所在する丘陵先端にはこんびら社跡を示したものであろう鳥居マークが描かれ、標高値と思われる数字「64.5」が記される。資料2は、こんびら山の遠景スケッチ。久里浜湾から南方のこんびら山を望み、山頂にわずかに盛り上がる墳丘を分かり易くやや濃く描いている。資料3は、こんびら山の遠景写真。資料2と同角度で撮影されたもの。この写真でも墳丘を確認することができる。資料4～8は、発掘調査概報の原稿および挿図、所在地概略図の描かれた表紙と原稿4ページ。こんびら山古墳の墳丘断面図。ふくざく谷横穴群の様式図と出土須恵器の復元図が冊子状に綴じられている。資料9は、ふくざく谷横穴群東1号横穴出土こはく甕玉断欠の原寸実測図。絵の具を用い赭色に色彩される。資料10は、こんびら山古墳の平面（等高線）図およびトレンチ配置図。複数本のトレンチが墳丘および南側の平場に縦横に配され、確認された盛土高や地表から地山までの深さが各所に書き込まれている。資料11は、ふくざく谷横穴群の出土土器形態図。資料12～25は、発掘調査の記録写真。古墳および周辺の立地や墳丘盛土断面の状況、横穴群出土遺物などが写されている。

なお、本稿での掲載は省略するが、この他に発掘調査に係る取り決め等の書類が同封されていた。

2. 記載資料の整理

〔遺跡概要〕

こんびら山古墳は、久里浜湾の入口南岸、東京湾に向かって突出する標高60m余りを測る丘陵先端頂部に築造された前方後円墳で、墳頂部にかつてこんびら社があったことからこんびら山と呼ばれている。主軸方位は東南東―西北西。後円部を東方の海側に配する。墳丘規模は全長約34m、後円部直径約15m、前方部幅約11m、前方部高約2.5mを計測。小型ではあるものの古墳時代後期において三浦半島最大規模を有している。おそらく江戸時代末期頃のこんびら社建設時に後円部上半が大きく削平されたことによって埋葬施設は遺存しておらず、葺石や埴輪、共存遺物も出土していないが、旧表土を残してその上に丘陵基盤を削り取った岩塊と黒土を混合した明瞭な盛土が確認されており、その状況は資料7や資料19・20にみることができる。築造時期は不詳であるが、赤星氏は自身が昭和27年に調査したこんびら山古墳の北西方約3.5kmの古久里浜湾奥に所在する大塚1号墳との墳丘規模・形状・主軸などの類似点から、大塚1号墳と大きく異なるない築造年代（6世紀後葉～末葉頃）を想定している。

ふくざく谷横穴群は、こんびら山南側の山腹に当時12穴以上が確認されており、安全面の考慮から調査可能であった8穴の調査を実施している。横穴様式や出土遺物の組成から、この谷地における横穴の築造は7世紀後半にはじまり8世紀末まで継続的に行われたとの報告がなされている。

〔掲載図書〕

- 赤星直忠 1958 「横須賀市久里浜こんびら山古墳並横穴群調査概報」『かながわ文化財』第12号 神奈川県文化財協会
 赤星直忠 1958 「横須賀市久里浜こんびら山古墳並横穴群調査概報」『横須賀考古学会年報』第3冊 横須賀考古学会
 赤星直忠 1959 「こんびら山古墳とふくざく谷横穴群」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第3号 横須賀市博物館
 横須賀市 2010 「こんびら山古墳」『新横須賀市史 別編 考古』

〔小結〕

こんびら山古墳の所在する古久里浜湾沿岸には、八幡神社古墳群、蓼原古墳、大塚古墳群といった多くの古墳が築造されており、5世紀末葉～7世紀前葉にかけて湾入口部の南岸砂州上から湾奥の丘陵上へと立地を移す継続的な造営が認められる。そうした傾向のなか、赤星氏がこんびら山古墳との類似点を指摘する大塚1号墳は最も湾奥に6基の古墳群を形成するのに対し、こんびら山古墳は東京湾に突出した丘陵突端の頂部に単独で築造されており、ともに古墳時代後期において三浦半島最大規模を有する前方後円墳でありながら、こんびら山古墳が立地的な特異性を示していることに注目できる。近年発見された三浦半島相模湾沿岸の丘陵根根部に築造される長柄板山古墳群（4世紀後葉の築造）は、その立地などから海上あるいは水上交通の要衝に見せる目的で築造された海浜型前方後円墳（3）と考えられており、造営の背景には畿内地域と関東以北を結ぶ海上ルートとの関係が推定されている。こんびら山古墳は県内最大級を誇る長柄・板山古墳群に比して規模が小さく墓石・埴輪なども確認されていないが、これを時期的な推移としてその立地特性に限ってみれば同古墳も海浜型前方後円墳と捉えることができよう。北方至近の横須賀市走水は三浦半島を横断して浦賀水道へ抜けたとされる宝亀二年以前の古東海道に推定伝路にあたり、古久里浜湾に注ぐ平作川は三浦半島最長の河川で流域に古墳群が築造される状況から水上交通路として利用されていたことが想定できる。三浦半島における各期の海浜型前方後円墳のありかたを考える上で、本資料は開発によって地形改変がなされてしまった古墳の貴重な記録と言えよう。（長澤）

引用・参考文献

1. 横須賀考古学会 2003 『三浦半島考古学辞典』
2. 横須賀市 2010 『新横須賀市史 別編 考古』
3. 公益財団法人かながわ考古学財団 2015 『海浜型前方後円墳の時代』
4. 田尾誠敏・荒井秀規 2017 藤沢市史ブックレット 8 『古代神奈川の道と交通』



資料1



資料2



資料3

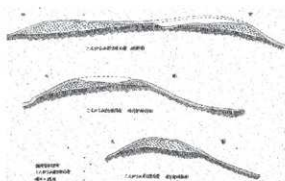


資料6

資料5



資料4



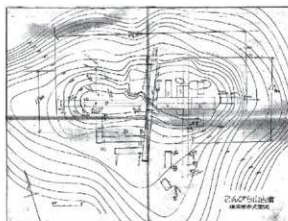
資料7



資料8



資料9



資料10



資料11



資料12



資料13



資料14



資料15



資料16



資料17



資料18



資料19



資料20



資料21



資料22



資料23



資料24



資料25

年報番号 横須賀市03573 鳥ヶ崎横穴群 横須賀市鴨居

1. 赤星ノートの内容

〔調査（踏査）年月〕

昭和42年1月20日頃

〔資料概略〕

資料は横須賀市に所在する鳥ヶ崎横穴墓群調査に係る概報である。同封された資料から本概報は昭和42年4月に神奈川県に提出されたものと考えられる。

2. 記載資料の整理

〔遺跡・資料概要〕

鳥ヶ崎横穴墓群は大正22年に土取り工事の最中に発見された、横須賀市鴨居2丁目に所在する東京湾岸最大規模の横穴墓群であり、6世紀末葉8世紀前葉頃に年代づけられる約60基の横穴墓が構築されていたとされる。丘陵東側の横穴墓群は大正期の土取工事によって消滅し、現在では南斜面の横穴墓群が一部残るのみである。これらのうち15基は、大正11（1922）年から昭和42（1967）年までにかけ、赤星氏らによって4回の調査が実施された。出土した遺物は東京国立博物館、横須賀市自然・人文博物館、赤星直忠博士文化財資料館に保管されているが、ほとんどは横穴墓の帰属が不明である。

本資料は昭和42年に調査された横穴墓6基についての報告書である。調査の経緯、各横穴墓の事実記載と出土遺物、横穴墓の時代についての所見が記載されている。添付図は調査地点の略図と各横穴墓の平・断面図（いずれも目測、開書、略測との記載あり）である。これらの横穴墓は、海上自衛隊構内での道路新設に伴い山腹を切り崩した際に発見され、横須賀市教育委員会により連絡を受けた赤星氏らが調査を実施したものである。この横穴墓群は赤星氏によって大正11・14年、昭和元年に発掘調査された横穴墓群の南側に位置するもので、上下2列で構成されている。

上記のように鳥ヶ崎横穴墓群から出土した遺物についてはほとんどが帰属不明であるため、『新横須賀市史 別編 考古』『鳥ヶ崎横穴墓群』では数点の遺物を除き、その出土遺物を「鳥ヶ崎横穴墓群一括出土」として記載している。このうち、本資料中で紹介されている5号穴から出土した銅剣1点については、先に調査された横穴墓からの出土記録がないことと本資料による記述内容から、図38-3：10である可能性が高い。

〔掲載図書〕

赤星直忠 1967「横須賀市鳥ヶ崎横穴群」『横須賀考古学会年報』第12冊 横須賀考古学会

〔掲載図書概要〕

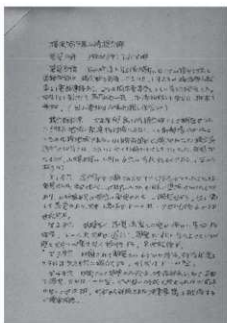
昭和42年に刊行された横須賀考古学会の年報である。本資料とは句読点や文章に一部差異が見られるが、「横須賀市鳥ヶ崎横穴群」として掲載されている。

2. 小結

本資料は鳥ヶ崎横穴墓群の調査報告書の原稿である。これまで「赤星ノート」を紹介してきた中でも、横須賀市に関連する資料として鳥ヶ崎横穴群の資料を数点紹介してきた。赤星氏著「穴の考古学」では、この横穴墓群が同氏の横穴研究の出発点とされていることから、その資料の重要性が伺える。（吉澤）

引用・参考文献

- 赤星直忠 1924a 「鴨居洞穴の発掘」『考古學雑誌』第14巻第12号 日本考古学会
 赤星直忠 1924b 「其後の鴨居洞穴の発見遺物」『考古學雑誌』第14巻第13号 日本考古学会
 赤星直忠 1925 「相州鴨居の横穴（一〜三）」『考古學雑誌』第15巻第8・9・11号 日本考古学会
 赤星直忠 1967 「横須賀市鳥ヶ崎横穴群」『横須賀考古学会年報』第12冊 横須賀考古学会
 赤星直忠 1970 『穴の考古学』学生社
 横須賀市 2010 『新横須賀市史 別編 考古』横須賀市



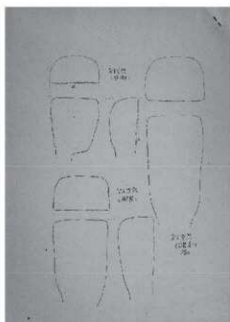
第13図 鳥ヶ崎横穴墓群報告書1



第14図 鳥ヶ崎横穴墓群報告書2



第15図 鳥ヶ崎横穴墓群報告書3



第16図 鳥ヶ崎横穴墓群報告書4

神奈川県における古代の仏教関連遺物（1）

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

はじめに

奈良・平安時代研究プロジェクトチームでは、今年度より仏教関連遺物の集成を行う。神奈川県内では2000年に「考古学から古代を考える会」による『古代仏教系遺物集成・関東』において集成がなされている。その後、県内各地で寺院関連遺跡や仏教関連遺物の出土が確認されており、資料の蓄積が見られる。そこで2000年度～2016年度までに刊行された報告書から仏教関連遺物の集成を行い、出土する地域、出土する遺構などの傾向と特徴を調べるとともに、それ以前の資料との比較検討・補完を目的とする。今年度は、相模川以東の集成を行う。

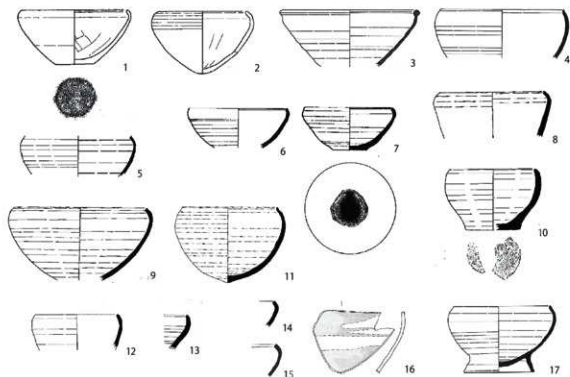
例 言

- ・図版の縮尺は1/6を基本としているが、軸端、匙は1/3とした。
- ・遺物の集成内容は『古代仏教系遺物集成・関東』に従った。
- ・墨書土器は「寺」「佛」を扱う。
- ・図版は器形ごとに集成し、武蔵国から相模国御浦郡、鎌倉郡、高座郡の順に掲載している。
- ・遺物名、遺構名、報告書名などは各報告書に従った。
- ・器形・器種などは観察表に基づいて集成しているが、記載がなくとも判断できるものは含めている。
- ・川崎市の瓦塔は特例として論文から集成している。遺跡名は現在子母口植之台遺跡に統一されている。

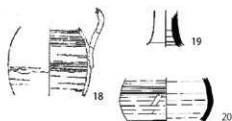


第1図 仏教関連遺物出土遺跡（相模川以東）

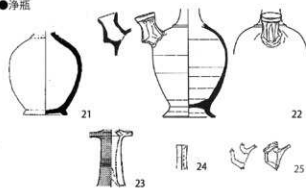
●仏鉢型土器



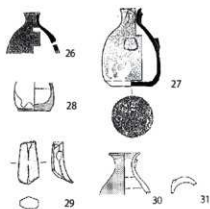
●水柱・水瓶



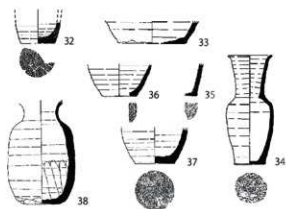
●浄瓶



●手付き瓶

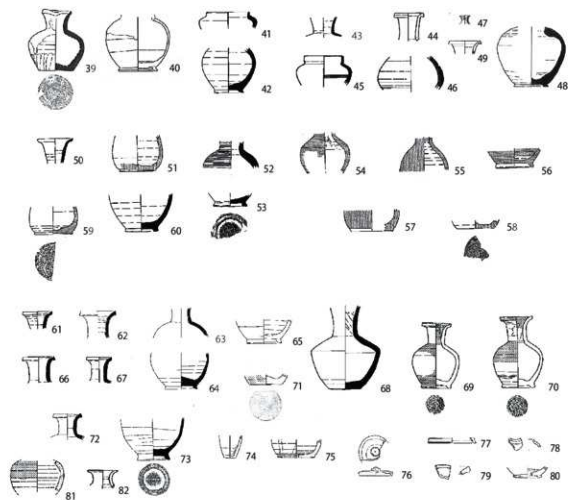


●壺G・壺

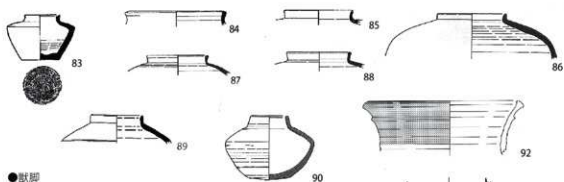


第2図 仏教関連遺物(1)

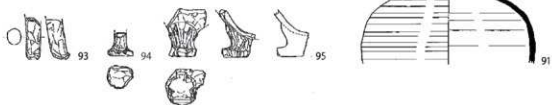
●小型瓶・小型壺



●短頸壺

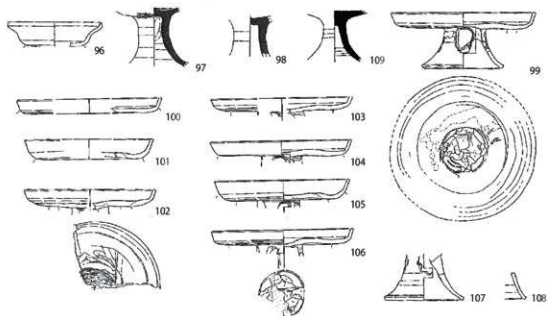


●獸脚



第3図 仏教関連遺物（2）

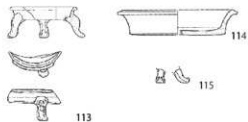
●高盤



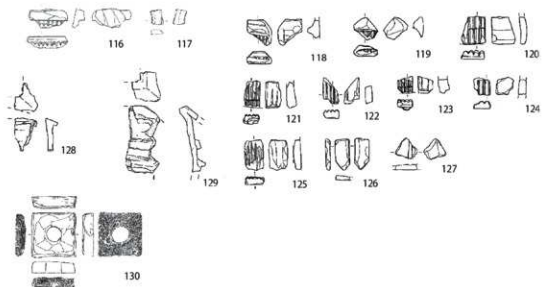
●香炉



●火舎

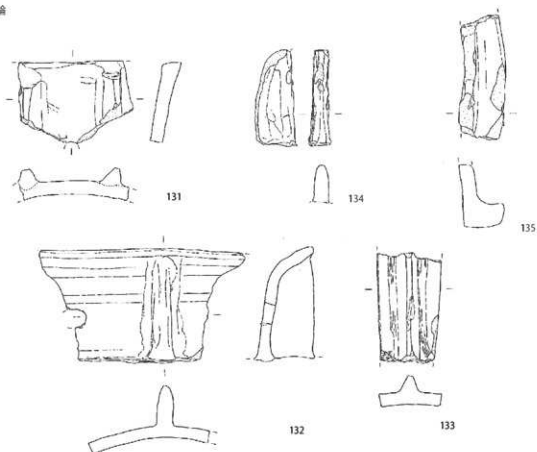


●瓦塔



第4図 仏教関連遺物(3)

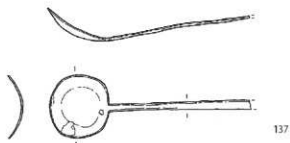
●相輪



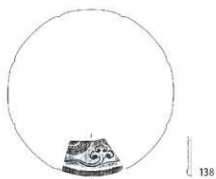
●軸端



●匙

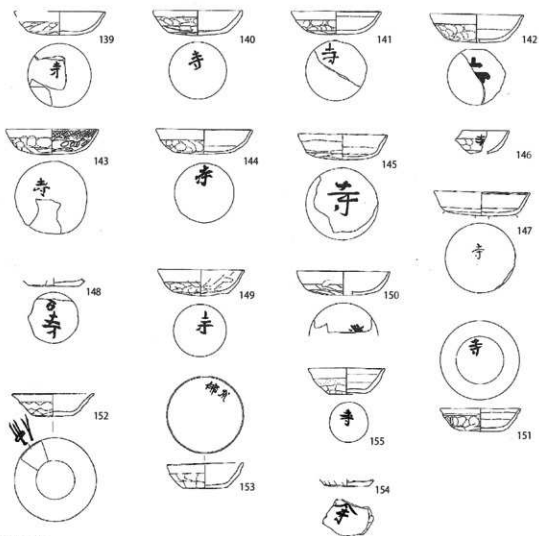


●鏡



第5図 仏教関連遺物（4）

●黒書土器



●刻書土器



第6図 仏教関連遺物(5)

神奈川県における古代の仏教関連遺物（1）

第1表 仏教関連遺物一覧

●仏鉢型土器

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
1・2	土師器 仏鉢	権田原遺跡	横浜市	FH9号住	鈴木重信・古原紀之ほか2013『権田原遺跡IV』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 46 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋 蔵文化財センター
3	須恵器 鉢	千年伊勢山台 遺跡	川崎市	第5次・6次遺構外	戸田哲也・服部隆博ほか2005『武蔵国橋郡 街推定地千年伊勢山台遺跡-第1～8次発掘 調査報告書』川崎市教育委員会
4	須恵器 鉢	早川城山地区 遺跡群No.146-1 遺跡	綾瀬市	H-3号住居址	戸田哲也・呉地英夫ほか2000『早川城山地区 遺跡群発掘調査報告書』早川城山地区遺跡群 発掘調査団
5	須恵器 仏鉢	河原口坊中遺跡 (第1次調査)	海老名市	P26区 H2号堅穴建物址	飯塚美保・高橋香・加藤久美2014『河原口坊 中遺跡第1次調査』（第4分冊）かながわ考 古学財団調査報告304 公益財団法人かなが わ考古学財団
6・7	須恵器 仏鉢	河原口坊中遺跡 (第2次調査)		遺構外	池田治・宮井香ほか2015『河原口坊中遺跡第 2次調査』（第1分冊）かながわ考古学財団 調査報告307 公益財団法人かながわ考古学 財団
8	須恵器 仏鉢型土器	七堂伽藍跡	茅ヶ崎市	H81・82号溝状遺構	小川岳人・飯塚美保ほか2008『小出川河川改 修事業関連遺跡群 茅ヶ崎市七堂伽藍跡(1)・ 寒川町大曲五反田遺跡』かながわ考古学財団 報告224 財団法人かながわ考古学財団
9	須恵器 仏鉢	七堂伽藍跡		H45号住居	阿部友寿・天野賢一ほか2010『小出川河川改 修事業関連遺跡群 茅ヶ崎市七堂伽藍跡(2)』 かながわ考古学財団調査報告251 財団法人 かながわ考古学財団
10	須恵器 仏鉢	七堂伽藍跡		H1号河道	
11	須恵器 仏鉢	七堂伽藍跡		溝状遺構 5	
12	須恵器 仏鉢	七堂伽藍跡		2次調査I区遺構外	茅ヶ崎市教育委員会2013『下寺尾宮街遺跡群 の調査～下寺尾七堂伽藍跡・高座郡街の調査 ～』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告40
13	須恵器 仏鉢	七堂伽藍跡		14次調査遺構外	
14	須恵器 仏鉢	宮山中里遺跡	寒川町	6号畝状遺構	高橋香・宮井香ほか2016『宮山中里遺跡 III』 かながわ考古学財団調査報告317 公益財団 法人かながわ考古学財団
15	須恵器 仏鉢	宮山中里遺跡		遺構外	
16	灰釉陶器 鉢	宮山中里遺跡		遺構外	
17	須恵器 高台付き鉢 (仏鉢)	田名半在家遺跡 G地点	相模原市	1号住居跡	大坪宣雄・杉本靖子2016『相模原市田名半在 家遺跡G地点発掘調査報告書』有限会社 吾妻 考古学研究所

●水注・水瓶

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
18	灰釉陶器 水注	宮原百石原遺跡	藤沢市	9号住居址	寺田兼方・西野吉論ほか2012『神奈川県藤 沢市宮原百石原(Na.236)遺跡発掘調査報告書』 湘南考古学研究所
19	灰釉陶器 浄瓶または 水瓶	河原口坊中遺跡 (第2次調査)	海老名市	遺構外	池田治・宮井香ほか2015『河原口坊中遺跡第 2次調査』（第1分冊）かながわ考古学財団 調査報告307 公益財団法人かながわ考古学 財団
20	須恵器 壺	西方A遺跡	茅ヶ崎市	H6号溝状遺構	井辺一徳・飯塚美保2007『小出川河川改修事 業関連遺跡群 茅ヶ崎市西方A遺跡・寒川町岡 田南河内遺跡』かながわ考古学財団報告223 財団法人かながわ考古学財団

●浄瓶

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
21	須恵器 浄瓶	南鍛冶山遺跡 4次調査区	藤沢市	SI0003	望月 芳2017『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書』 第13巻古代9 藤沢市教育委員会
22	須恵器 浄瓶	香川・下寺尾 遺跡群 北B地区	茅ヶ崎市	北B地区河道下流域	中村哲也・河合英夫ほか2005『香川・下寺尾 遺跡群 北B地区・下寺尾廃寺地区・雑谷地区 発掘調査報告書』香川・下寺尾遺跡群発掘調 査団
23	灰軸陶器 浄瓶	七堂伽藍跡		H72a号堅穴住居址	阿部友寿・天野賢一ほか2010『小出川河川改 修事業関連遺跡群 茅ヶ崎市七堂伽藍跡(2)』 かながわ考古学財団調査報告251 財団法人 かながわ考古学財団
24	灰軸陶器 浄瓶	七堂伽藍跡		5次1区遺構外	茅ヶ崎市教育委員会2013『下寺尾官衙遺跡群 の調査～下寺尾七堂伽藍跡・高座郡衙の調査 ～』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告40
25	灰軸陶器 浄瓶	七堂伽藍跡		13次遺構外	

●手付き瓶

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
26	灰軸陶器 取手付瓶	南鍛冶山遺跡 1次・2次調査区	藤沢市	SI0045	望月 芳2014『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書』 第11巻古代7 藤沢市教育委員会
27	須恵器 瓶	南鍛冶山遺跡 3次調査区		SI0033	望月 芳2016『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書』 第12巻古代8 藤沢市教育委員会
28	灰軸陶器 取手付瓶	早川城山地区 遺跡群No.13遺跡	綾瀬市	遺構外	戸田哲也・奥地英夫ほか2000『早川城山地区 遺跡群発掘調査報告書』早川城山地区遺跡群 発掘調査団
29	緑軸陶器 瓶	七堂伽藍跡	茅ヶ崎市	H9号溝	小川岳人・飯塚美保ほか2008『小出川河川改 修事業関連遺跡群 茅ヶ崎市七堂伽藍跡(1)・ 寒川町大曲五反田遺跡』かながわ考古学財団 報告224 財団法人かながわ考古学財団
30・31	灰軸陶器 取手付瓶	七堂伽藍跡		H43・44号堅穴 住居址	阿部友寿・天野賢一ほか2010『小出川河川改 修事業関連遺跡群 茅ヶ崎市七堂伽藍跡(2)』 かながわ考古学財団調査報告251 財団法人 かながわ考古学財団

●壺G・壺

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
32	須恵器 壺G	国分尼寺北方 遺跡	海老名市	SI4住居	渡辺 努・吉岡秀範2007『国分尼寺北方遺跡- 第27次・28次調査-』日本窯業史研究所報告第 69冊 日本窯業史研究所
33	須恵器 壺	西方A遺跡	茅ヶ崎市	H9号溝状遺構	井辺一徳・飯塚美保2007『小出川河川改修 事業関連遺跡群 茅ヶ崎市西方A遺跡・寒川町 田南河内遺跡』かながわ考古学財団報告223 財団法人かながわ考古学財団
34	須恵器 壺G	七堂伽藍跡		H11号河道址	小川岳人・飯塚美保ほか2008『小出川河川改 修事業関連遺跡群 茅ヶ崎市七堂伽藍跡(1)・ 寒川町大曲五反田遺跡』かながわ考古学財団 報告224 財団法人かながわ考古学財団
35	須恵器 壺G	七堂伽藍跡		H43・44号堅穴 住居址	阿部友寿・天野賢一ほか2010『小出川河川改 修事業関連遺跡群 茅ヶ崎市七堂伽藍跡(2)』 かながわ考古学財団調査報告251 財団法人 かながわ考古学財団
36	須恵器 壺G	七堂伽藍跡		H47号堅穴住居址	
37	須恵器 壺G	七堂伽藍跡		土器集中遺構2	茅ヶ崎市教育委員会2013『下寺尾官衙遺跡群 の調査～下寺尾七堂伽藍跡・高座郡衙の調査 ～』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告40
38	須恵器 瓶	七堂伽藍跡		堅穴建物7	

神奈川県における古代の仏教関連遺物（1）

●小型壺・小型瓶

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
39	須恵器 小型壺	大原遺跡	横浜市	II 2号住居址	鈴木重信・古風紀之ほか2011『大原遺跡』港 北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告44 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文 化財センター
40	灰釉陶器 長頸瓶	上麻生日光台 遺跡	川崎市	II-3号住居址	河合英夫・北平朗久ほか2007『川崎市麻生区 上麻生日光台遺跡第II地区発掘調査報告書』 玉川文化財研究所
41	須恵器 小型壺	河原口坊中遺跡 (第4次調査)	海老名市	11号竪穴建物址	阿部友寿・高橋香ほか2014『河原口坊中遺跡 第4次調査』かながわ考古学財団調査報告300 公益財団法人かながわ考古学財団
42	須恵器 小型長頸瓶	河原口坊中遺跡 (第4次調査)		11号竪穴建物址	
43	須恵器 小型長頸瓶	河原口坊中遺跡 (第1次調査)		P24地区古墳時代 後期～平安時代遺 構外	飯塚美保・高橋香ほか2014『河原口坊中遺跡 第1次調査』（第3分冊）かながわ考古学財団 調査報告304 公益財団法人かながわ考古学 財団
44	灰釉陶器 小型長頸瓶	河原口坊中遺跡 (第1次調査)		P24地区古墳時代 後期～平安時代遺 構外	
45	須恵器 小壺	河原口坊中遺跡 (第2次調査)		18号住居址	池田治・宮井香ほか2015『河原口坊中遺跡第2 次調査』（第1分冊）かながわ考古学財団調査 報告307 公益財団法人かながわ考古学財団
46	須恵器 壺	河原口坊中遺跡 (第2次調査)		37号溝状遺構	
47	灰釉陶器 小瓶	上ノ町遺跡		遺構外	矢野信吾・村上吉正ほか2003『上ノ町遺跡遺 跡』かながわ考古学財団調査報告143 財団 法人かながわ考古学財団
48	須恵器 壺	円蔵・下ヶ町 遺跡	茅ヶ崎市	7地点25号竪穴住 居址	宮下秀之2003『円蔵・下ヶ町遺跡(遺物編) 茅ヶ崎市文化振興財団調査報告第7集 財団法 人 茅ヶ崎市文化振興財団
49	灰釉陶器 小型壺	香川・下寺尾 遺跡群 北地区 北地区		北地区砂丘包 含層	中村哲也・河合英夫ほか2005『香川・下寺尾遺 跡群 北地区・下寺尾寺地区・篠谷地区 発掘 調査報告書』香川・下寺尾遺跡群発掘調査団
50	須恵器 小型瓶	七堂伽藍跡		H37号溝	小川岳人・飯塚美保ほか2008『小出川河川改 修事業関連遺跡群 茅ヶ崎市七堂伽藍跡(1)・ 寒川町大曲五反田遺跡』かながわ考古学財団 報告224 財団法人かながわ考古学財団
51	灰釉陶器 小型壺	七堂伽藍跡		H44・45号溝	
52・53	須恵器 小型瓶	七堂伽藍跡		H81・82号溝状遺構	
54～58	灰釉陶器 小型壺	七堂伽藍跡		H81・82号溝状遺構	
59	灰釉陶器 小型長頸瓶	七堂伽藍跡		C1号河道址	
60	須恵器 長頸壺	七堂伽藍跡		遺構外	
61	須恵器 小型瓶	七堂伽藍跡		H31号竪穴住居址	
62～64	須恵器 小型瓶	七堂伽藍跡		H43・44号竪穴 住居址	
65	灰釉陶器 小型瓶	七堂伽藍跡		H43・44号竪穴 住居址	
66	須恵器 小型瓶	七堂伽藍跡		H45号竪穴住居址	
67	須恵器 小型瓶	七堂伽藍跡		H47号竪穴住居址	
68	須恵器 小型長頸壺	七堂伽藍跡		H71a号竪穴住居址	阿部友寿・天野賢一ほか2010『小出川河川改 修事業関連遺跡群 茅ヶ崎市七堂伽藍跡(2)』 かながわ考古学財団調査報告251 財団法人 かながわ考古学財団
69・70	灰釉陶器 小型瓶	七堂伽藍跡		H71a号竪穴住居址	
71	灰釉陶器 小型瓶	七堂伽藍跡		H1号河道	

図版No	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
72	須恵器 小型瓶	七堂伽藍跡	茅ヶ崎市	土器集中遺構1	茅ヶ崎市教育委員会2013『下寺尾官衙遺跡群の調査～下寺尾七堂伽藍跡・高座部衙の調査～』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告40
73	須恵器 小型瓶	七堂伽藍跡		大型掘立柱建物・礎石建物周辺遺構	
74	灰釉陶器 ミニチュア 長頸瓶	七堂伽藍跡		5次遺構外	
75	灰釉陶器 小型瓶	七堂伽藍跡		16次遺構外	
76	二彩陶器 葉蓋	七堂伽藍跡		4次遺構外	
77	二彩陶器 葉蓋	七堂伽藍跡		2次2区遺構外	
78	二彩陶器 葉蓋	七堂伽藍跡		5次1区遺構外	
79・80	二彩陶器 小型瓶	七堂伽藍跡		12次遺構外	
81	灰釉陶器 小形壺	倉見川端遺跡	寒川町	SX3	高杉博章・市川正史2015『倉見川端遺跡発掘調査報告書』株式会社アーク・フィールドワークシステム
82	灰釉陶器 瓶	宮山中里遺跡		遺構外	相良英樹・川嶋美佳子ほか2016『宮山中里遺跡Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告314 公益財団法人 かながわ考古学財団

●短頭壺

図版No	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
83	須恵器 短頭壺	権田原遺跡	横浜市	Ⅷ22号住居址	鈴木重信・古泉紀之ほか2013『権田原遺跡Ⅳ』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告46 公益財団法人横浜ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
84	須恵器 短頭壺	延命寺遺跡	逗子市	1a号井戸	松山敬一郎2003『延命寺遺跡（逗子市Na110）発掘調査報告書』東国歴史研究所調査研究報告第32集 延命寺遺跡発掘調査団
85	須恵器 短頭壺	蟹田遺跡		溝1	2007『神奈川県逗子市埋蔵文化財緊急調査報告書5-平成15年度・平成16年度・平成17年度-』逗子市教育委員会
86	須恵器 短頭壺	池子遺跡群（小学校建設地点）		H18号溝状遺構	松田光太郎・松葉崇ほか2011『池子遺跡群Ⅵ』かながわ考古学財団調査報告263 財団法人 かながわ考古学財団
87・88	須恵器 短頭壺	香川・下寺尾 遺跡群北B地区	茅ヶ崎市	北B地区砂丘域包 含層	中村哲也・河合英夫ほか2005『香川・下寺尾遺跡群 北B地区・下寺尾庵寺地区・稲谷地区発掘調査報告書』香川・下寺尾遺跡群発掘調査団
89	須恵器 短頭壺	七堂伽藍跡		H81・82号溝状遺構	小川岳人・飯塚美保ほか2008『小出川河川改修事業関連遺跡群 茅ヶ崎市七堂伽藍跡(1)・寒川町大曲五反田遺跡』かながわ考古学財団報告224 財団法人 かながわ考古学財団
90	須恵器 短頭壺	鶴嶺八幡宮 参道		1号竪穴住居址	宮下秀之2010『鶴嶺八幡宮参道』茅ヶ崎市文化振興財団調査報告23 財団法人 茅ヶ崎市文化振興財団
91	須恵器 短頭壺	七堂伽藍跡		H1号河道	阿部友寿・天野賢一ほか2010『小出川河川改修事業関連遺跡群 茅ヶ崎市七堂伽藍跡(2)』かながわ考古学財団調査報告251 財団法人 かながわ考古学財団
92	灰釉陶器 短頭壺	七堂伽藍跡		H1号河道	

神奈川県における古代の仏教関連遺物（1）

● 獣足

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
93	土師器 獣足	石原谷遺跡 第3地点	藤沢市	20号住居址	伊藤基吉・坪田弘子ほか2005『稲荷台遺跡群 石原谷遺跡第3地点発掘調査報告書』玉川文化財研究所
94	須恵器 獣脚	七堂伽藍跡	茅ヶ崎市	B81・82号溝状遺構	小川岳人・飯塚美保ほか2008『小出川河川改修事業関連遺跡群 茅ヶ崎市七堂伽藍跡(1)・寒川町大曲五反田遺跡』かながわ考古学財団報告224 財団法人かながわ考古学財団
95	須恵器 獣脚	七堂伽藍跡		遺構外	阿部友寿・天野賢一ほか2010『小出川河川改修事業関連遺跡群 茅ヶ崎市七堂伽藍跡(2)』かながわ考古学財団調査報告251 財団法人かながわ考古学財団

● 高盤

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
96	土師器 高盤	岡上-4遺跡	川崎市	H17号住居址	呉地英夫・河合英夫ほか2001『神奈川県川崎市麻生区岡上-4遺跡第2地点発掘調査報告書』岡上-4遺跡発掘調査団
97	須恵器 高盤	岡上-4遺跡		H17号住居址	
98	須恵器 高盤	岡上-4遺跡		H19号住居址	
99～108	須恵器 高盤	乗越遺跡	横須賀市	5号窯	中三川昇ほか2012『乗越遺跡』横須賀市文化財調査報告書 横須賀市教育委員会
109	須恵器 高盤	下寺尾西方A遺跡	茅ヶ崎市	B24号住居址	村上吉正・井澤 純ほか2003『下寺尾西方A遺跡』かながわ考古学財団調査報告157 財団法人かながわ考古学財団

● 香炉

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
110	緑釉陶器 香炉蓋	河原口坊中遺跡 (第2次調査)	海老名市	遺構外	池田治・宮井香ほか2015『河原口坊中遺跡第2次調査』(第1分冊) かながわ考古学財団調査報告307 公益財団法人かながわ考古学財団
111	土師器 香炉蓋	七堂伽藍跡	茅ヶ崎市	3次調査遺構外	茅ヶ崎市教育委員会2013『下寺尾官衙遺跡群の調査～下寺尾七堂伽藍跡・高座郡衙の調査～』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告40
112	須恵器 高環型香炉	七堂伽藍跡		4次調査遺構外	

● 火舎

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
113	二彩陶器 火舎	七堂伽藍跡	茅ヶ崎市	堅穴建物 3	茅ヶ崎市教育委員会2013『下寺尾官衙遺跡群の調査～下寺尾七堂伽藍跡・高座郡衙の調査～』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告40
114	二彩陶器 火舎	七堂伽藍跡		大型雁立柱建物・礎石建物周辺遺構	
115	二彩陶器 火舎	七堂伽藍跡		15次3区遺構外	

● 瓦塔

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
116・117	土製品 瓦塔	千年-1遺跡	川崎市	表探	吉野真由美2003『川崎市高津区千年-1遺跡採集の瓦塔について』『川崎市市民ミュージアム紀要第16集』
118 ～ 127	土製品 瓦塔	河原口坊中遺跡 (第2次調査)	海老名市	遺構外	池田治・宮井香ほか2015『河原口坊中遺跡第2次調査』(第1分冊) かながわ考古学財団調査報告307 公益財団法人かながわ考古学財団
128・129	土製品 瓦塔	七堂伽藍跡	茅ヶ崎市	堅穴建物 3	茅ヶ崎市教育委員会2013『下寺尾官衙遺跡群の調査～下寺尾七堂伽藍跡・高座郡衙の調査～』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告40
130	陶質品 瓦塔(露盤)	宮山中里遺跡	寒川町	遺構外	相良英樹・川崎実佳子ほか2016『宮山中里遺跡II』かながわ考古学財団調査報告314 公益財団法人 かながわ考古学財団

●相輪

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
131	陶製品 相輪	七堂伽藍跡	茅ヶ崎市	堅穴建物 3	茅ヶ崎市教育委員会2013『下寺尾官衙遺跡群の調査～下寺尾七堂伽藍跡・高座郡衙の調査～』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告40
132・133	陶製品 相輪	七堂伽藍跡		堅穴建物 4	
134	陶製品 相輪	七堂伽藍跡		大型雁立柱建物・礎石建物周辺遺構	
135	陶製品 相輪	七堂伽藍跡		土器集中遺構 2	

●軸端

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
136	青銅製品 軸端	七堂伽藍跡	茅ヶ崎市	土器集中遺構 2	茅ヶ崎市教育委員会2013『下寺尾官衙遺跡群の調査～下寺尾七堂伽藍跡・高座郡衙の調査～』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告40

●匙

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
137	青銅製品 匙	七堂伽藍跡	茅ヶ崎市	4次遺構外	茅ヶ崎市教育委員会2013『下寺尾官衙遺跡群の調査～下寺尾七堂伽藍跡・高座郡衙の調査～』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告40

●鏡

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
138	雲龍文八花鏡	田名半在家遺跡 G地点	相模原市	1号住居跡	大坪宣雄・杉本清子2016『相模原市田名半在家遺跡G地点発掘調査報告書』有限会社 吾妻考古学研究所 内川隆志・竹原広展ほか2016『田名半在家遺跡資料調査報告書』相模原市教育委員会

●土器

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
139・140	『寺』 土師器環	岡上-4 遺跡	川崎市	H-12号住居址	呉地英夫・河合英夫ほか2001『神奈川県川崎市麻生区岡上-4 遺跡第2 地点発掘調査報告書』岡上-4 遺跡発掘調査団
141 ～147	『寺』 土師器環	岡上-4 遺跡		H-17号住居址	
148	『万寺』 土師器環	岡上-4 遺跡		H-17号住居址	
149	『寺』 土師器環	岡上-4 遺跡		H-19号住居址	
150	『寺』 土師器環	岡上-4 遺跡		H-24号住居址	
151	『寺』 土師器環	岡上-4 遺跡		H-30号住居址	
152	『佛』 土師器環	南鍛冶山遺跡 1次・2次調査区	藤沢市	SI0018	望月 芳2014『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書』第11巻古代9 藤沢市教育委員会
153	『佛奉』 土師器環	南鍛冶山遺跡 4次調査区		SI0070	望月 芳2017『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書』第13巻古代9 藤沢市教育委員会
154	『寺』 土師器環	香川・下寺尾 遺跡群 雑谷地区	茅ヶ崎市	堅穴建物	2005『香川・下寺尾遺跡群北B地区・下寺尾地区・雑谷地区発掘調査報告書』香川・下寺尾遺跡群発掘調査団
155	『太寺』 土師器環	七堂伽藍跡		H1 号河道址	小川岳人・飯塚美保ほか2008『小出川河川改修事業関連遺跡群 茅ヶ崎市七堂伽藍跡(1)・寒川町大曲五反田遺跡』かながわ考古学財団報告224 財団法人かながわ考古学財団

●刺書土器

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
156	『寺』 土師器環	中ノ原遺跡 H地点	大和市	2号堅穴住居址	荻澤太郎・大橋正子ほか2014『中ノ原H地点発掘調査報告書』国際文化財株式会社

神奈川県の県央地域の中世遺跡（3）

中世プロジェクトチーム

はじめに

本プロジェクトチームでは、中世の中心である鎌倉市、小田原市以外の県内の中世遺跡の発掘調査の集成を一昨年から続けている。現在も県央部では発掘調査が盛んに行われており、特に伊勢原市では多くの中世遺跡が発見され注目を浴びている。県央部から県西部にかけての地域で、中世資料の蓄積もここ数年で著しく増加している状況が見受けられる。

県内の中世遺構の検討を行う過程で、現状を把握するため集成を行い、研究紀要21・22で県央部、横浜市、湘南地域の中世遺跡の集成を行った。今回は、湘南地域の残りや県西部、川崎市域の集成を行ない、残った三浦半島地域の集成を行った後、県内の中世遺構の検討を行うための基礎資料とする。

例言

1. 神奈川県内の県央・県西地域については、明確な地域区分があるわけではない。今回は、茅ヶ崎市・寒川町・平塚市・二宮町・中井町・松田町・山北町・南足柄市・箱根町・川崎市を掲載する。
2. 基礎データの集成には、平成27年3月までに刊行された発掘調査報告書を基本とし、それ以外の書籍については、情報入手可能な範囲でデータに加えることとしている。
3. 集成表の項目はこれまでと同じであり、以下のとおりである。
 - (1) 遺跡名：発掘調査報告書（以下、報告書とする）に記載されている名称を原則とするが、現行の神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳に基づき、文献とは異なる名称を使用した遺跡もある。
 - (2) 所在地：報告書に記載されている住所・番地を記載した。合併による変更は新市町村に含めている。ただし、報告書の記載を優先し、新住所・新地番への変更は行っていない。複数にまたがる場合は、代表と思われる番地を記載した。
 - (3) 遺跡の種別：報告書の抄録に記載された種別を原則とするが、抄録がないものや中世の成果と異なる場合は、内容に応じて変更した。
 - (4) 立地環境：報告書の該当部分を要約した。
 - (5) 遺跡の概要：報告書の調査成果を要約した。
 - (6) 年代：報告書の年代表記を原則とするが、現行の遺物編年により、西暦年代（○世紀）で表記できる場合は（ ）付で記載した遺跡がある。
 - (7) 文献：巻末の参考文献と対応している。茅ヶ崎市については、研究紀要22「神奈川県の県央地域の中世遺跡（2）」で一部集成をしているので、文献番号は続きの5からとしている。
 - (8) 集成した事例（特に、溝や溝状遺構）の中には、覆土の特徴（宝永火山灰を含まない等）や大室期以降の瀬戸・美濃製品（器種の消長期間が長く、破片からは時期の特定困難）が出土したことにより、中世として報告されたものがある。中世以外の時期も含んでいると推測されるが、集成の対象としている。

（宮坂淳一）

第1表 茅ヶ崎市・茅川町・平塚市・二宮町・中井町・松田町・山北町・南足柄市・箱根町・川崎市における中世道路一覧表

茅ヶ崎市

道路名	所在地	道路の種類	立地環境	道路の概要	年代	文献
円蔵・御国敷B遺跡第1地点	円蔵字御国敷2252～2262、2133～2346	集落	自然堤防上	中近世主体の集落址。	中世	5
円蔵・御国敷B遺跡第2地点	円蔵字御国敷2107～2112、2133～2145	集落	自然堤防上	中近世主体の集落址。	中世	5
円蔵・下ヶ町B遺跡	円蔵字下ヶ町2420	集落	自然堤防上	中近世主体の集落址。	中世	5
円蔵・鶴ヶ町遺跡第2地点	円蔵二丁目9-25、29・30	集落	自然堤防上	不明。	中世	5
円蔵御国敷A遺跡	円蔵2239	集落	自然堤防上	古代～近世の複合遺跡。	中世	5
西久保・上ノ町遺跡	西久保字上ノ町830～830ほか	集落	自然堤防上	中近世主体の集落址。	中世	5
浜之郷・宮ノ越遺跡	浜之郷字宮ノ越896～924	集落	自然堤防上	古代の集落が主体。中世と断定できる遺構はない。	中世	5
浜之郷・宮ノ越遺跡	浜之郷447番地	集落	自然堤防上	古墳～中近世の複合遺跡。	中近世	5
浜之郷本社A遺跡	浜之郷402-3	集落	自然堤防上	古代～近世の複合遺跡。中世の遺構には、かわらけ120個体を埋めた土坑やピット・溝などがある。	中近世	5
浜之郷本社A遺跡	浜之郷402-3	集落	自然堤防上	古代～近世の複合遺跡。中世の遺構には、ピット・溝などがある。	中近世	5
本村・居村B遺跡	本村四丁目17・22	集落	砂丘・後背湿地	古代の集落が主体。中世と断定できる遺構はない。	中世	5
矢畑・明王ヶ谷遺跡	矢畑字明王ヶ谷173・191・192	集落	自然堤防上	中世主体の集落址。	中世	5
矢畑・明王ヶ谷遺跡	矢畑字明王ヶ谷199	集落	自然堤防上	中世居館跡。	中世	5
矢畑・金山遺跡	矢畑字金山91-1、92-3	集落	自然堤防上	古代～中近世の複合遺跡。中世の遺構には、土蔵・井戸・溝などがある。	中世	5
矢畑・金山遺跡	矢畑字金山91-1、92-3	集落	自然堤防上	古代～中近世の複合遺跡。	中世	5
矢畑・金山遺跡第1地点	矢畑字金山123-24	集落	自然堤防上	古代の集落が主体。中世と断定できる遺構はない。	中世	5
矢畑・金山遺跡第2地点	矢畑字金山17	集落	自然堤防上	中世主体の集落址。	中世	5
日久保遺跡	芹沢字日久保422番	(耕作地)	台地	遺構外から中世遺物18点出土。	13c～15c	6
御国敷A遺跡	円蔵2239番地ほか	集落	自然堤防上	古代の集落が主体。中世と断定できる遺構はない。	15c～16c	7
巳付田B遺跡	小和田一丁目662-11ほか	集落	砂丘・後背湿地	古代の集落が主体。中世の遺構は区別できないものが見られる。	13c～15c	8
旧相模川堤防	下町屋1-351-2	堤防	沖積地(河川)	旧相模川堤防の調査。	中世	9
本社A遺跡(鶴岡矢畑社地)	浜之郷443番地	集落	砂丘・後背湿地	鶴岡八幡社の南面に位置する遺跡で、中世の遺構は区別できる可能性が高いものが見られる。	13c～15c	10
上ノ町遺跡	西久保字上ノ町2653外	集落(集落地)	自然堤防 砂質微高地	東西230m×南北200m以上の場に囲まれた戦国期(近衛氏)居館の可能性。井戸跡(池・窪地)の発見。	13c～16c	11

神奈川県の中世道路（3）

下寺尾七雲色道跡	下寺尾(西方)159地	寺院址	台地上	古代～中世の複合道跡。	中世	12
香川・下寺尾道跡群	下寺尾地内	集落	沖積低地～自然堤防上	古代～近世の複合道跡。	中世	13
円蔵(鶴ヶ町)110地	円蔵(鶴ヶ町)110地	集落	自然堤防上	古代～近世の複合道跡。	中世～近世初期	14
浜之郷本社A道跡	浜之郷(本社)445地	集落	自然堤防上	古墳～近世の複合道跡。	中世	15
円蔵(御屋敷)2310地	円蔵(御屋敷)2310地	集落	自然堤防上	弥生～近世の複合道跡。	古代～中世	16
西久保京町道跡	西久保(京町)847地	集落、生産址	自然堤防上	古墳～近世の複合道跡。	古代～中世	17
浜之郷宮ノ原道跡	浜之郷(宮ノ原)506地	集落	自然堤防上	古墳～近世の複合道跡。	中世	18
茅ヶ崎市西方A道跡・茅川町岡田南内道跡	茅ヶ崎市下寺尾187 茅川町岡田577	集落・耕作地	砂丘・後背湿地	唐状遺構が主体。 旧河道から古代～中世遺物が混在して出土。	13c～16c	19
下ヶ町道跡	円蔵(鶴ヶ町)2443、2905地、 2357、2405地	集落	自然堤防上	古墳～近世の複合道跡。土曜墓(16cのむらけ出土)	16c	20
鶴ヶ町道跡	矢張(金山)61地	集落	自然堤防上	古墳～近世の複合道跡。	中世	21
矢張金山道跡	茅ヶ崎市下寺尾188	集落、館跡	自然堤防上	弥生～近世の複合道跡。	中世	22
茅ヶ崎市七雲色道跡(1)・茅川町大曲五反田道跡	茅ヶ崎市下寺尾188 茅川町大曲1-24	集落・耕作地	祀産原	唐状遺構が主体。 旧河道から古代～中世遺物が混在して出土。	13c～15c	23
旧相模川橋脚	下町屋1-551-2	橋脚	沖積低地	中世前期の相模川に伴う堤防や土木工事の痕跡、中世後期の墓域。	橋脚は12c代 土曜墓は中世後期	24
西久保・大屋敷B道跡	西久保(大屋敷)745地	集落	自然堤防上	弥生～近世の複合道跡。	中世(15c～16c)	25
西久保・大屋敷B道跡	西久保(大屋敷)745地	集落	自然堤防上	弥生～近世の複合道跡。	中近世	26
西久保・大屋敷B道跡	西久保(大屋敷)745地	集落	砂丘上	弥生～近世の複合道跡。	中世	27
上ノ町道跡	西久保地先	集落・館跡地	自然堤防 砂質軟高地	東西200m×南北200m以上の堀に囲まれた戦国期(近衛氏)居館の可能性。住戸跡、窪地(池)の発見。	13c～16c	28
上ノ町道跡	西久保地先	集落・館跡地	自然堤防 砂質軟高地	中世居館の一面。区画溝や耕作に伴う井戸や溝。	13c～16c	29
円蔵(小井戸)201地	円蔵(小井戸)201地	集落	自然堤防上	弥生～近代の複合道跡。	中世	30
鶴瀬八幡宮参道	浜之郷782番地	参道	沖積低地～自然堤防上	近世の参道・古代の集落が主体。	中世(13c代)	31
西久保・大屋敷A道跡	西久保(大屋敷)647地	集落	自然堤防上	弥生～近世の複合道跡。	中世(遺構は出層位による)	32
向原道跡	宝田3-920、本村889、宝田3-1、本村3-11地	集落	砂丘上	弥生～近世の複合道跡。中世は墓域。	中世	33

遺跡名	所在地	種別	立地環境	遺跡の概要	年代	文献
松林綱久保A遺跡	菱沼(綱久保)1362付近、(松林1-12～19、2-17～19)	集落	砂丘上	古代～近世の複合遺跡。土坑(16c～17c)がわらけ出土。	中世	34
上ノ町遺跡	西久保字大町93-2	集落・自然防砂質微高地	自然防砂質微高地	中世前期の溝。	13c～14c 15c～17c主体	35
上ノ町遺跡	西久保字大町442-2	集落・自然防砂質微高地	自然防砂質微高地	区画・排水のための溝。	15c～16c	36
前田A遺跡	菱沼(前田)370小和田(前田)1009松林2-14他	集落	砂丘上	古墳後期～平安時代の複合遺跡。	15c末～17c前半	37
矢畑・明王ヶ谷遺跡	矢畑(明王ヶ谷)194他	集落	沖積低地	平安時代～中近世の複合遺跡。	13c代	38
中通C遺跡	香川(中通)1394、1397他	集落	砂丘上	古代～中世の複合遺跡。	中世	39
矢畑金山遺跡	矢畑(金山)61他	集落	自然堤防上	古墳～近世の複合遺跡。	中世	40
石神遺跡	元町6157-3、6156-付近	集落	砂丘上	縄文～中世の複合遺跡。	13c後半～14c前半	41
中通C遺跡	香川(中通)1394、1397他	集落	砂丘上	古代～中世の複合遺跡。	中世	42
栗川町						
栗川神社境内	宮山3914番	集落	台地・段丘上	竪立柱建物、溝、土坑。かわらけ、白磁、板碑、五輪塔等が出土。	13c～14c 15c～16c	1
倉見才ノ遺跡第3次調査	倉見2017-1、2021	散布地	台地・段丘上	土坑、陶磁器が出土。	中世	2
倉見才ノ遺跡第4次調査	倉見2011番1他	散布地	台地・段丘上	箱型研状の皿。	中世	3
梶原景時館跡・塔の塚	一宮2丁目25、8丁目6、7、回田四丁目1864	塚	台地	梶原景時館に直接関連する時期の遺物は見つからない。	15c後半～16c前半	4
小動嶋毛遺跡	小動882-2他	散布地	台地	「はたけ」の可能性ある溝条遺構。	16c～17c	5
宮山甲遺跡・宮山台地遺跡	宮山3447-1、宮山3608-8	集落・耕作地	自然堤防	遺構に伴う遺物は少ない。 白磁玉縁鉢、常滑など12cに属する遺物も出土。	13c～14c、15c	6
回田西河内遺跡	回田97、98	集落	台地	地下式土、土坑、溝。かわらけ、陶器が出土。	16c～17c	7
倉見才ノ遺跡第7次調査	倉見2045番1他	散布地	台地・段丘上	ピット。かわらけが出土。	16c～17c	8
栗川神社遺跡	宮山3915番外	集落	台地・段丘上	土坑、集石、溝、陶磁器、かわらけ、銭が出土。	16c～17c	9
回田西河内遺跡第2次調査	回田36-4	散布地	台地	段切り、漆鉢、鉄製品、五輪塔が出土。	13c末～近世初期	10
塔の塚(N52遺跡)第2次調査	回田四丁目1864番	塚	台地	段。かわらけ、常滑、北支銭が出土。	13c後半～15c中頃	11
倉見才ノ遺跡第11次調査	倉見2009番1	散布地	台地・段丘上	障子堀は栗川家臣の高木氏に関連する遺構か。	16c～17c	12
回田西河内遺跡	回田96-1他	集落・墓域	台地	障子堀様の施設をもつ箱型研状の堀が遺状遺構とほぼ直交して確認。	14c～16cか	13

平塚市

遺跡名	所在地	種別	立地環境	通説の概要	年代	文献
四之宮上郷、下郷	四之宮	(集落)	自然堤防	井戸、溝、土坑墓から中世遺物が出土。種別・数量とも豊富だが詳細は不明である。	中世	1
板垣遺跡	岡崎字板垣536-5	城館	台地	溝を巡らす建物跡や溝。岡崎城関連する遺構か。水堀通宝が出土。	中世	2
御殿D遺跡	御殿二丁目(中陵小学校内)	耕作地 (集落)	砂丘	溝が主体。慶長年間(1596~1614)に造営された中陵御殿以前の溝を含む。	中世(13c)	3
中里E遺跡	中里(富士見小学校内)	集落	砂丘	堅穴状遺構から11点のかかわりが出土。井戸から米甕が出土した。	13c後半か	4
大原遺跡	大原1519番2	耕作地	砂丘・砂丘間凹地	包含層から寛弘通宝1点が出土。	中世	5
四之宮下郷遺跡	四之宮諏訪南451~大神字遠藤1908	耕作地集落	砂丘・自然堤防	自然堤防上の遺構から比較的多くの遺物が出土。小片が主体であるが、酒倉など産品を含む。	13c初期~15c	6
豊田本宿D遺跡	豊田本宿字本宿1663番2他	耕作地集落	砂丘・自然堤防	溝・土坑からかわらけ、常滑焼片が出土。	中世後期(15c)	7
豊田本宿遺跡	豊田本郷	耕作地集落	砂丘・自然堤防	中世後半の生業に係わる遺構が主体。豊田氏の本拠と伝わる地域で中世前半の総載品も出土。	13c~16c	8
御殿宮遺跡	平塚5丁目774番2他	耕作地集落	砂丘・後背湿地	溝から滑石瀬とかわらけが出土。	13c末~14c中	9
御殿C遺跡	御殿三丁目235番3他	耕作地集落	砂丘・自然堤防	井戸から、かわらけ1点、遺構外で瀬戸美濃産の茶目茶碗1点が出土。	中世	10
通り西遺跡	四之宮字通り西	耕作地集落	砂丘・自然堤防	宝永以前と思われる溝を露出。井戸や溝を主体とした水利空間の一面。	宝永以前	11
岡崎城跡	岡崎字板垣	城館	台地	城郭に関連する遺構の可能性あり。	15c~16c	12
向原遺跡	上吉沢字向原	(耕作地)	台地	中世の遺構なし。表土から北条銭が出土。	不明	13
城山横穴墓群	岡崎字城山5516番	城館 横穴墓	台地斜面	B地点6・7号墓からかわらけ、明白磁皿、明透付銅、茶目茶碗が出土。岡崎城との関係が想定される。	16c前半	14
高林寺遺跡第1地点	四之宮字板垣南	耕作地集落	砂丘	高林寺に係わる溝か。	15c	15
稲荷前入道跡第2地点	四之宮字板垣南	耕作地集落	砂丘	三浦義村の別邸と伝わる。溝から中世遺物が出土。	中世(14c~15cか)	16
田村新跡	田村6232-8	屋敷地	自然堤防	溝・土坑墓群を露出。	13c~14c	17
原口遺跡	上吉沢1617番	墓	台地	土坑墓から銘板が出土。清武通家は近世藩士の墓人に限る。	近世以前	18
山王久保遺跡第8地点	岡崎字山王久保	耕作地集落	台地	中世の堅穴建物と土坑を多数を露出。	中世(14c~15cか)	19
中原E遺跡	中原二丁目556、557番	耕作地集落	砂丘	ビットから北条銭が出土。	中世	20
高林寺遺跡第12地点	四之宮445	耕作地集落	砂丘	四之宮は清田氏の同族四宮氏の本拠地。13c代の道路、区画溝、中世瓦葺の可能性。	13c~14c	21
王子ノ台遺跡	北金目1222外	城館	台地	曲輪状の遺構。土坑墓から銭が出土。真田城・扇谷上杉氏の考察あり。	中世	22
上吉沢中地地区遺跡群 C地区	上吉沢市街1495	城館	台地	布施康貞の館跡と伝える方形基壇。土間の調査で中世遺物が出土。	16c	23

神明久保遺跡	中原下宿字神明久保897-1	耕作地墓	砂丘(砂州)	土坑から瀬戸輪花型入子皿が出土。中世遺物のほとんどは遺構外から出た。	13c後半～14c 16c～17c前半	24
厚木遺跡	中原二丁目589番1,2	耕作地集落	砂丘	中原街道の一部とみられる中世～近世の道路を検出。	宝永以前	25
稲荷前入遺跡第5地点	四之宮三丁目273番2	耕作地集落	砂丘	井戸・土坑(墓)から中世遺物が出た。	中世(15c～16cか)	26
稲荷前入遺跡第5地点	四之宮字稲荷前281番1他	耕作地集落	砂丘	遺構外から瀬戸美濃細鉢、銭が出た。	中世	27
神明久保遺跡第10地点	四之宮一丁目804-1	耕作地集落	砂丘	櫓列を伴う雁立柱建物跡。	中世前半	28
大会原遺跡・六ノ城遺跡	真土字四ノ城204-2A, 真土字六ノ城232-9	屋敷地	砂丘(砂州)	唐で区画された内側に型伏式遺構、井戸。土坑群が見つかっている。青磁、白磁には12cの製品も目立つ。	16c主体	29
大会原遺跡・六ノ城遺跡	四之宮字大会原320-3B, 四之宮字大会原540-13A	集落	砂丘(砂州)	大形の区画跡。	(13c～14cか)	30
大会原遺跡・六ノ城遺跡	四之宮字大会原573-3B, 四之宮字大会原586-5B	集落	砂丘(砂州)	遺構外から中世遺物が少量出た。	13c 15c～16c	31
坪ノ内遺跡・六ノ城遺跡	四之宮字坪ノ内624-1, 四之宮字大会原540-13A	集落	砂丘(砂州)	中世後期の円形跡。 中世前期の水利施設(溝・井戸)。	13c～14c 16c	32
高林寺遺跡第14地点	四之宮三丁目4787-2	耕作地集落	砂丘	遺構外から中世遺物が数点出た。	中世	33
柳久保遺跡・同崎坂A第4地点	同崎字王御住5861	城館	台地	同崎城に關連する造成面を検出。	中世	34
北金目坂遺跡第3地点	北金目1615-1	耕作地集落	台地	道路下の土坑から解体埋藏された牛馬骨が出た。	中世以降	35
天神前遺跡第16地点	四之宮二丁目136, 137	耕作地集落	砂丘	土坑から型伏板が出た。	13c～15c	36
七ノ城遺跡 第7地点	真土一丁目348番3, 4	耕作地	砂丘(堤防跡)	畝が主体となるが、断面で台形の区画跡も検出されている。遺構外で常滑瓦が検出。	宝永以前	37
真田・北金目遺跡群	北金目	集落	台地	中世城郭に關連する遺構群と多くの中世遺物が出た。	中世	38
中原D遺跡 第4地点	中原三丁目1-6	耕作地	砂丘(微高地)	破面に中世に属す遺構はない。道の硬化面上で北米銭が出た。	中・近世	39
七ノ城遺跡 第8地点	東真土一丁目470番2	耕作地墓	砂丘(堤防跡)	破面に中世に属す遺構・遺物はない。遺構外で菅石・石目が出た。	宝永以前	40
大会原遺跡 第6地点	四之宮五丁目576-15	耕作地集落	砂丘	遺構外から中世遺物数点が出た。	中世	41
山王B遺跡 第3地点	西真土一丁目1506番1, 1514番1	耕作地	砂丘(微高地)	破面に中世に属す遺構・遺物はない。畝、区画跡、円形土坑が主。7分土坑から鉄釘が出た。	宝永以前	42
諏訪前入遺跡 第12地点	東真土二丁目	耕作地	砂丘(微高地)	須位・覆土から中世と推定。砂、土坑が主。C21・22から常滑瓦、遺構外から熊手瓦管などが出土。	12c中～16c	43
真田北金目遺跡群 真田城跡第2地点・北金目塚遺跡第11地点1次～5次・竹ノ内遺跡第2地点	真田60番、他 北金目1694番、他	城館集落	台地	真田城の堀、外郭部の礎石地や道を確認。	15c～16c	44

中郡二宮町

道路名	所在地	種別	立地環境	道路の概要	年代	文献
天神谷戸道路	二宮1217番外	(無敷地)	台地先端の谷	遺構のない谷筋で多数の中世遺物が出土。梅瓶・合子を含む磁器品が見られ、鎌倉と似た状況。	12c後半～15c前半	1

足柄上郡中井町

道路名	所在地	種別	立地環境	道路の概要	年代	文献
井ノ口墓ノ前道路	井ノ口墓ノ前2030番	墓	丘陵	中世後期の土坑墓群。遺物多く出土。	15c～16c	1

足柄上郡松田町

道路名	所在地	種別	立地環境	道路の概要	年代	文献
松田城址	松田町子字城山3113	城館	丘陵	相立柱建物、櫓、井戸、地下式坑、渠切。遺物を多く出土。	14c前半～16c	1

足柄上郡山北町

道路名	所在地	種別	立地環境	道路の概要	年代	文献
河村城跡茶臼新田切道路	山北字城山2219他	城館	丘陵	堀、土塁、井戸。つぶて石が出土。	中世	1
河村城跡	山北・岸	城館	丘陵	郭、堀、陶磁器、かわらけ、鉄製品、石製品が出土。	15c中～17c前半	2

南足柄市

道路名	所在地	種別	立地環境	道路の概要	年代	文献
君永遺跡第1次調査	関本字君永239-1	散布地	河岸段丘	土坑。常滑が出土。	中世	1

足柄下郡箱根町

道路名	所在地	種別	立地環境	道路の概要	年代	文献
大芝遺跡	元箱根80-1	社寺	丘陵	基壇、段切り。輸入磁器、陶器、銭、銅仏が出土。	14c～15c	1

川崎市

道路名	所在地	道路の種別	立地環境	道路の概要	年代	文献
常寺尾台瓦窯廃止址	常4633	社寺	丘陵上	瀬戸のみ。	桃山～江戸初	1
小沢城跡	菅	城館	丘陵	遺構跡者のみ。中世後期の城郭か。	2	
有馬中甲墳墓	有馬1227	墓	丘陵端	火葬骨を納めた常滑磁器器、板碑を墓とする。	14世紀	3
神庭遺跡	中原区井田	集落	台地上	地下式坑。年代を特定する遺物はなし。	4	

五方田沼遺跡B地点	多摩区五方田沼大台173	集落	丘陵急傾斜地	板碑のみ。	16c	5
影向寺址	高津区野川	社寺	—	栗師堂を囲む土塁と溝。	中世	6
新作小高台遺跡	高津区新作1687他	集落	台地上	機作業的な空間あるいは厩舎。	13c後半～14c代	7
影向寺	宮南区野川	寺院	—	中世仏堂の根石を出土。	8	8
千年B区域横穴墓群	高津区千年1117	墓	急傾斜地	横穴墓から板碑が出土。遺構の年代とは異なる。	9	9
五方田沼遺跡	多摩区五方田沼小台	集落	台地斜面	遺物のみ。	13c前～16c	10
横之台遺跡	高津区子母口横之台119他	集落	台地斜面	溝による区画を有する建物群で、規模から付属的と推測。	15～16c	11
野川東岸地遺跡	宮南区野川字東岸地842-3	集落	台地上	土坑墓、墓石、溝を出土。	中世	12
東有馬遺跡	宮南区東有馬5丁目335-1	集落	河岸段丘上	土坑2基。覆土から時期を推測。	中世	13
新作二丁目遺跡	高津区新作2丁目1540他	耕作地	台地上	溝とピット群を出土。覆土から時期を推測。	中世	14
東松生小学校内遺跡	麻生区王禅寺入り口121-1	集落	丘陵緩斜面	奈良・平安時代から近世へ続く建物群と土坑墓群。	古代～近世	15
加瀬台遺跡	幸区北加瀬	集落	台地上	墳丘下に中近世の溝。	中世	16
高石経塚遺跡	麻生区高石1-26	経塚	丘陵上	経塚は近世。	中世	17
加瀬台遺跡	幸区北加瀬	集落	台地上	遺物のみ。	18	18
中世城館	—	城館	—	川崎市内の中世城館を調査。	19	19
横之台遺跡	高津区子母口横之台96	集落	台地斜面	段切り平坦面から建物群。その後、墓域へと変化。	15～16c	20
同上～4遺跡	麻生区同上字東田745他	城館	台地上	城郭の堀と推測される大型穴状遺構。	中世	21
幸区No. 7遺跡	幸区南加瀬2-63外	集落	丘陵上	土坑1基。覆土から時期を推測。	中世後期～近世初期	22
野川東岸地遺跡	宮南区野川495-1	集落	台地上	中世～近世の道と溝。幹線道路の可能性も。	中世～近世	23
同上～4遺跡	麻生区同上字東田793他	耕作地	台地上	耕作に関連すると考えられる土坑と溝。	中世～近世	24
王禅寺通やぐら	麻生区王禅寺377	やぐら	崖裾	やぐら1基。	中世	25
相山山内遺跡1地点	麻生区向原2丁目1423番地	集落	丘陵上	溝3基を出土。遺物の出土なし。	中世～近世	26
川崎市三新屋前遺跡	宮南区野川360番2	集落	台地上	規模性の高い溝。	13c	27
川崎市東部生小学校北遺跡 (王禅寺東古墳)	麻生区王禅寺東5丁目141番1他	散布地	丘陵末端	土坑・ピットのみのみ。	中世～近世	28
万福寺遺跡群	麻生区万福寺568番地	集落	丘陵上	地下式坑2基検出。近隣に集落が存在か。	13～15c	29
影向寺遺跡	高津区野川111-16	集落	台地上	ピット群。覆土から判断。	中世	30

【参考文献】

茅ヶ崎市（文献1～4は紀要22に掲載）

5. 茅ヶ崎市教育委員会 1993『第4回茅ヶ崎市道路発表会 発表要旨』
6. 松田光太郎・井辺一徳・田村祐司 1999『白久保道路』かながわ考古学財団調査報告60
7. 茅ヶ崎市教育委員会 2000『円蔵御屋敷A道路』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告13
8. 茅ヶ崎市教育委員会 2001『小和田已待田B道路』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告14
9. 茅ヶ崎市教育委員会 2002『国指定史跡 旧相模川橋脚』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告16
10. 茅ヶ崎市教育委員会 2002『鶴嶺八幡社地』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告15
11. 穴戸信悟・村上吉正・服部実喜・藤井秀男・宗富貴子 2003『上ノ町道路』かながわ考古学財団調査報告143
12. 茅ヶ崎市教育委員会 2004『下寺尾七堂伽藍確認調査概報』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告20
13. 香川・下寺尾道路群発掘調査団 2005『香川・下寺尾道路群（北B地区・下寺尾庭寺地区・藤谷地区）発掘調査報告書』
14. 茅ヶ崎市教育委員会・財団法人茅ヶ崎文化振興財団 2005『円蔵鶴ヶ町道路』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告23
15. 茅ヶ崎市教育委員会 2005『浜之郷本社A道路』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告22
16. 茅ヶ崎市教育委員会・財団法人茅ヶ崎文化振興財団 2006『円蔵御屋敷B道路』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告29
17. 茅ヶ崎市教育委員会・財団法人茅ヶ崎文化振興財団 2006『西久保広町道路』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告28
18. 茅ヶ崎市教育委員会・財団法人茅ヶ崎文化振興財団 2006『浜之郷宮ノ腰道路Ⅲ』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告25
19. 井辺一徳・飯塚美保 2007『小出川河川改修事業関連道路群Ⅰ 茅ヶ崎市西方A道路・寒川町岡田南河内道路』かながわ考古学財団調査報告223
20. 株式会社斉藤建設 2007『下ヶ町道路（No.184）発掘調査報告書』
21. 西相文化財研究所 2007『鶴ヶ町道路第7次調査報告書』
22. 茅ヶ崎市教育委員会・財団法人茅ヶ崎文化振興財団 2007『矢畑金山道路Ⅲ』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告30
23. 小川岳人・飯塚美保・高橋 香・宮坂淳一・小西絵美他 2008『小出川河川改修事業関連道路群Ⅱ・七堂伽藍跡（1）・寒川町大曲五反田道路』かながわ考古学財団調査報告224
24. 茅ヶ崎市教育委員会 2008『史跡 旧相模川橋脚確認調査報告』
25. 茅ヶ崎市文化振興財団 2008『茅ヶ崎市文化振興財団調査報告13』
26. 茅ヶ崎市文化振興財団 2008『茅ヶ崎市文化振興財団調査報告14』
27. 株式会社四門 2008『西久保・大屋敷B道路』
28. 富永樹之・小森明美 2009『上ノ町道路Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告232
29. 渡谷正信・吉田映子 2009『上ノ町道路Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告247
30. 茅ヶ崎市教育委員会・財団法人茅ヶ崎文化振興財団 2009『円蔵小井戸道路Ⅰ』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告32
31. 茅ヶ崎市文化振興財団 2010『鶴嶺八幡宮参道第4次発掘調査報告書』茅ヶ崎市文化振興財団調査報告23
32. (株)アーク・フィールドワーク・システム 2010『西久保・大屋敷A道路第5次調査報告書』
33. 茅ヶ崎市教育委員会・財団法人茅ヶ崎文化振興財団 2010『向原道路』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告34
34. 株式会社斉藤建設 2011『松林網久保A道路第7次発掘調査報告書』
35. 高橋 香・阿部友寿 2014『上ノ町道路Ⅳ』かながわ考古学財団調査報告299
36. 高橋 香・三瓶裕司 2014『上ノ町道路Ⅴ』かながわ考古学財団調査報告303
37. 玉川文化財研究所 2015『前田A道路第3次発掘調査報告書』
38. 鎌倉道路調査会・株式会社斉藤建設 2015『矢畑・明玉ヶ谷道路第5次調査報告書』
39. 玉川文化財研究所 2015『中通C道路第2次調査 発掘調査報告書』
40. 玉川文化財研究所 2016『矢畑金山道路第19次調査発掘調査報告書』
41. 玉川文化財研究所・安西工業株式会社 2016『石神道路第3次調査発掘調査報告書』
42. 玉川文化財研究所 2016『中通C道路第3次調査発掘調査報告書』

寒川町

1. 木村勇・鈴木保彦・國平健三 1993『寒川神社境内発掘調査報告書』寒川神社学術調査団

2. 小林秀満 1999『倉見才戸道跡発掘調査報告書 第3次調査』倉見才戸道跡発掘調査団
3. 中村哲也 2001『倉見才戸道跡第4次調査発掘調査報告書』寒川町教育委員会
4. 香川達郎 2002『梶原景時館跡・塔の塚発掘調査報告書』梶原景時館跡発掘調査団・塔の塚発掘調査団
5. 大坪宜雄・小林克利 2003『小動鶴毛道跡』(仮称) 寒川町№33道跡発掘調査団
6. 井澤純・市川正史・井辺一徳・吉田政行・渡辺外 2004『宮山中里道跡・宮山台畑道跡』かながわ考古学財団調査報告170
7. 米山紀一・大坪宜雄・小林克利 2005『岡田西河内道跡』(有)吾妻考古学研究所
8. 押木弘巳 2005『倉見才戸道跡発掘調査報告書 第7次調査他』寒川町教育委員会
9. 小山裕之 2007『寒川神社道跡発掘調査報告書』(株)玉川文化財研究所
10. 押木弘巳 2008『岡田西河内道跡 第2次調査 発掘調査報告書』寒川町埋蔵文化財調査報告書第4集 寒川町教育委員会
11. 押木弘巳 2010『塔の塚(№52道跡) 第2次調査発掘調査報告書』寒川町埋蔵文化財調査報告書第7集 寒川町教育委員会
12. 押木弘巳 2010『倉見才戸道跡第11次調査発掘調査報告書』寒川町教育委員会
13. 大坪宜雄・小林克利・横山太郎・杉本靖子 2012『岡田西河内道跡』(有)吾妻考古学研究所

平塚市

1. 小島弘義他 1981『四之宮上郷・下郷調査概報』神田・大野道跡発掘調査団
2. 安藤文一他 1982『桜畑道跡』桜畑道跡発掘調査団
3. 小島弘義・大野悟・若林勝司他 1983『中原御殿D道跡』平塚市御殿D道跡発掘調査団
4. 杉山博久 1983『中里E道跡』平塚市中里E道跡発掘調査団
5. 金子皓彦・中村康二郎・鶴持雅章 1983『太原道跡』旧農研跡地道路調査団
6. 小島弘義・大野悟他 1984『四之宮 下郷』神田・大野道跡発掘調査団
7. 金子皓彦・青地俊朗他 1985『豊田本宿B道跡』豊田本宿B道跡発掘調査団
8. 村山昇・明石新 1985『豊田本郷』豊田本郷道跡発掘調査団
9. 小島弘義・青地俊朗 1990『御領宮道跡』平塚市埋蔵文化財シリーズ15 平塚市道跡調査会
10. 小島弘義 1991『御殿C道跡』『諏訪前A・十七ノ城道跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ18 平塚市道跡調査会
11. 小島弘義 1991『通り西道跡第2地区』『諏訪前A・十七ノ城道跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ18 平塚市道跡調査会
12. 小島弘義・青地俊朗 1991『岡崎城跡B』平塚市埋蔵文化財シリーズ18 平塚市道跡調査会
13. 市川正史・長岡文紀・西川修一他 1992『向原道跡Ⅱ』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告25
14. 明石新 1994『岡崎城跡A・城山横穴墓群』平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平塚市教育委員会
15. 明石新 1995『高林寺道跡第11地点』『山王B・大会原道跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ27 平塚市道跡調査会
16. 青地俊朗 1995『稲荷前A道跡第2地点』『山王B・大会原道跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ27 平塚市道跡調査会
17. 林原利明・宮井香 1995『田村館跡』田村館跡発掘調査団
18. 長谷川厚・長岡文紀・加藤久美 1997『原口道跡Ⅰ』かながわ考古学財団調査報告22
19. 青地俊朗 1998『山王久保道跡第8地点』『山王久保道跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ31 平塚市道跡調査会
20. 押木弘巳 1998『中原E道跡』平塚市埋蔵文化財シリーズ32 平塚市中原E道跡発掘調査団
21. 青地俊朗 1999『高林寺道跡第12地点』『高林寺道跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ33 平塚市教育委員会
22. 秋田かな子他 1999『王子ノ道跡Ⅱ』東海大学構内道跡調査団
23. 小山裕之 2000『上吉沢市場地区道跡群発掘調査報告書』上吉沢市場地区道跡群発掘調査団
24. 近野正幸・加藤千恵子 2001『神明久保道跡』かながわ考古学財団調査報告102
25. 大野悟・栗山雄揮 2002『厚木道跡』平塚市埋蔵文化財シリーズ36 平塚市教育委員会
26. 菅沼圭介 2004『稲荷前A道跡第5地点』平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平塚市教育委員会
27. 大野悟・栗山雄揮 2005『稲荷前B道跡第5地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ40 平塚市教育委員会
28. 中村高志 2006『神明久保道跡第10地点』テイケイトレード株式会社
29. 飯塚美保・川嶋実佳子・松田光太郎・依田亮一 2007『湘南新道開通道跡Ⅰ 大会原道跡・六ノ城道跡』かながわ考古学

財団調査報告208

30. 柏木善治・須藤智夫 2007『湘南新道開通道路Ⅲ 大会原道路・六ノ城道路』かながわ考古学財団調査報告210
31. 依田亮一・高橋 香・飯塚美保・松田光太郎・平尾政幸・尾野善裕 2009『湘南新道開通道路Ⅱ 大会原道路・六ノ城道路』かながわ考古学財団調査報告242
32. 柏木善治・依田亮一・須藤智夫・宮井香他 2009『湘南新道開通道路Ⅳ 坪ノ内道路・六ノ城道路』かながわ考古学財団調査報告243
33. 中嶋由紀子 2009『高林寺道路第14地点』『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書13』平塚市教育委員会
34. 千田利明 2011『柳久保道路・岡崎城跡A第4地点』（有）ブラフマン
35. 香川達郎 2011『北金目塚越道路第3地点発掘調査報告書2』（株）玉川文化財研究所
36. 吉岡秀範 2012『天神前道路第16地点』（株）日本臨床史研究所
37. 秋山重美・齋藤武士・富永樹之 2013『七ノ城道路第7地点』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書15（株）玉川文化財研究所
38. 若林勝司他 1999～2013『平塚市真田・北金目道路群発掘調査報告書1～10』平塚市真田・北金目道路調査会
39. 北平朗久・石川真紀・富永樹之・金子浩昌 2014『中原D道路第4地点』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書18（株）玉川文化財研究所
40. 伊丹徹・柳川清彦・吉岡秀範・吉田俊樹・財前知典 2014『七ノ城道路第8地点』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書26（株）アーク・フィールドワークシステム
41. 高杉博章 2014『大会原道路第6地点発掘調査報告書』（株）アーク・フィールドワークシステム
42. 吉田浩明・秋山重美・伊丹徹 2015『山王B道路第13地点』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書28（株）玉川文化財研究所
43. 北平朗久・伊藤貴宏・小森明美・伊丹徹 2015『諏訪前A道路第12地点』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書34（株）玉川文化財研究所
44. 天野賢一 2015『真田北金目道路群 真田城跡第2地点・北金目塚越道路第11地点1次～5次・竹ノ内道路第2地点』かながわ考古学財団調査報告306

中郡二宮町

1. 村上吉正・中田英・西川修一・高松公之・飯塚美保 2000『天神谷戸道路』かながわ考古学財団調査報告75

足柄上郡中井町

1. 杉山博久他 1982『井ノ口墓ノ前道路』井ノ口道路発掘調査団

足柄上郡松田町

1. 安藤文一 1989『松田城址』松田城址発掘調査団

足柄上郡山北町

1. 安藤文一 1996『河村城跡茶臼郭周辺道路』河村城跡茶臼郭周辺道路発掘調査団
2. 安藤文一・後藤喜八郎・砂田佳弘他 2007～2009『河村城跡』神奈川県山北町文化財調査報告1～3 山北町教育委員会

南足柄市

1. 香川達郎 2013『君永道路第1次調査発掘調査報告書』（株）玉川文化財研究所

足柄下郡箱根町

1. 伊藤潤・谷口肇・東野豊秋 2000『大芝道路』箱根町教育委員会

川崎市

1. 内藤政恒 1954『川崎市菅寺尾台瓦塚堂址調査報告』川崎市文化財調査報告第一冊 川崎市教育委員会
2. 赤星直忠 1966『川崎市小沢城跡』川崎市文化財調査集録 2 川崎市教育委員会
3. 持田泰吉 1968『川崎市有馬見の中世墳墓』高津区郷土史料集 第5篇 川崎市立高津図書館
4. 関俊彦・大三輪龍彦他 1974『神道遺跡第2次調査概要』
5. 松浦有一郎 1977『五力田西遺跡』多摩・多摩線沿線地区埋蔵文化財発掘調査委員会
6. 伊東秀吉他 1981『影向寺文化財総合調査報告書』川崎市教育委員会
7. 増子章二他 1982『新作小高台遺跡発掘調査報告書』川崎市教育委員会
8. 竹石健二・鈴木亘・村田文夫他 1987『影向寺薬師堂保存修理工事に伴う基礎部記録調査概要』影向寺
9. 藏沢亮・林原利明・小池聡 1988『千年B区域横穴墓群』昭和62年度川崎市千年B区域急傾斜地崩壊対策防止工事にかかる横穴墓発掘調査団
10. 関根孝夫・秋田かな子・福田礼子 1989『五力田遺跡』五力田地区埋蔵文化財発掘調査団
11. 呉地英夫他 1990『槇之台遺跡発掘調査報告書』槇之台遺跡発掘調査団
12. 北爪一行他 1994『野川東耕地遺跡発掘調査報告書』野川東耕地遺跡発掘調査団
13. 迫和幸他 1995『東有馬遺跡発掘調査報告書』東有馬遺跡発掘調査団
14. 相川薫他 1995『新作二丁目遺跡発掘調査報告書』新作二丁目遺跡発掘調査団
15. 竹石健二・澤田大多郎 1995『川崎市東柿生小学校遺跡発掘調査報告書』東柿生小学校遺跡発掘調査団・川崎市教育委員会
16. 浜田晋他 1996『加瀬台古墳群の研究Ⅰ』川崎市民ミュージアム考古学叢書 2 財団法人川崎市民ミュージアム
17. 後藤喜八郎 1996『高石経塚遺跡発掘調査報告書』高石経塚遺跡発掘調査団
18. 浜田晋他 1997『加瀬台古墳群の研究Ⅱ』川崎市民ミュージアム考古学叢書 3 財団法人川崎市民ミュージアム
19. 斎藤彦司 1998『川崎市中世城館現況調査』川崎市文化財調査集録 34 川崎市教育委員会
20. 子母口槇之台遺跡発掘調査団 1998『川崎市子母口槇之台遺跡埋蔵文化財発掘調査概要』
21. 呉地英夫 1998『同上-4遺跡発掘調査報告書』同上-4遺跡発掘調査団
22. 相原俊夫・小山裕之・館弘子 1998『幸区No. 7 遺跡発掘調査報告書』幸区No. 7 遺跡発掘調査団
23. 榎井三子・長谷川静・杉本靖子 2000『野川東耕地遺跡第2地点』野川東耕地遺跡第2地点発掘調査団
24. 呉地英夫他 2001『同上-4遺跡第2地点発掘調査報告書』同上-4遺跡第2地点発掘調査団
25. 柳川清彦・後藤喜八郎 2001『王禅寺 通やぐら遺跡』かながわ考古学財団調査報告125
26. 麻生順司・迫和幸 2003『細山向原遺跡Ⅰ地点』細山向原遺跡発掘調査団
27. 大坪宣雄・渡辺昭一 2005『川崎市宮南区三荷座南遺跡第4地点発掘調査報告』川崎市文化財調査集録 41 川崎市教育委員会
28. 大坪宣雄・渡辺昭一 2005『川崎市麻生区東柿生小学校北遺跡(王禅寺東古墳)第2・3次発掘調査報告』川崎市文化財調査集録 41 川崎市教育委員会
29. 原田昌幸・北原實徳・今泉克己 2005『万福寺遺跡群』有明文化財研究所・万福寺発掘調査団
30. 河合英夫・伊東基吉 2007『川崎市高津区影向寺遺跡第11次発掘調査報告書』川崎市文化財調査集録 43 川崎市教育委員会

近世道状遺構の集成（3）

近世研究プロジェクトチーム

はじめに

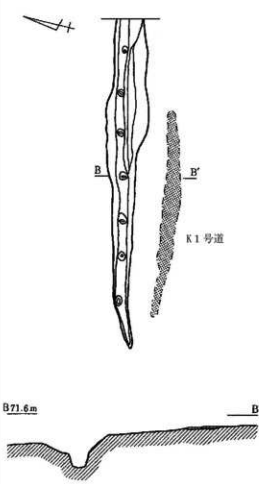
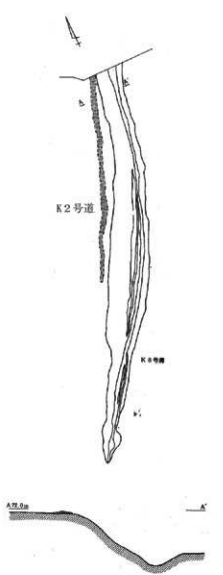
本プロジェクトチームでは、一昨年度より近世道状遺構の集成を行っている。

県内の遺跡で発見され、報告されている近世の道状遺構のデータを集成し、規模や構築方法等について検討していく予定である。今回は平塚市に所在する原口遺跡を取り上げる。

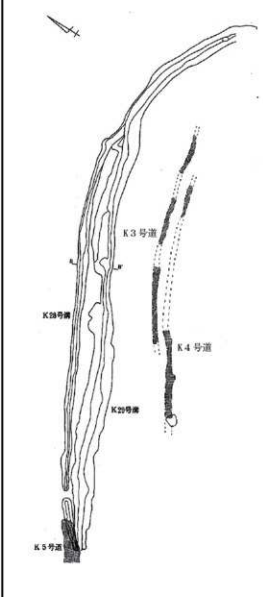
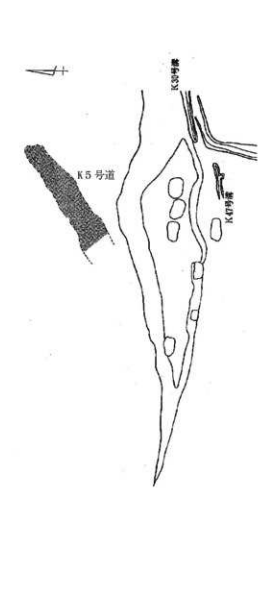
凡 例

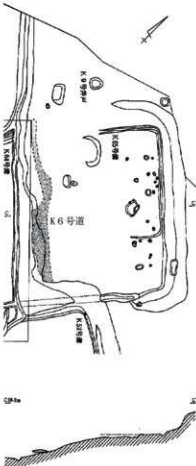
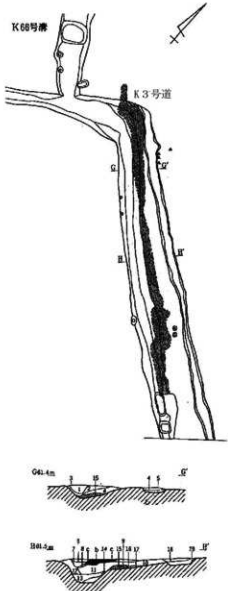
- ・遺構名は報告書の記載に基づく。
- ・縮尺は平面図がスペースに収まるような大きさに適宜変えているため、図ごとに示した。
- ・断面図は報告書に複数記載されている例もあるが、一部を記載することにした。

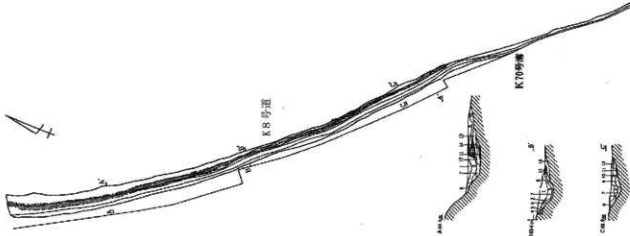
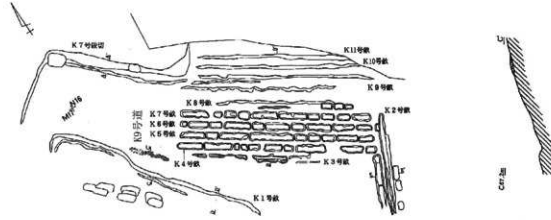
資料№	遺跡名	遺構名	文献名
39	原口遺跡（A区）	K1号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
40	原口遺跡（A区）	K2号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
41	原口遺跡（A区）	K3号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
41	原口遺跡（A区）	K4号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
42	原口遺跡（A区）	K5号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
43	原口遺跡（A区）	K6号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
44	原口遺跡（B区）	K7号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
45	原口遺跡（A区）	K8号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
46	原口遺跡（C区）	K9号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
47	原口遺跡（C区）	K10号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
48	原口遺跡（C区）	K12号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
49	原口遺跡（C区）	K14号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
50	原口遺跡（A区）	K15号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
51	原口遺跡（D区）	K17号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
52	原口遺跡（D区）	K18号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
53	原口遺跡（D区）	K20号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
54	原口遺跡（D区）	K21号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
55	原口遺跡（E区）	K22号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
56	原口遺跡（E区）	K26～32号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
57	原口遺跡（E区）	K33号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
58	原口遺跡（E区）	K35号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22
59	原口遺跡（F区）	K41号道状遺構	1997年『原口遺跡1』かながわ考古学財団調査報告22

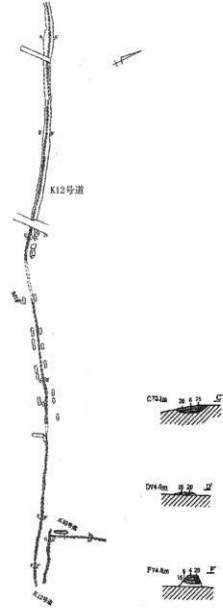
資料No.	39	遺跡名	原口遺跡 (A区)	資料No.	40	遺跡名	原口遺跡 (A区)
所在地	平塚市上吉沢			所在地	平塚市上吉沢		
遺構名	K 1 号道状遺構			遺構名	K 2 号道状遺構		
道 幅	0.3 ～ 0.8m			道 幅	0.5 ～ 0.6m		
年 代	18 c 後半			年 代	近世後半期		
備 考	検出長8m前後、硬化層は厚さ3cm前後で硬く踏み締められている、0.7～1.2m北側にある K 1 号溝状遺構と一体となって機能			備 考	検出長20m、硬化層は厚さ15cm前後、K 8 号溝状遺構と一体となって機能		
							
縮 尺	平面図 1/150 断面図 1/60			縮 尺	平面図 1/300 断面図 1/100		

近世道状遺構の集成 (3)

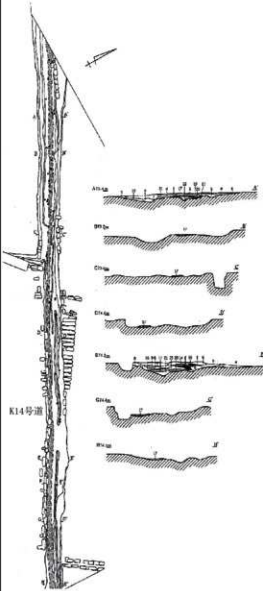
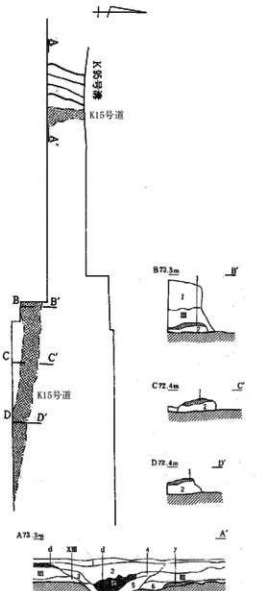
資料No.	41	遺跡名	原口遺跡 (A区)	資料No.	42	遺跡名	原口遺跡 (A区)
所在地	平塚市上吉沢			所在地	平塚市上吉沢		
遺構名	K 3・4 号道状遺構			遺構名	K 5 号道状遺構		
道 幅	0.5 ～ 0.8m / 0.5 ～ 1.0m			道 幅	1.5 ～ 2.0m		
年 代	不明/近世後半期			年 代	19世紀以降		
備 考	検出長24～25m、硬化層の厚さは5cm前後、K29号溝状遺構と有機的な関連をもって機能			備 考	検出長8.5m、硬化層の厚さは5cm前後、K29号溝状遺構より新しい		
							
縮 尺	平面図 1/400			縮 尺	平面図 1/250		

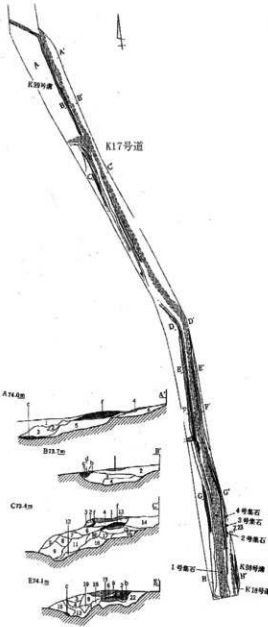
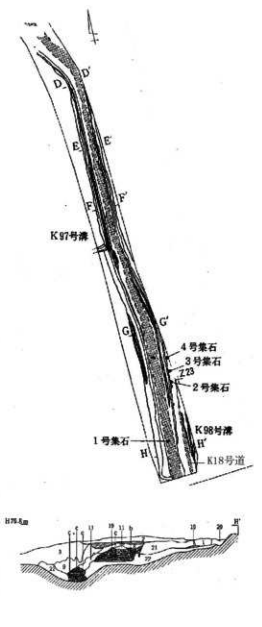
資料No.	43	遺跡名	原口遺跡 (A区)	資料No.	44	遺跡名	原口遺跡 (B区)
所在地	平塚市上吉沢			所在地	平塚市上吉沢		
遺構名	K 6 号道状遺構			遺構名	K 7 号道状遺構		
道 幅	0.6 ～ 1.8m			道 幅	最大2m		
年 代	不明			年 代	不明		
備 考	検出長8m、硬化層の厚さは10cm前後で踏み締めで構築されている			備 考	検出長約25m、硬化層の厚さは10cm前後で踏み締めにより構築されている		
							
縮 尺	平面図・断面図1/400			縮 尺	平面図 1/300 断面図 1/250		

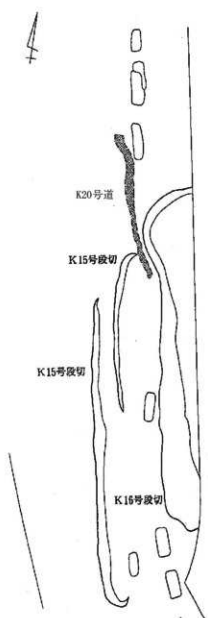
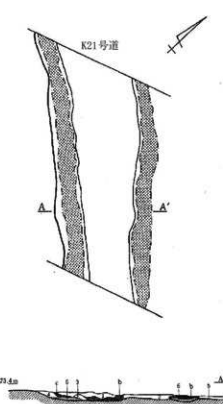
資料No.	遺跡名	原口遺跡 (A区)	資料No.	遺跡名	原口遺跡 (C区)
45	平塚市上吉沢		46	平塚市上吉沢	
所在地	平塚市上吉沢		所在地	平塚市上吉沢	
遺構名	K 8号道状遺構		遺構名	K 9号道状遺構	
道 幅	0.5 ～ 0.7m		道 幅	0.3 ～ 0.4m	
年 代	近世後期以降		年 代	不明	
備 考	検出長73m、硬化層の厚さは5～20cm 前後で踏み固められて構築されている		備 考	検出長4.5m、硬化層の厚さは5～8cm、 段切り範囲内の遺構	
					
縮 尺	平面図1/600 断面図 1/150		縮 尺	平面図 1/400 断面図 1/120	

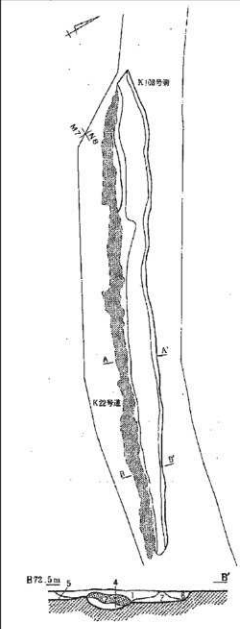
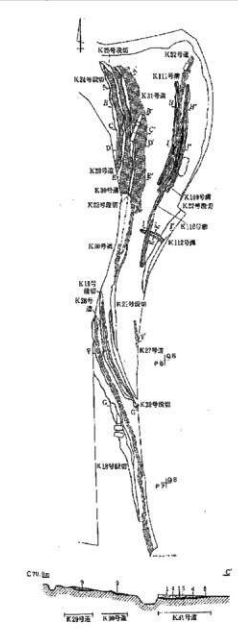
資料No.	47	遺跡名	原口遺跡 (C区)	資料No.	48	遺跡名	原口遺跡 (C区)
所在地	平塚市上吉沢			所在地	平塚市上吉沢		
遺構名	K10号道状遺構			遺構名	K12号道状遺構		
道 幅	0.6～1.7m			道 幅	0.6～1.6m		
年 代	宝永火山灰降下後			年 代	宝永火山灰降下後		
備 考	硬化層の厚さは6～10cm、K70号溝状遺構の覆土中に構築されている、陶磁器・煙管出土			備 考	検出長195m、硬化層の厚さは6～10cm、K74号溝状遺構の覆土中に構築されている、硬化面を覆う土層中から18世紀以降の陶磁器・煙管・棒状鉄製品出土		
							
縮 尺	平面図 1/600			縮 尺	平面図 1/1000 断面図 1/120		

近世道状遺構の集成 (3)

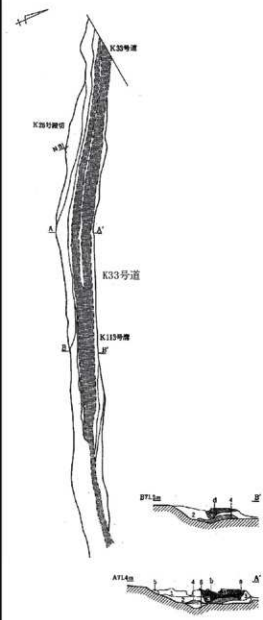
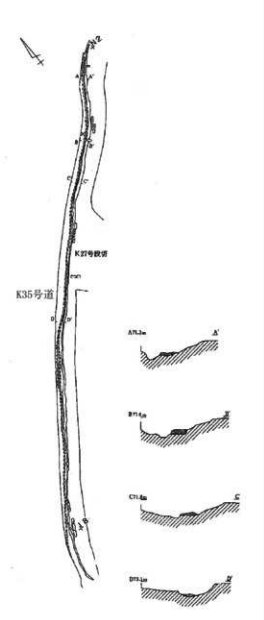
資料No.	49	遺跡名	原口遺跡 (C区)	資料No.	50	遺跡名	原口遺跡 (A区)
所在地	平塚市上吉沢			所在地	平塚市上吉沢		
遺構名	K14号道状遺構			遺構名	K15号道状遺構		
道幅	0.5～1.0m			道幅	0.6～0.8m		
年代	17c 末～18c			年代	不明		
備考	検出長135m、硬化層の下部に小礫が集中する箇所あり、硬化層の両側には溝が併設される。17世紀後半以降の陶磁器・金属製品・紙石等出土			備考	検出長約9.5m、硬化層の厚さは2～6cmで踏み締めて構築されている		
							
縮尺	平面図 1/600 断面図 1/180			縮尺	平面図 1/150 断面図 1/75		

資料No.	51	遺跡名	原口遺跡 (D区)	資料No.	52	遺跡名	原口遺跡 (D区)
所在地	平塚市上吉沢			所在地	平塚市上吉沢		
遺構名	K17号道状遺構			遺構名	K18号道状遺構		
道幅	0.5～1.4m			道幅	0.45m		
年代	宝永火山灰降下以前			年代	不明		
備考	検出長約180m、硬化層の厚さは2～6cm前後で硬く突き固められて構築されている、原口遺跡での重要な幹線道路か			備考	検出長約180m、硬化層の厚さは10cm前後で踏み締めによって形成されている。K17号道状遺構から分岐する小規模な道状遺構		
							
縮尺	平面図 1/600 断面図 1/120			縮尺	平面図 1/600 断面図 1/120		

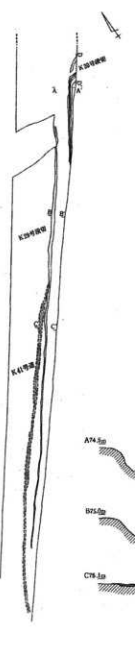
資料No.	53	遺跡名	原口遺跡 (D区)	資料No.	54	遺跡名	原口遺跡 (D区)
所在地	平塚市上吉沢			所在地	平塚市上吉沢		
遺構名	K20号道状遺構			遺構名	K21号道状遺構		
道 幅	0.25～0.5m			道 幅	0.5～0.8m		
年 代	不明			年 代	不明		
備 考	検出長約8m、硬化層の厚さは5cm前後で踏み縮めによって構築されている			備 考	硬化面が2本平行して確認されている。検出長約9m、硬化層の厚さは10cm前後で地面を掘り込んだ後踏み縮めて構築されている。17c末～18c前葉の陶磁器出土		
							
縮 尺	平面図 1/250			縮 尺	平面図 1/150 断面図 1/90		

資料No.	55	遺跡名	原口遺跡 (E区)	資料No.	56	遺跡名	原口遺跡 (E区)
所在地	平塚市上吉沢			所在地	平塚市上吉沢		
遺構名	K22号道状遺構			遺構名	K26～32号道状遺構		
道 幅	0.3～0.8m			道 幅	0.45m前後/0.3～0.4m/0.1m (大半が消滅)/0.2～0.5m/0.4～1m/1.5～2m/0.4～1m		
年 代	宝永火山灰降下以前			年 代	近世後半期		
備 考	硬化層の厚さは5～20cmで踏み締めによって構築されている、K108号溝状遺構に重なる状態で検出され同一時期に機能していたと理解される			備 考	検出長・硬化層厚・構築方法：約40m・10cm前後・踏み締め/約4.5m・5～10cm・踏み締め/約5.5m・――/約17m・5～15cm・踏み締め/約20m・7～10cm・踏み締め/約30m・10cm前後・踏み締め/約22m・10～15cm・踏み締め		
							
縮 尺	平面図 1/2000 断面図 1/60			縮 尺	平面図 1/600 断面図 1/150		

近世道状遺構の集成 (3)

資料No.	57	遺跡名	原口遺跡 (E区)	資料No.	58	遺跡名	原口遺跡 (E区)
所在地	平塚市上吉沢			所在地	平塚市上吉沢		
遺構名	K33号道状遺構			遺構名	K35号道状遺構		
道 幅	2m前後			道 幅	0.3～0.8m		
年 代	不明			年 代	宝永火山灰降灰以降		
備 考	検出長約40m硬化層の厚さは10cm前後で踏み縮めによって形成されている、宝永火山灰降下以前の道状遺構が宝永火山灰降下以後に増設ないしは再構築されたと考えられる			備 考	検出長約180m、硬化層は砂利・ローム・ブロックなどを用いて硬く突き固められている、覆土中より18c中葉～19c初頭の陶磁器・煙管・鉄製品が出土		
							
縮 尺	平面図 1/300 断面図 1/150			縮 尺	平面図 1/1200 断面図 1/90		

資料No.	59	遺跡名	原口遺跡 (F区)
所在地	平塚市上吉沢		
遺構名	K41号道状遺構		
道幅	0.5～1.4m		
年代	宝永火山灰降下以前		
備考	検出長約56m、硬化層は砂利・ロームブロック・粘土等を含んだ土を15～20cm程度盛って版築状に突き固めている。路面の両側に溝状遺構がある		





縮尺	平面 1/1000 断面図 1/100
----	---------------------

相模・武蔵における山林寺院の様相について

－瓦塔と瓦を中心に－

高橋 香

はじめに

近年、県内の瓦塔出土事例の増加している。瓦塔出土の遺跡から出土する瓦が「御殿山瓦窯」を産地とする傾向にあり、瓦と瓦塔の生産体制に何か関係性がみいだせるのではないかという推測が筆者自身の中でたてられた。

前回の論考の中で、御殿山瓦窯の生産体制について、瓦生産は各田内単位で需要・供給の生産体制が完結する事例が比較的多い中、相模国は生産窯が少ないことから隣国・武蔵国の生産システムを利用しながら瓦を国内に流通させていたことを指摘した（高橋2014）。相模国内は窯が築造できない土地柄というわけではなく、古くは宗元寺や相模国分寺に供給していた三浦半島を中心とした御浦郡の乗越瓦窯や公郷瓦窯が、千代廃寺に供給していた足下郡内のからさわ瓦窯が操業していたことを考慮すると、窯が存在しない理由は別にあるのだろう。

御殿山瓦窯の瓦については、県内でもいくつか出土事例があるが、厚木市所在の山林寺院に想定されている鐘ヶ嶽（以下、鐘ヶ嶽廃寺と記す）（註1）から軒丸瓦が2点採集され、そのうち1点は千代廃寺、御殿山瓦窯と同范瓦であった（加藤・富永2000）。残る1点は素弁の文様構成で、胎土から見て御殿山瓦窯産の軒丸瓦であると想定されたが、武蔵国分寺・尼寺の再建期で使用された瓦と同范であることを確認した（高橋2017）。この他にも、鐘ヶ嶽廃寺のような山林寺院とされる日向薬師（宝城坊）からも御殿山系の素弁の軒丸瓦が発見されており（註2）、丹沢山系の同じ尾根筋沿いに御殿山瓦窯産の瓦が供給される寺院が展開していた様相がみられるようだ。

「御殿山瓦窯」という言葉をキーワードに、瓦塔の分布と御殿山瓦窯を産地とする瓦との関係性、そして、御殿山瓦窯を産地とする瓦の分布が山林寺院を中心にみられる原因について、追求したい。

なお、対象エリアは神奈川県とし、古代律令期の国名で示すならば相模国と武蔵国（南武蔵地域）となる。

1. 瓦塔の先行研究について

2000年に「考古学から古代を考える会」や「神奈川県考古学会」において仏教系の遺物を集成してから17年が経ち（考古学から古代を考える会2000・大坪2000）、神奈川県内の瓦塔の出土事例が当時12ヶ所であったが19ヶ所に増加した（第1図）。

瓦塔の年代観については、先行研究として関東地方出土の瓦塔の編年の位置づけについて整理した池田氏の分類が代表的である。内容は、瓦塔の大別として丸瓦部のみを表現するAタイプと、丸瓦と平瓦の両者を表現するBタイプがあるとした石田氏の分類があり（第2図 石田1997）、それを受けて池田氏が屋蓋部の瓦表現と垂木表現によって10型式に分類し、それぞれに年代観があてられた（第3図 池田1999ほか）。

Aタイプ瓦塔の最古の事例は多武峰類型瓦塔で8世紀初頭～前葉、ついで萩・原類型、大仏類型（8世紀後葉～9世紀初頭）があり、東山類型瓦塔（8世紀末葉～9世紀前葉）、宮ノ前類型瓦塔（9世紀前葉）、上西



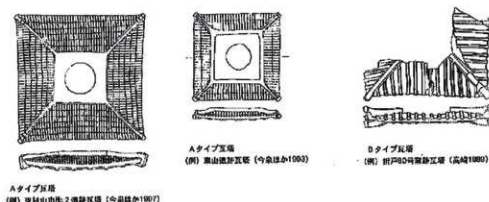
相模国	①	下足郡	千代庵寺
	②	三ツ保	三ツ保遺跡
	③	余綾郡	寺山中道遺跡
	④		坪ノ内・宮ノ前遺跡
	⑤	大住郡	北金目塚遺跡
	⑥		神明久保遺跡
	⑦	愛甲郡	愛名宮地遺跡
	⑧		矢掛・久保遺跡
	⑨		河原口坊中遺跡
	⑩	高座郡	海老名本郷遺跡
	⑪		宮山中里遺跡
	⑫		下寺尾瓦塔 (七堂伽藍跡)
	⑬		池ノ辺遺跡
	⑭	鎌倉郡	天神山下城遺跡
	⑮	御浦郡	宗元寺
武蔵国	⑯		板根不動原遺跡
	⑰	都築郡	黒川宮跡遺跡
	⑱		岡上寺
	⑲	影向寺 (影向寺遺跡)	
	⑳	横樹郡	子母口樋之台遺跡

第1図 神奈川県内瓦塔出土位置図と官衙、古代寺院、生産遺跡位置図

原型瓦・柳型瓦 (9世紀中葉)、東郡台型瓦 (9世紀中葉～後葉) と続いている (第3図)。Bタイプの瓦塔は勝呂型瓦が8世紀前葉～中葉、姥田型瓦が8世紀後葉～9世紀初頭、という年代観があらわれている。

池田氏の屋蓋を中心とした瓦塔の編年の以前に、軸部の組み物 (斗拱) の変化によって瓦塔の編年が構築されるとする高崎氏の見解がある (高崎1989)。同様に永井氏も、軸部の組み物を主として粘土板と粘土帯で表現される技法によって編年が組めるとし、形態や製作技法上の特徴を抽出して猿投型瓦塔を設定した (永井2005)。そして、8世紀前半の段階において、猿投型瓦塔の祖型となる瓦塔が尾張・三河等に分布することから、その模倣ないしは製作技術が東海道を通じて関東へと伝わったという見方を提示している。

屋蓋部製作技法のみならず、軸部製作技法や斗拱表現技法も含めた分析を行ったのは坂田氏である (坂田2009)。坂田氏は、関東地方と他地域出土資料の比較検討を行い、「製作技法」「表現手法」が変化する段階において、適宜瓦塔制作者によって情報や技術の取捨選択がなされていることを明らかにした。そのほか、瓦塔の生産と供給の問題についても言及し、群馬県の事例をモデルケースとして、瓦塔の造立者層は郡領層を中心と



第2図 瓦塔屋蓋部の分類

しながらも、時には郷長層にまで及んでいた可能性を指摘した。

瓦塔が出土する遺跡の評価に関しては、いくつかの見解がある。まず池田氏は①寺院、②聖地（丘陵頂部）、③集落遺跡（村落内寺院）の大きくわけて3パターンの瓦塔出土遺跡に分類されるとしている（池田2004）。②の聖地としている瓦塔については、集落域とは隔絶された場所から単独で出土している様相から、山岳信仰との関わり、神仏習合との関連が強いとし、瓦塔そのものが信仰対象物であったとしている。

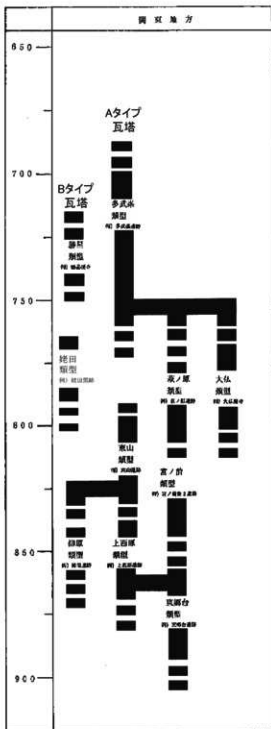
集落遺跡から出土する瓦塔については、8世紀代の瓦塔が出土する集落は、9世紀代の開発集落の先駆けと

して山野河海の開発・領有との関わりがあったとし、9世紀代の瓦塔が出土する集落は、台地中央、山地・丘陵域、低地、扇状地端の微高地に形成された遺跡、つまり開発が及ばなかった地域にも遺跡が形成されていったとしている。山野開拓を積極的に行った富層たちが宗教的なモニュメントを造立、山野領有を仏教的世界観によって正統化したのが瓦塔であるのでは、と指摘した。また、8世紀代の瓦塔は木造塔模倣タイプであったものが、9世紀代になると仏塔形象タイプへモデルチェンジしたとし、瓦塔造立者の意図について言及している。

次に笹生氏は、瓦塔は寺院のみではなく、丘陵内や集落遺跡から出土しており、その様相は安置された環境・状況により造立意図が異なり、信仰内容を一律に考えることは難しい、としながらも瓦塔が安置されていた特徴的な景観を復元し、教典に説かれた内容との比較検討を行った。

瓦塔が立地する景観は、①集落縁辺の出入り口、②丘陵頂部、③墓域の3パターンがあり、これらの瓦塔は、郡司層以外の新興勢力を含めた地域の有力者が、宗教的な権威を得る手段の一つとして、滅罪の為の瓦塔の造立・安置が位置づけられた、という見方を提示している（笹生2012）。

尾張国と三河国出土の瓦塔について検討した永井氏は、瓦塔造立遺跡には、寺院遺跡、集落遺跡の2パターンがあるとし、寺院出土の瓦塔は伽藍中軸に造立、集落遺跡については、集落開発に伴う古墓への弔いが目的であろうとしている（永井2013）。特に尾張国では、瓦塔は古墳時代の墳墓群や弥生時代の周溝墓群が立地したいわゆる墓域から、8世紀後半以降も集落へと変容する地域において出土する傾向がある。すなわち、在地豪族の墓域が、在地と系譜関係がない国司の生活域へ改めて造られる中、「鎮魂



第3図 瓦塔分布

の瓦塔」として造立されている可能性を指摘している。一方、三河地域では、墓域を横してまでの瓦塔造立集落はなく、同じ東海地域であっても異なる様相がみられるとしている。東海地域の瓦塔造立集落遺跡は、瓦葺き建物に伴う、という事例があり、興味深い。

三者の瓦塔造立遺跡についてまとめると、大きくは①寺院・官衙、②集落遺跡、③丘陵頂部などの聖地の3つに分類されるだろう。いわゆる村落内寺院に分類される遺跡からの出土事例は、主要堂塔などが立ち並ぶ寺院とは別であり、集落遺跡に含まれる。上野国の三原田諏訪上遺跡や三河国の真福寺遺跡の事例のように、集落遺跡内に瓦葺き建物があり、その中に瓦塔の造立が想定される遺跡は、県内事例では少ない。古代寺院以外の集落遺跡から一定量の瓦の出土が認められる事例は尾張同様相模でも確認されるが、一堂程度の小規模寺院が乱立していたとされる尾張国とはまた異なる（梶原2012）。

また、瓦塔造立遺跡として「山林寺院」という位置づけがこれまでの研究では少ないが、尾根（丘陵先端）上から出土している瓦塔は山林寺院出土事例として扱えるのではないだろうか。山林寺院としている遺跡から瓦塔が出土した事例は福井市の明寺山廃寺がある（古川2012）。明寺山廃寺は丘陵頂部の標高55～63mに位置する遺跡で、本堂、脇堂等が確認されている。瓦塔は脇堂から出土し、その脇堂が瓦塔を安置した塔院の可能性があるとされている。また、三河・遠江の大知波神庵寺に近接する宇志瓦塔遺跡も瓦塔が出土したことで知られ、周辺の踏査から山林寺院が想定されている（後藤2007）。

武蔵の甘粕山遺跡群東山遺跡は、標高95mの丘陵頂部にあり、堅穴住居群から離れた地点で瓦塔と瓦堂が発見されている。丘陵頂部という場所を意識していると佐生氏は述べており、丘陵頂部は「神聖な場」として認識される。山林寺院は聖地とする丘陵頂部等に立地していることを考慮すると、立地などからみて同様な範疇なものといえることができるだろう。よって、瓦塔造立遺跡は①寺院・官衙、②集落遺跡、③山林寺院を含む丘陵頂部等の聖地の3パターンに分類可能かと思われる。

2. 瓦塔の県内出土事例について

今回出土事例としてあげられる19遺跡の事例について、全国的にみると3パターンあるが県内事例を概観すると①寺院・官衙、②集落遺跡の2つに分類される。それぞれ詳細をみていくことにする。

〈古代寺院・官衙の事例〉

古代寺院からの出土事例は、宗元寺、千代廃寺、下寺尾廃寺（以上相模国内）、影向寺、岡上座堂（以上武蔵国内）と、いわゆる初期寺院から出土している。それには、須恵質、土師質のものがああり、瓦塔の製造年代、及び使用された時期にもばらつきがある。以下、詳細にみていく。

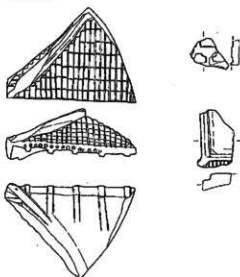
宗元寺は、御浦郡内に所在する相模最古の古代寺院である。伽藍配置の詳細はまだ確認されていない。周辺で採集された瓦の中に大和・西安寺と同范瓦がみられることから、創建時期を7世紀後半として考えられているが、創建の時期についての詳細は不明である。出土している瓦塔片は2点あり、1点は平瓦部と丸瓦部を組み合わせたBタイプ瓦塔で小片ではあるが、須恵質の良好な資料である。池田分類の勝呂類型と考えられる。もう1点は土師質で、屋蓋部を表現したものである。池田分類の上西原類型に相当する。

千代廃寺は足下郡に所在する古代寺院で、近年の調査事例から7世紀末～8世紀第1四半期を造営期とし、瓦の時期からみて垂暦年間から天平初年（715～729年）の寺院として比定されている（大島他2000、河野1993）。主要堂塔はまだ知られていないが、掘り込み事業が確認され、金堂とみられている。出土している瓦塔は、屋蓋部や基壇、斗栱部が残存しており、特に屋根蓋部の降り棟部分と軒先が良好に残存している。須恵質のもので、軒先は竹管で垂木か軒丸瓦を表現したような押印が見られる精巧なつくりである。池田分類の萩ノ原類型の表現と同様であると考えられる。

<宗元寺>



<千代庵寺>



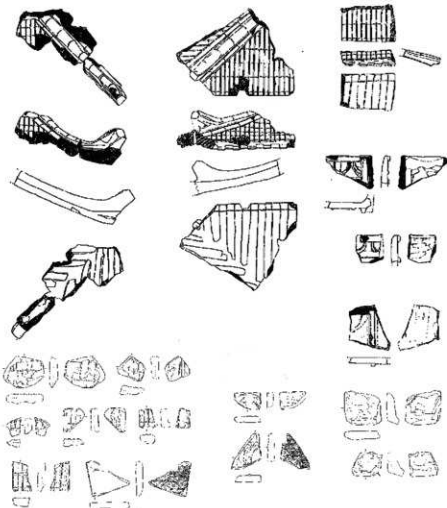
<下寺尾庵寺>



<影向寺>



<神明久保遺跡>



第4図 県内寺院・官衙出土の瓦塔 (S=1/6)

<坪ノ内・宮ノ前遺跡>



<矢掛・久保遺跡>



<河原口坊中遺跡>



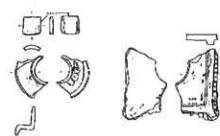
<黒川宮添遺跡>



<藪根不動原遺跡>



<愛名宮地遺跡>



第5図 県内集落遺跡出土の瓦塔 (S=1/6)

第1表 県内出土瓦塔類型・時期一覧

番号	郡	遺跡名	瓦塔の類型	年代
①	足下郡	千代庵寺	萩ノ原類型	8世紀前～中葉
②		三ツ俣遺跡	宮ノ前類型・類型不明	8世紀末～9世紀前葉
③	余祿郡	寺山中丸遺跡	類型不明（基壇部分残存）	9世紀代か
④	大住郡	坪ノ内・宮ノ前遺跡	東郷台類型	9世紀中葉～後葉
⑤		北金目塚越遺跡	東郷台類型	9世紀中葉～後葉
⑥		神明久保遺跡	大仏類型	8世紀後葉～9世紀初頭
⑦	愛甲郡	愛名宮地遺跡	宮ノ前類型～東郷台類型	8世紀末～9世紀前葉
⑧	高座郡	矢掛・久保遺跡	上西原類型	9世紀前葉～中葉
⑨		河原口坊中遺跡	東山類型～上西原類型	8世紀末～9世紀中葉
⑩		海老名本郷遺跡	宮ノ前類型	8世紀末～9世紀前葉
⑪		宮山中里遺跡	類型不明（露盤部分残存）	8世紀代か
⑫		下寺尾庵寺（七堂伽藍跡）	類型不明（斗拱部分残存）	8世紀末～9世紀前半か
⑬		池ノ辺遺跡	東郷台類型	9世紀中葉～後葉
⑭	鎌倉郡	天神山下城遺跡	上西原類型	9世紀前葉～中葉
⑮	御浦郡	宗元寺	勝呂型・上西原類型	8世紀前葉～中葉・9世紀前葉～中葉
⑯	都築郡	蔵根不動原遺跡	東郷台類型	9世紀中葉～後葉
⑰		黒川宮跡遺跡	上西原類型	9世紀前葉～中葉
⑱		岡上庵寺	類型不明（假文のみ）	—
⑲	橘樹郡	影向寺（影向寺遺跡）	上西原類型	9世紀前葉～中葉
⑳		子母口植之台遺跡	東山類型～上西原類型	8世紀末～9世紀中葉

※瓦塔の分類は池田1999の分類による。

下寺尾庵寺は、高座郡に所在する古代寺院で、台地上に高座郡衙がある。下寺尾庵寺では現在までに金堂、講堂、区画施設等が確認され、発掘調査や瓦の時期からみて、7世紀末～8世紀初頭を創建とする寺院として位置づけられている。瓦塔は、斗拱部2点と屋蓋部の丸瓦1点が出土した。土師質の焼成で、砂粒を多く含む胎土である。

屋根は粘土を折り曲げ、斗拱の表現は粘土紐を貼り付けて表している。これは池田分類の東山類型の組物の表現に類似する。瓦塔は伽藍城の区画を壊す竪穴住居跡から出土している。

影向寺は、武蔵国でも南にあたる地域の中核寺院として位置づけされる古代寺院で、既存の調査において金堂・塔・講堂等が確認されている。創建は、発掘調査や瓦の様相からみて7世紀後半を創建と考えられている。出土した瓦塔は、屋蓋部の一部で、丸瓦と軒先が残存する。土師質で焼成はやや軟質である。

堂塔がみられない寺院址から瓦塔が出土している場合、堂塔の代用品として扱ったといわれているが、相模国内の寺院の場合、主要堂塔が明確に確認されていない事例が多く、判断が難しい。豊田市舞木庵寺では、瓦塔が出土しているものの、陶製相輪部や塔心礎があるため、8世紀代には木造塔が造立していた可能性が高く、瓦塔が木製造塔の代用品というあり方は限定できないと指摘されている（永井2013）。下寺尾庵寺からも陶製相輪が出土しているため、木製塔ないしは相輪塔のような塔が想定されるが、出土した瓦塔が堂塔の代用品であったかという判断は難しい。それぞれの古代寺院からは御殿山瓦窯産の瓦が出土しているものの、瓦塔と共存する事例ではない。

次に官衙に該当する遺跡の事例をみてみよう。神明久保遺跡はいわゆる相模国府城に該当するエリアの遺跡であるが、同遺跡からは、須恵質、土師質の2種類の瓦塔が確認されている。いずれも焼成がよく、屋蓋部は

降り棟の瓦の表現も丁寧な沈線による区切りがみられる。斗拱部の表現はヘラ状の工具で巻斗部分を造作している。これらの特徴から池田分類の大仏類型に該当する。

神明久保遺跡からは御殿山産の瓦の出土事例はない。相模国府城全体で見ると、模倣文字瓦が出土している等、御殿山瓦窯から国府城への供給はあったようだが、瓦塔が出土している遺構とは共存していない。

以上示した瓦塔は、寺院や官衙城から出土しているが、採集品が多くて出土位置が定かでない。出土位置がわかるものも、堅穴住居跡や堅穴建物等からであり、寺院の中核に瓦塔が立地していたかの判断は困難である。

〈集落遺跡の事例〉

集落遺跡の出土事例としては、三ツ俣遺跡、寺山中丸遺跡、坪ノ内・宮ノ前遺跡、愛名宮地遺跡、北金目塚越遺跡、池ノ辺遺跡、河原口遺跡、本部遺跡、宮山中里遺跡、矢掛・久保遺跡、天神山下城遺跡、(以上相模国内)、黒川宮添遺跡、藪根不動原遺跡、子母口植之台遺跡(以上武蔵国内)から出土している事例がある。

以上あげた遺跡の中には、国分寺や郡寺のような伽藍配置が整った寺院ではなく、古代集落内に作られた本格的な伽藍をもたない「寺院」と想定される遺跡もあり、これらの遺跡を「村落内寺院(村落寺院)」として一般的に区別している。県内事例では、建物配置や、出土する遺物から愛名宮地遺跡・藪根不動原遺跡などは村落内寺院(村落寺院)として想定される。

集落遺跡から出土している瓦塔は小片が多いが、中には愛名宮地遺跡や黒川宮添遺跡のように基壇部や組物部、相輪部が明瞭にわかる破片もみられる。破片の多くは屋蓋部で、いずれも丸瓦のみを表現するAタイプ瓦塔が多い。丸瓦や軒の表現によって分類でき、屋蓋部以外のみの場合は時期や類型の判断が難しい。

屋蓋部以外が出土した事例であげられるのは、寺山中丸遺跡と宮山中里遺跡がある。寺山中丸遺跡は、標高204~207mの台地に立地し、瓦塔の他「油坏」と書かれた墨書土器や、瓦、鉄鏝、灰釉陶器、緑釉陶器などが出土した集落である(註4)。堅穴住居跡や掘立柱建物跡で構成される集落で、鉄鏝の出土状況から小鍛冶のような鍛冶生産も想定される。出土した瓦塔は、基壇部分のみの残存であることから時期判断し難いが、土師質であることを考慮すると9世紀代の瓦塔として考えられる。

宮山中里遺跡は自然堤防に立地する集落で、堅穴住居跡と掘立柱建物跡で構成される集落である。出土した瓦塔は、正方形の須恵質の板状で、裏面には糸切り痕跡が明瞭にみられる。須恵質という材質から瓦塔の時期が8世紀代と推測できるが(註5)、こうした屋蓋部以外のみが残存している場合の時期決定は今後の課題である。

以上、寺院・官衙関連から出土する瓦塔、集落から出土する瓦塔の詳細についてふれた。次に神奈川県内で出土した瓦塔の傾向についてみていくこととする。出土した瓦塔をまとめたのが第1表で、瓦塔の分類基準については、池田分類に拠った。また、須恵質のものは8世紀代、土師質のものは9世紀代という池田氏による判定があり、小片や分類不可のものについては材質による時期判断をしている。

神奈川県内の出土事例は、宗元寺の8世紀前葉のものが最も古く、9世紀中葉~後葉の事例が多い。寺院・官衙から出土する瓦塔は主要堂塔等明確ではないが、瓦塔が存在することから塔などの代用品としてではなく、祈りの対象物として瓦塔が造立していたことがいえるだろう。

集落内から出土する瓦塔については主に9世紀代を主とし、その中で時代の上下はあるものの、御堂などの中に瓦塔が造立していた景観が想定される。遺跡の立地によっていくつかのパターンがあり、愛名宮地遺跡等のような谷戸に立地する場合は、谷戸開発に伴う集落内での信仰対象物として考えられるようである。天神山下城遺跡は丘陵の斜面地に立地するが、瓦や掘立柱建物跡が密な遺構配置は近接する谷戸にみられ、これも未開地の開発に際する谷戸開発の集落として考えられるだろう。藪根不動原遺跡や黒川宮添遺跡等のように丘

陵上に立地するが、丘陵先端部のような特別な地に立地していないものは集落内に立地する瓦塔の中に含めた。これらの集落も丘陵の地を開発するにあたり、信仰対象物を望んだ人々の造立と考えられる。寺山中丸遺跡は、山林開発の最先端地として集落が形成されたものと考えられ、善波峠を挟んで大住郡側には坪ノ内・宮ノ前遺跡が位置している。瓦塔が出土したのは溝状遺構からで、集落の中心地は出土した溝状遺構より南側に想定されている。この溝状遺構からは、鉄滓や輪の羽口などが出土しており、手工業生産との関係がうかがえ、谷地形開発に伴う集落であった可能性が高い。

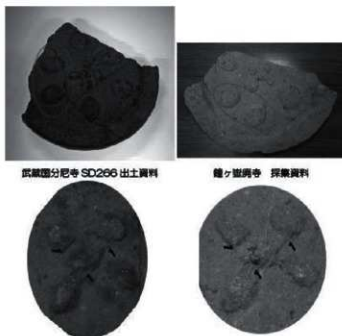
自然の畏怖の対象は山野だけに限ったことではなく、河川もまた対象だったのだろう。河原口坊中遺跡は自然堤防に立地する遺跡で、三川合流地帯で水上交通の要となる地である。低地の開発を進んで行った氏族の信仰対象の場として瓦塔を造立したのだろう。

瓦塔出土遺跡のうち御殿山瓦窯の瓦が伴うのは、寺山中丸遺跡、北金目塚遺跡、藪根不動原遺跡、黒川宮添遺跡、池ノ辺遺跡である。集落が盛行する時期に瓦塔の造立があり、その時期は御殿山瓦窯の操業もピークを迎えていることから、それらの集落からは御殿山瓦窯と瓦塔に関係が見いだせる。

御殿山瓦窯の瓦は集落や平地寺院以外にもみられる。それが山林寺院である。

3. 山林寺院について

山林寺院とは、平地寺院と併用され、僧尼が仏教の拠点となる寺院で教典を学び、仏を礼賛供養等するため、山に籠もって法力を身につける場が山林寺院であるとしている（上原2011）。僧尼は、平地寺院と山林寺院を往来しており、こうした様相は仏教が伝来する時代にまでさかのぼる。日本においては7世紀後半に、平地寺院とネットワークをなしている山林寺院として近江・崇福寺がある。相模国内で山林寺院として考えられるのは、厚木市内に所在する鐘ヶ嶽寺である。鐘ヶ嶽は東丹沢に連なる山で、現在でも修験道の修行の場となる信仰対象の山である。東丹沢山地は大山から北へ向かう尾根上でそこに日向薬師（宝城坊）があり、鐘ヶ嶽、白山へと続く修験のルートとして知られている。前述したように、この尾根沿いに御殿山瓦窯の瓦が出土している。鐘ヶ嶽寺から軒丸瓦・丸瓦が採集されたことをきっかけとして、山林寺院の存在が想定され、近年、厚木市教育委員会による試掘調査が行われている。その結果、寺院を直接示すような遺構はなかったものの、平瓦や鉄滓がトレンザ下層部分より出土し、整地したような痕跡が確認されたなど、寺院の存在が裏付けされるような結果となっている（註6）。現在までに確認されている軒丸瓦2点のうち一点は、御殿山瓦窯産で、千代廃寺と同范関係にあることは以前から知られていたが、残る1点については、御殿山瓦窯産に類似するものとして判断していた。その中で、武蔵国分寺・尼寺の再建期に該当する軒丸瓦と同范であるこ



第6図 鐘ヶ嶽寺採集瓦と武蔵国分寺・尼寺同范瓦

とを確認した。その根拠は、①同じ箇所には范傷があること、②瓦当面に現れている表面の木目の痕跡等という同様な特徴がみられることから同范と断定した（高橋2017）。山林寺院と国府・国分寺の同范瓦の事例は、全国的にみられる事例でもある。「白月は山に入り、黒月は寺に帰る」といったように、修行の場として往来があったことが指摘されていることは、解釈の裏付けとなろう（上原2002・須田2002）。

同范瓦が出土する背景の検討では、同国内間での同范関係であることが多い。今回、明らかにしたのは「武蔵」という隣国の武蔵国分寺同范瓦事例であり、また別の要因が考えられる。国を超えた事例としては、大和毛原廃寺と伊賀国分寺があげられる。毛原廃寺が伊賀国分寺に対する山林寺院として考えられており、国境に立地する事例として、大和に属する寺院ではあるが、同范瓦の出土状況から伊賀国府の瓦生産の管轄に組み込まれていたと考えられている（上原2011）。では、相模国と武蔵国の事例はどうであろうか。

御殿山瓦窯は、南多摩窯址群中の一グループで、境川水系の相模国側から築造が開始された（鶴岡2014）。その生産拡大に伴って分水嶺を超えて武蔵側へ広がっていくことがうかがえる。操業開始は9世紀前半と見られ、9世紀後半～10世紀前半頃に生産のピークをむかえ、10世紀前半以降に終息する瓦窯址群である。瓦の他に須恵器も生産しており、その供給圏は南武蔵から相模東部地域、甲斐方面までと国を越えて分布している。

『日本後記』や『日本三大実録』には、甲斐国と相模国、河内国と和泉国といったような国境をめぐる争いの記事が掲載されているが、相模国と武蔵国の間での争いの記事はない。争点の内容は、いずれも様々な資源に関する領有を主張するもので、古代社会における利権が垣間みられる。相模と武蔵は境川水系と多摩川水系の分水嶺である丘陵稜線が国境であり、両国の主要寺院へ供給する御殿山瓦窯が国境を間に入り組んだ支群構成がみられる。例えば、分水嶺の北側に位置している瓦尾根瓦窯が相模国分寺へ供給する瓦窯であり、分水嶺の南側にあるセイカチクボ瓦窯等が武蔵国分寺へ供給している窯であったことがあげられる。このような環境が成り立っていたのは両国における友好的な関係が背景にあったことが想定される。それを裏付けるように、相模・武蔵の間では、『公卿補任』で相模守であった大伴国道が武蔵守に、武蔵守であった藤原綱継が相模守に転任した記事が記載されており、両国の間では協調的な丘陵利用を可能にしていたことが指摘されている（深澤2015）。御殿山瓦窯を管理運営していたのは、この時期に国司と対等であった富豪層が主導したとみなされ、御殿山瓦窯は国境を越えて操業し、両国へ供給していたといえ、その広範囲操業は瓦窯の管理運営者に起因するところが大きい。しかし、瓦生産の指揮は、果たして富豪層クラスの人間が自由にとれるものなのだろうか。他国事例をみても、瓦当范、特に国分寺との同范瓦については、瓦操業について国司の関与が想定されることが多く、御殿山瓦窯においても同様に考えられるだろう。

9世紀中葉以降という時期は、武蔵国分寺の再建期の時期であり、武蔵国分寺や尼寺の僧や尼僧の山林修行の場として、遠く離れた鐘ヶ嶽廃寺、日向薬師（宝城坊）が新たに設けられたのではないだろうか。信仰の



第7図 鐘ヶ嶽廃寺と武蔵国分寺位置図

山として古くから指摘されている東丹沢の山々に、同じ素弁の軒丸瓦をもつ寺院を建立することで、武蔵国司は相模国とのつながりを誇示していたのだろう。

北武蔵の窯業生産地は、選地された山林や丘陵は元々神聖視されている場所であり、窯業生産地帯を独占する為に山林資源の独占的な使用と神域への進出という課題があったという（澤口2014）。北武蔵のエリアの窯業開発地は古代の郡境や古墳群の境に形成され、「共益地」的な空間で、郡や評の中心とならない土地に窯が立地しており、こうした瓦窯跡群の近隣には初期の古代寺院が所在している。古代において、山林は修行の場でもあり、更に浄域であることから、瓦の生産や仏具の生産が仏の場所を確保する為の行為であるという大義名分をもち、丘陵内部へ開発を行っていったとしている。寺院の建立と窯業生産地の開発は緊密であったという背景が北武蔵にはあるが、南武蔵の窯業開発地域にこうした様相はみられない。武蔵国分寺の再建期の時期に、瓦を調達していた御殿山瓦窯の管理運営者である武蔵国司が、国分寺・尼寺の僧侶たちの山林修行の場として相模の地を選地し、東丹沢の地に山林寺院を建立、修行の場としていたと想定される。

4. 瓦塔と御殿山瓦窯との関係は

瓦塔も瓦生産同様、発注者がいて生産される製品であり、誰もが自由に製作可能なものではない。瓦塔は鳩山瓦窯や新沼窯、東海地方では狼狽窯等の窯から出土していることから、須恵器工人の関与があるとされている。瓦塔の製作を依頼する発注者は、先にも述べたように、開発を担う集落のシンボリックな存在として瓦塔を信仰対象物として設けたいという意図が考えられ、その時期が9世紀中～後半に集中している。そして、その時期の瓦生産を担っていたのは御殿山瓦窯であったのだろう。

相模国や武蔵国で御殿山瓦窯産の瓦が多くみられる傾向は、御殿山瓦窯の生産がピークとなる9世紀後半～10世紀前半であり、最も流通していた時期に瓦塔の造立も行われていたのだろう。集落遺跡に分布している場合は、瓦を必要とする建物があったか、瓦塔を納めるための構造物があったか、もしくは近隣に瓦を用いる構造物があり、不要となった持ち運ばれたといった判断が必要となる。御殿山瓦窯産を起源とする瓦が伴うのは、先にも述べたように集落遺跡が多く、宮造遺跡、藪根不動原遺跡、寺山中丸遺跡、北金目塚遺跡、池ノ辺遺跡、などがあげられる。これらの集落内に御堂のような建物があり、仮に建物に葺いていた瓦が御殿山瓦窯産であれば、それが流通していた時期であり、古代寺院以外で御殿山瓦窯産の瓦を入手できるルートがあったことを意味している。ただ、一堂の建物を葺くような量ほどの遺跡からも出土しておらず、大棟などに数枚葺くような構造で、シンボリックな意味合いでの使用なのかもしれない。

山林寺院と平地寺院間での同范瓦については、相模・武蔵という国を超えて同范関係がみられる稀有な事例ではあるが、この背景には御殿山瓦窯という窯が両国共通の生産窯であり、御殿山瓦窯を基軸とする生産体制が武蔵主導のもと行われ、9世紀後半代の相模国の瓦生産体制に武蔵国司が関与していたことが同范瓦の関係によって想定される。同范瓦が出土するのは、武蔵国司が武蔵国分寺や尼寺の僧・尼僧の修行の地として相模国の地を選地し、瓦を供給していたといえるのではないだろうか。国分寺瓦の同范関係が物語っているように、「相模と南武蔵」は密接であったといえる。

執筆にあたり、また資料実見等において様々なご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

東真江、新井 悟、荒井秀規、池田敏宏、井出智之、井関文明、稲村繁、宇都洋平、大上周三、大村浩司、岡本孝之、押方みほ、押木弘己、栗田一生、富永樹之、曾根博明、田尾誠敏、中三川昇、橋口 豊、山口正紀、依田亮一（敬称略）

【註】

- 1: 鐘ヶ嶽廃寺という道跡名称はないが、瓦が採集できる地点であることからここでは便宜的に「鐘ヶ嶽廃寺」と呼称する。
- 2: 平成26年度の伊勢原市の道跡展示にて実見し、採集瓦として井出智之氏からご教示いただいた。中世瓦と共に採集されるようで、他に溝弁の軒丸瓦もあり、東丹沢根ルート沿いに瓦葺建物の存在が想定される。
- 3: 岡上座堂事例については報文のみの為、出土事例の記載のみとする。
- 4: 調査担当者である（公財）かながわ考古学財団の山口氏のご教示による。
- 5: 宮山山道遺跡の瓦塔については報告書作成時に池田敏宏氏よりご教示いただいた。また、愛名宮地遺跡や天神山下城道跡の時期については、厚木市郷土資料館にて境雅仁氏、佐藤健二氏、實清龍之介氏のご好意により瓦塔の実見の機会を得、ご教示いただいた。
- 6: 厚木市教育委員会 佐藤健二氏のご教示による。

【引用・参考文献】

- 荒井秀規 2017『覚醒する（関東）平安時代』古代の東国3 吉川弘文館
- 池田敏宏 1999「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討―関東地方瓦塔屋敷部編年の検証作業を中心に―」『研究紀要』第7号 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 池田敏宏 2000「瓦塔」『古代仏教系遺物集成・関東一考古学の新たな開拓をめざして―』考古学から古代を考える会
- 池田敏宏 2004「山野開発と瓦塔の造立―瓦塔造立の背景についての考察―」『開発と神仏とのかかわり』古代考古学フォーラム2004『古代の社会と環境』帝京大学山梨文化財研究所・古代考古学フォーラム実行委員会
- 石田成年 1997「摂河泉の瓦塔」『河内古文化研究論集』大阪府柏原市古文化研究会編
- 井上尚明 2006「武蔵国における村落寺院について」『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古第41号埼玉考古学会
- 上原真人 2002「山形の平地寺院と山林寺院」『佛教藝術』265号 特集山岳寺院の考古学的調査 西日本編 毎日新聞社
- 上原真人 2011「国分寺と山林寺院」『国分寺の創建 思想・制度編』須田勉 佐藤信編 吉川弘文館
- 上原真人 2016「国境（くにぎわいの）山寺―石清水八幡宮前身寺院に関する推測―」『京都府埋蔵文化財論集』第7集 一創立35周年記念誌―公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 牛山佳幸 2012「山寺の概念」『季刊 考古学』第121号 特集 山寺の考古学 山寺の空間・山寺の諸相・山寺をめぐる諸問題 雄山閣
- 大島慎一・田尾誠敬 2000『千代北町道跡 第Ⅶ地点』小田原市文化財調査報告書第82集 小田原市教育委員会
- 大坪宜雄 2000「民間における仏教の受容―神奈川県内の村落内寺院と大葬墓―」『かながわの古代寺院』神奈川県考古学会 考古学講座 神奈川県考古学会
- 大坪宜雄他 2007『載根不動原道跡』載根不動原道跡発掘調査団
- 大村浩司他 2013『神奈川県茅ヶ崎市 下寺尾官街道跡群の調査～下寺尾七道伽藍跡・高座郡街の調査～』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告40 茅ヶ崎市教育委員会
- 小田原市教育委員会 2008『千代道跡群―千代台地にひろがる原始・古代の道跡―』小田原の道跡探訪シリーズ3
- 加藤芳明・富木樹之 2000「厚木市七沢の鐘ヶ嶽採集瓦について」『神奈川考古』第36号 神奈川考古同人会
- 神奈川県立歴史博物館 2008『特別展 瓦が語るかながわの古代寺院』
- 神奈川県考古学会 2000『かながわの古代寺院』
- 神奈川県教育委員会 2014『発掘された御仏と仏具―神奈川の古代・中世の仏教信仰―』平成26年度かながわの道跡展・巡回展
- 梶原義実 2002「最古の官宮山寺・崇福寺（滋賀県）―その造営と維持―」『佛教藝術』265号 特集 山岳寺院の考古学的調査 西日本編 毎日新聞社
- 梶原義実 2012「尾張における古代寺院の動向」『尾張・三河の古墳と古代社会』同成社
- 上高津貝塚ふるさと歴史の広場 1998『仏のすまう空間―古代瓦葺・浦の仏教信仰―』
- 川崎市教育委員会 1981『川崎市高津区野川 影向寺文化財総合調査報告書〔寺院址〕』
- 河野一也 1993「奈良時代寺院成立の一端について（Ⅳ）相模国足下群千代廃寺の古瓦を中心として」『神奈川考古』第29号 神奈川考古同人会
- 関東古瓦研究会 1984『第8回 関東古瓦研究会 相模編』

- 久保哲三・柳谷 博 1989『矢掛・久保道跡の調査』矢掛・久保道跡調査会
- 考古学から古代を考える会 2000『古代仏教系遺物集成・関東一考古学の新たな開拓をめざして〜』
- 後藤健一 2007『大知波峠寺跡』日本の道跡22 同成社
- 後藤健一 2012『国分寺と山寺』季刊 考古学 第121号 特集 山寺の考古学 山寺の空間・山寺の諸相・山寺をめぐる諸問題 雄山閣
- 坂田敏行 2009『製作技法・表現手法からみる東日本出土瓦塔』研究紀要 第24号 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 佐生 衛 2012『第2章 瓦塔の景観と滅罪の信仰ー瓦塔が建てられた景観と経典との関連を中心にー』日本古代の祭祀考古学 吉川弘文館
- 澤口和正 2014『商業生産地と古代の仏教』古代の開発と地域力 古代東国の考古学3 高志書院
- 穴戸信吾他 2000『坪ノ内・宮ノ前道跡 (No.16・17)』かながわ考古学財団調査報告77 財団法人 かながわ考古学財団
- 須田 勉 2002『国分寺と山林寺院・村落寺院』国史館史学 第10号
- 高崎光司 1989『瓦塔小考』考古学雑誌 第74巻第3号 日本考古学会
- 高橋 香 2014『相模における国分寺造営以降の瓦生産体制についてー国分寺・国府・国内諸空間における瓦工人の動向についてー』かながわの考古学 研究紀要19 公益財団法人かながわ考古学財団
- 高橋 香 2017『鎌ヶ嶺採集瓦と武蔵国分寺の同范瓦について』厚木市史たより 第16号 厚木市教育委員会
- 竹花宏之 2012『多摩丘陵における瓦窯についてー多摩ニュータウン道跡群を中心としてー』研究論集 XXVI 東京を振るー東京都埋蔵文化財センター30周年の軌跡ー 財団法人東京都スポーツ文化事業団 東京都埋蔵文化財センター
- 玉口時雄・大坪宜雄 1995『黒川地区道跡群報告書Ⅷ 宮詔道跡ー奈良・平安編ー』黒川地区道跡調査団
- 近野正幸 2000『神明久保道跡』かながわ考古学財団調査報告103 財団法人かながわ考古学財団
- 鶴岡正昭 2012『須恵器生産の特徴と系譜』研究論集 XXVI 東京を振るー東京都埋蔵文化財センター30周年の軌跡ー 財団法人東京都スポーツ文化事業団 東京都埋蔵文化財センター
- 鶴岡正昭 2014『国府を支えた手工業生産ー武蔵国府とその周辺ー』古代の開発と地域力 古代東国の考古学3 高志書院
- 帝京大学山梨文化財研究所/山梨県考古学協会 2003『道跡の中のカミ・ホトケ』古代考古学フォーラム古代の社会と環境
- 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館 1999『仏堂のある風景ー古代のムラと仏教信仰ー』
- 富永樹之 1994〜1996『村落内寺院の展開 (上)〜(下)』神奈川考古 第30〜32巻 神奈川考古人会
- 永井邦仁 2005『東海地方の古代瓦塔に関する覚え書』三河考古 15 三河考古刊行会
- 永井邦仁 2006『東海地方の古代瓦塔研究ノオト』研究紀要 第7号 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
- 永井邦仁 2008『猿投窯型瓦塔の展開 (1)ー信濃の猿投窯型瓦塔ー』研究紀要 第8号 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
- 永井邦仁 2009『猿投窯型瓦塔の展開 (2)』研究紀要 第9号 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
- 永井邦仁 2013『古代東海地域における瓦塔の造立とその背景』技術と交流の考古学 同成社
- 松本修自 1985『小さな建築』文化財論叢 奈良国立文化財研究所
- 日野一郎・境 雅仁 1999『愛名宮地遺跡 県営厚木愛名団地に伴う発掘調査報告書』愛名宮地遺跡調査団
- 服部敬史・河合英夫他 2011『南多摩窯跡群須恵器編年の暦年代検討』八王子市史 創刊号 八王子市史編集委員会
- 深澤靖幸 2015『第5章 文化をまとめ、生きようとした時代』新八王子市史 通史編1 原始・古代 八王子市史編集委員会
- 古川 登 2012『明寺山廃寺』季刊 考古学 第121号 特集 山寺の考古学 山寺の空間・山寺の諸相・山寺をめぐる諸問題 雄山閣
- 吉田美弥子 2011『5 瓦の諸問題 (1) 御殿山支群出土の軒丸瓦について』南多摩窯跡群 八王子市史・八王子市史編集委員会 八王子市南部地区道跡調査会

【図版出展】

第1図 筆者作成

第2図 池田2004より引用

第3図 池田2004より引用一部加筆

第4図 川崎市教委1981、近野2000、池田2000、大村2013より引用作成

第5図 久保他1989、玉口他1995、日野他1999、穴戸他2000、池田2000、大坪2007より引用作成

第6図 高橋2017より引用

第7図 高橋2017より引用一部改変・加筆

破鏡に残された分割の加工痕跡

－厚木市戸田小柳遺跡出土鏡破断面の観察と比較－

戸羽康一・岸本泰緒子

1. はじめに

穿孔や破断面の研磨など人為的な加工が施され、鏡片となつてからも利用されたことが明確な鏡片を、破鏡と呼ぶ（高橋2015、辻田2005など）。厚木市戸田小柳遺跡から出土した双頭龍文鏡片は、全体の約1/3程度が残存する鏡片であるが、破鏡といえる条件を備えているのだろうか。報告の際には穿孔と研磨を加えた「いわゆる破鏡に類するものである可能性が高い」とした（公益財団法人かながわ考古学財団2016）。しかし、穿孔が未貫通である点や、破断面研磨の有無について「一部に面取りするような粗い研磨の痕が見られる」としたようにいわゆる面的な研磨とは様相が異なる点、また鏡面側に不定方向に走る多数の傷がある点など、一般的な破鏡とはやや異なる特徴があることから、これを単に破鏡として良いのか些かの疑問が残った。

報告書作成時には国立歴史民俗博物館において齋藤努氏、上野洋史氏との共同検討により、蛍光X線分析および電子顕微鏡での表面観察をおこなった。電子顕微鏡での観察では、未貫通の穿孔痕跡を確認した。また破断面に、光沢を持ついわゆる丁寧な磨きの痕とは異なるものの、粗い筋状の加工痕跡が見られたため、粗いながらも研磨をおこなっていると判断し、これらをもって破鏡である可能性が高いとした。報告書では紙幅の関係上その観察結果を文章と実測図で示すにとどまり、部分写真などのより客観的なデータを示すことができなかった。そこで本稿ではそれら諸特徴に関して、客観的資料である写真、特に顕微鏡を使用した拡大写真を撮影し、合わせて類似資料との比較を行うことで、戸田小柳鏡における破鏡的特徴についての再検討をおこないたい。

2. 方法

今回分析対象とした資料は東日本において出土した舶載鏡片で、その中でも関東地方およびその近隣地域のものでした。本来であれば、破鏡の出土量が多い九州～近畿地方における西日本の資料を対象とすべきであるが、膨大な資料数が存在することをはじめ、今回の分析が多分に実験的な視点を含み、かつ時間的な制約もあったため、実際に遺物を観察することができる点を重視して、筆者の比較的近隣に所在する資料の選択を行った。

遺物の主な観察方法として、デジタルマイクロスコープ（サンコー社製 Dino-Lite Edge EDR/EDOF Polarizer）を用いて鏡の全面を確認し、適宜写真撮影を行った。

今回観察した資料についての出土状況および報告書・論文等における評価は以下のとおりである。

神奈川県厚木市戸田小柳遺跡（第1地点）

神奈川県厚木市酒井・戸田に所在する遺跡で、相模川右岸の沖積微高地（自然堤防上）に立地する。弥生時代から近世の遺構と遺物が発見された。各時代で確認された主要な遺構は溝または流路である。

戸田小柳鏡はP2東地区H20号流路の覆土中から出土した。本遺構は調査区外に延伸するため、全容は不明

であるが、確認できた規模は南北方向に長さ20 m以上、東西方向に幅6 m以上、深さは調査区西壁の断面で15～50 cm、確認面から最も深い部分で35 cmである。鏡は弥生時代後期から古墳時代後期に帰属する多量の土器とともに出土した。

鏡の法量は復元径9.0 cm、厚さ1～2 mm、重さ31 gで、中央の鈕を含む全体の3分の2程度を欠損している。銘文の「位至」が遺存している。主文がやや粗雑化しているため、双頭龍文鏡Ⅱ式にあたるとした。各型式の製作時期について上野祥史は、Ⅰ式を後漢、Ⅱ式を三国魏、Ⅲ式を西晋と推定している（上野2016）。遺構の埋没時期は古墳時代後期であるが、双頭龍文鏡は中国後漢～魏晉（2～3世紀）に作られた鏡であることから、鏡の製作時期と遺構埋没年代にはかなりの隔りがある。

表面状態の肉眼観察から、鈕座周辺のあたりに2ヶ所の小さな未貫通の穴があり、穿孔を試み中断した痕としたこと、破断面は一部に面取りする様な粗い研磨の跡がみられること、鏡面側に不定方向の無数の傷は故意に付けた可能性があること、その中でも破断面に沿った溝状の傷があることや鈕座裏あたりに打撃痕があることから鏡を分割するための折り取り線として溝を切り、最後に敲打によって割ったものであるという一連の行為などを想定し、破鏡に類するものである可能性が高いとした。

蛍光X線分析を行っており、錫が銅より高い割合を示した。これは、緑青に覆われた状態での計測であり、錆化によって銅の濃度が低くなっているためである。

神奈川県逗子市池子遺跡群

神奈川県逗子市池子に所在する遺跡群で、大半は急峻な丘陵地となっているが、調査範囲の大半は低地に位置する。弥生時代から近世以降にかけての遺構と遺物が発見されている。

池子鏡はNo.2地点第2号竪穴住居跡の覆土上層から出土した。住居跡は後世の削平によって北東部を欠損している。明確な跡は確認されなかったが、住居中央やや北西寄りの堀方内に若干の焼土が認められたため、主軸方向を北西にもつ、1辺約5 mの隅丸方形を呈する竪穴住居と推定されている。深さは最も残りの良い南西壁で80 cmである。弥生時代後期から古墳時代前期末にかけての土器とともに鏡片が出土した。また、金属製品として鏡片のほか、鉄鏃2点、銅鏃1点が出土している。鉄鏃は平面形態が五角形を呈するもの、茎部のみのものである。銅鏃はいわゆる有稜系のもので柳葉型を呈する。

鏡は復元径9.7～9.8 cm、厚さ1～3 mm、重さ7.6 gである。鏡縁部を中心とした資料で、折損部を含めて表面はよく摩滅しており、穿孔は行われていないと判断されている。鏡式についてここでは「内行花文鏡」とされている（註1）。また、鏡の成分分析を行い、錫・鉛の割合が高いことから、舶載鏡としている。

千葉県木更津市中尾遺跡群東谷遺跡

中尾遺跡群は千葉県木更津市中尾に所在する遺跡で、東谷遺跡・永作遺跡・西ノ入遺跡・西ノ入B遺跡などから構成される。小塚川南岸の丘陵上に立地し、東谷遺跡は当該遺跡群のほぼ中央に位置する。弥生時代後期から古墳時代前期および古墳時代中・後期の住居跡や同時代の墳墓の存在が明らかにされている。弥生時代後期から古墳時代前期の主要な遺構は竪穴住居跡（92軒）、方形周溝墓（14基）であり、集落および墓域であることが判明している。

中尾鏡は64号住居跡の床面直上から出土した。住居跡は主軸長約9.6 m、主軸幅約9.9 mを測る大型住居で、古墳時代前期に帰属する多量の土器とともに、土製勾玉、土製・石製玉類、ガラス小玉が出土している。本遺構では北東のコーナーから柱穴付近と、西壁の中央付近の覆土中より焼土と炭化材が出土している状況であったことから、廃絶後に住居を利用した祭祀が行われたと考えられている。

東谷鏡は25.0×11.8mmの小片で、重量2.1gである。報告書では双頭龍文鏡と判断されているが、酒巻忠史による千葉県君津地方における小銅鐸・鏡出土遺跡の集成では、「単夔鏡」または「双頭龍文鏡」とされている（酒巻2016）。なお、鏡背には赤彩が施されており、比熱の痕跡はないことが記されている。

山梨県南アルプス市長田口遺跡

山梨県南アルプス市平岡（旧中巨摩郡橋形町）に所在する遺跡で、市之瀬台地上に立地する。縄文時代中期から後期、弥生時代後期から古墳時代前期、中世、近世以降の遺構と旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世、近世以降の遺物が発見されている。

長田口鏡は5号溝状遺構の底面付近における砂礫層中より検出された。遺構は調査区外に延びるため全様は不明であるが、長さ約11m、幅2～2.3m・底幅10～80cm、深さ最大1.2m、断面形態は底幅の狭い逆台形を呈する。底面には凹凸があり、溝の中央部やや西側および東側は一段深く削り取られている。壁・底には砂礫の流れ込みによって形成されたと考えられる配置に規則性のないピットが多数確認されている。本遺構の帰属時期は享保20年（1735）年の絵図図から市之瀬台地上の用水路である可能性を考慮し、近世以降の所産と判断されている。

鏡は縄文時代中期から晩期の土器、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器、打製石斧・磨石・凹石・石鏃などの石器、熊鷹元寶・嘉祐元寶（註2）などの北宋銭とともに出土した。帰属時期は鏡の加工の特徴から破鏡と判断し、遺跡内で展開している弥生時代後期後半～古墳時代初頭の集落と同時期のものと位置付けている。

鏡は外縁部のみ遺存している状態で、復元径は11.4cm、厚さは1～4mm、重量34.6gである。鏡式の断定は困難としながらも幅広の素縁部が外周から内区側に向かって強く傾斜を持つ点や復元径、斜行鋸歯文帯の鋸歯文の斜行が整っている点から「双頭龍文鏡」である可能性を指摘している。穿孔は6ヶ所に認められ、素縁の内区側の両端にあるものと素縁から斜行鋸歯文にかけてあるものが見られる。前者の2ヶ所は3mmの円形で、穿孔2ヶ所の間隔は5.4cmである。紐などを通して懸垂するための機能を有していたと考えられている。一方、後者の4ヶ所は鏡を破るための穿孔と捉えられており、その中の1ヶ所は穿孔途中で鏡面および鏡背面に円弧形の溝状痕が見られる。そのほかの穿孔は研磨によって原形（円形）を留めていないとした。なお、鏡の穿孔に用いた道具について竹管状の剝抜用工具の使用が示唆され、かつ北陸地方における玉・石製品生産における穿孔方法（剝抜穿孔）と共通することを指摘している。

蛍光X線分析による成分分析では、錫が銅の4倍の強度を示したが、何らかの理由で錫が表面に濃縮したためか、銅が失われたためと記載されている。鉛同位体比分析では、分析結果より華南産の鉛であることが判明している。

3. 顕微鏡写真による観察

（1）戸田小柳鏡の再観察

東日本で出土する破鏡の数は非常に少なく、また墓域以外からの出土が多いという特徴がある。戸田小柳鏡もまた自然流路からの単独の出土であり、その使用状況また廃棄の経緯を推測できる材料はほとんどない。したがって、遺物自体に残された痕跡がほぼ唯一の手がかりである。

戸田小柳鏡の表面をデジタルマイクロスコープで観察すると、製作時の痕跡と、その後の二次的な加工痕跡を認めることができる（図1-1）。鋸歯文、銘文など文様の凸線上面は非常に平滑で、製作時に施された仕上げ研磨によるものである（図1-3・4）。文様の空隙にはザラついた鋤肌がそのまま残されている。外縁部は特に丁寧に研磨されて光沢を持ち、稜は丸みを帯びている（図1-5）。

二次的な加工痕跡としては、未貫通の穿孔痕、破断面、破断面の整形痕、および鏡面の傷がある。穿孔痕は内区に2箇所並んで存在し、いずれも直径1mm以下、深さ1mm以下の、ごく小さな凹みである(図1-2、2-1・2)。その孔内は不規則な凹凸があり、穿孔具を回転させて穿つ孔の滑らかな内面とは様相を異にする。先の尖った鉄製工具で敲打(あるいは間接打撃)することによって孔を穿とうとしたが、何らかの理由で中断した痕跡ではないかと考えられる。

破断面では、鏡面に直交する方向に並ぶ髪が観察された(図2-3・4)。これらの髪は、鏡が折り取られた際に生じたものと推測され、顕微鏡観察によって初めて認識したものである。肉眼観察の段階では、この髪が研磨による筋状痕跡のように見えたため、当初は粗い研磨が施されているものと考えていた。しかし拡大してみると、この凹凸は研磨痕ではなく、折り取ったままの状態を残していることがわかった。図2-3・4では、髪は破断面の鏡背面から鏡面側まで同様に見られることから、この部分では破断面の研磨は全くおこなわれていないことが分かる。

破断面の一部には整形の痕跡が見られる(図2-7・8)。鏡の中央付近に石器のリングのような幅0.5mm程の波状の凹みがあり(図2-7中央)、鏡片を折り取る際の打撃痕、あるいは髪などによる加工痕と推測される。またそれと重複して、鏡面側から、鏡面に対して斜めに面取りのように削られている面がある。これは分割後の面取り調整なのか、あるいは分割作業時の加工痕跡なのかは不明である。

鏡面には不定方向の傷が多数ある(図1-1・2、図2-5・6)。鏡背には同様の傷は見られないことから、これらは河川でのローリングなどで自然に生じた傷ではなく、人為的につけた傷である。傷には断面方形の沈線のような深いものから(図2-5)、途切れ途切れに深れるような浅いもの(図2-6)まであり、深さは一定しないが、何らかの鉄製工具を使用したものと考えられる。この傷も加工痕跡の一つではあるが、穿孔や破断面処理と同様に、鏡片としての分離整形の際に施された加工なのか、あるいは使用(廃棄)の際の加工なのかは不明である。だが像を映し光を反射する機能をもつ鏡面に対して、それらの機能を損なうような加工を施すという事象からは、鏡片が役目を終える際に行われた加工だと推測することもできよう。

戸田小柳鏡に見られるこれらの加工痕跡は、他の破鏡にもみられるものなのだろうか。そのことを検証するため、まず破鏡の加工方法の事例を確認し、その後で他遺跡の資料との比較をおこなう。

(2) 破鏡における加工の方法

破鏡の研究は、その集積の分布域である北部九州を中心に論じられてきた。完形鏡と合わせて分布傾向を比較するなどして、弥生時代後期～古墳時代前期の変動の時代を捉えるための資料としての検討がおこなわれている。

鏡に残された加工痕跡に関する見解については、福岡県原田遺跡石蓋土壇墓出土鏡における藤丸昭八郎の指摘が重要である(藤丸1993)。鏡縁部の穿孔痕が分割のための加工痕跡であるとした。原田鏡は完形の内行花文鏡だが、鏡縁部の鏡背、鏡面側それぞれから4ヶ所ずつ、ほぼ一列に並ぶ回転による擦痕がある孔をもつことから、「原田A鏡の鏡縁の表裏に並ぶ孔列は、おそらく鉄製の細い錐のようなものに回転を与えながら穿孔しようとして、何等かの理由で中断せざるを得なかった痕跡であろう」としている。

同様の穿孔による分割方法については、福岡県老司古墳3号石室出土三角縁神獸鏡片に関する辻田淳一郎の観察と指摘がある(註3)(辻田2005)。内区が欠落し外縁部のみを扇形の懸垂用加工したとされる同鏡片には5ヶ所の貫通した穿孔があり、その他に未貫通の径1.5mm、深さ1mm弱の穿孔痕跡、さらに扇形の狭

端部には切り離しのための数ヶ所の穿孔の痕跡があるという。その後丁寧な研磨がおこなわれている部分と、破断面がそのまま残る部分があるが、狭端部の孔は未貫通であることから、懸垂用ではなく切り離し用の穿孔であった可能性があるとしている。また辻田は、老司鏡の観察結果と破鏡の形態分類結果の傾向を併せ検討し、扇形という形態への一定の志向の存在、つまり鏡片を意図的に扇形に加工した可能性も想定している。

原田鏡、老司鏡では切り離しのために穿孔をおこなう方法が指摘されているが、もう一つの分離整形方法の事例として、大庭孝夫が鑿状工具による分離整形の痕跡を挙げている（大庭2012）。その資料である福岡県藤の尾垣添遺跡鏡は集落内の溝から出土しており、遺構年代は古墳時代前期前半とされている。この形態もまた「老司型」（辻田2005）というべき、外区のみを扇形に切り取った形の破鏡である。肉眼およびデジタルマイクロスコープによる観察がおこなわれ、工具痕が確認された。破断面に残された半円筒形の工具痕は、鏡背側から 幅1.25mm、高さ1.0mm、深さ1mm以下で、「工具痕内部は平滑であることから、鋭利な鉄製小形鑿状工具（註4）で施されたことが推測できる」（大庭2012；p.116）という。またその施された方向が、鏡面と垂直方向ではなく、破断面内側に挟りこんでいることから、分割のためではなく、破断面整形のために加工したと大庭は想定している。

このほか、山梨県南アルプス市長田口遺跡出土鏡については、先に述べたように竹管状の剝抜用工具使用の可能性が指摘されている（山梨県埋蔵文化財センター1993）。

破鏡の加工痕跡の確認事例が少ないのは、大庭も指摘しているように「後の破断面研磨・摩滅により、現状ではその痕跡が失われ」（大庭2012；p.118）ているためと考えられる。

（3）他遺跡の資料との比較

①神奈川県足子池子遺跡群No.2地点第2号竪穴住居出土鏡

無文の外縁部と櫛歯文からなるごく小さな破片で、鏡式は不明である（註5）（図3-1）。残存部分に明瞭な主文はないが、肉眼観察の際、鏡片内区側に線文の端部かと思しき微かな凸部を認めたため、顕微鏡観察でその箇所を再度確認した（図3-2上部中央）。幅0.4mmほどの僅かな凸部があるが、錆または析出物による膨れなのか、線文の端部なのかの判別はつかなかった。

表面は全体に摩滅しており、製作時の研磨痕および鋳肌は確認できない。この点は戸田小柳鏡、東谷鏡とは異なる。櫛歯文は線の頂部と基部の高低差が小さく、ほとんど凹凸がない（図3-3）。懸垂用のいわゆる穿孔は無いが、破断面に2箇所加工痕が見られる（図3-4～7）。いずれも鏡面側の方が鏡背側より大きく抉れており、鏡背側から鏡面側へ向けての加工が想定される。またこの加工痕は鏡面研磨より後に施されていることは間違いないが、加工痕自体が分割のための加工の一部なのか、あるいは分割後に施された加工なのかは不明である。破断面は一部に摩滅のため丸みを帯びている部分があるが、基本的に割れ口のみまで調整はされていない（図3-8）。

②千葉県木更津市中尾遺跡群東谷遺跡64号住居出土鏡

長辺2.5cmのごく小さな鏡片で、内区と外区を隔てる圏線と主文の一部からなり、外縁部は残存しないため径は不明である（図4-1）。主文からみて鏡式は単葉鏡で、文様上面は非常によく研磨されており、文様でない部分には凹凸のある鋳肌が残る。また鋳肌の凹んだ部分には朱が残る（図4-2）。鏡面はよく研磨されている（図4-3）。池子鏡と同様、懸垂用の穿孔はないが、破断面に2箇所加工痕が見られる（図4-4～6）。

破断面は工具痕①がある外区側の一边にのみ研磨が見られるが、他は割れた際の鋳肌が残る割れ口のみで

ある（図4-2・7・8）。

③山梨県南アルプス市長田口遺跡5号溝状遺構出土鏡

素文の外縁部とわずかな櫛歯文のみの、長さ約11cmの扇形の鏡片である（図5-1）。外縁部を利用した扇形で、懸垂用穿孔と破断面研磨を施された典型的な破鏡で、今回比較した他の3点とは各部位の様相を異にする。表面はかなり摩滅しており、破断面も含め、角が取れて丸まっている（図5-2・3、図6-6）

穿孔①・②は懸垂のための孔で、鏡片内区側がより多く磨り減っている楕円形となり、内区側を上にして懸垂していたと推定される（図5-4・6）穿孔①②の孔の内側は、懸垂のために通した紐等による摩滅を受けながらも、円周方向の擦痕が残っており、穿孔具による加工の痕跡を見ることができる（図5-5・7）。穿孔③④⑤⑥は内区側破断面沿いに4つ並んだ孔である。未貫通の⑥を除いた3つは、いずれも円周の一部を欠いた形状をしていることから、この4つは鏡片割り取りのための穿孔と考えられている。③については半円形の孔の両側部分も摩滅が見られるが、④⑤については、孔の両側部分は摩滅せず欠損したままになっている（図6-1・2） 角の突出した部分なので使用期間の後半または埋没時に欠損したものであろうか。

穿孔⑥は円周の半分ほどの弧を描く溝状痕で、現状では錆あるいは土のようなものが溝の半分以上に詰まっている（図6-3～5）。しかし鏡背側・鏡面側共に同様の位置に溝が存在していることから、貫通している可能性もある。何らかの理由で穿孔作業を途中でやめたものと思われる、またこの未成の穿孔痕跡によって長田口鏡における穿孔作業の工具や方法が推測される、示唆的な痕跡である。報告書では竹管状の刮抜用工具の可能性が示されている。③～⑥の形状はいずれも不整形で、穿孔に使用された工具の形状が正円形でない可能性があるが、報告書では研磨によって円形の原形を留めていないとされている。

これまでに確認されている破鏡の加工方法をまとめると、次の通りである。

穿孔（鏡片分割、懸垂のため）

A. 穿孔具を回転させる、B. 先の尖った工具で敲打する、C. 竹管状の刮抜用工具を使用する

破断面の処理（鏡片分割の可能性含む）

a. 研磨、b. 鑿状工具を用いた整形、面取り

戸田小柳鏡では、穿孔はB、破断面の処理はbの方法が採られている。

4. 比較・まとめ

前項では、今回分析対象とした鏡の詳細観察結果および、これまで確認されている鏡の加工方法について提示を行なった。本項では、それらの特徴について比較・検討を行い、戸田小柳鏡の評価を試みたい。

池子鏡、東谷鏡の加工痕とした箇所は回転の痕跡がなく、金属組織の挟れや若干の段差が生じていることが確認された。また、長田口鏡のように穿孔部分が摩滅した状況ではなかった。このことから、鉄製の工具を用いた間接打撃によって、鏡の分割もしくは破断面の整形を行ったことが推測される。

長田口鏡の穿孔痕には回転の痕跡が確認されていることから、回転を伴う穿孔作業を行ったものと考えられる。竹管状の刮抜用工具使用が想定されている。なお、内区側に存在する穿孔は摩滅度が高いため、回転痕は見られないが、欠損した部分の破断面は新しく、内区側に向かって欠けている。このことから、もともとは懸垂用であった孔が欠損してしまったため新たに外区側へ穿孔し直し、再び利用したことが想定される。

池子鏡、東谷鏡で見られる工具痕は鏡が分割された後は研磨などの加工は施されず、割ったあとはそのままとなっている。破断面についても、東谷鏡では研磨された部分がみられるものの、破断面のほとんどが割

れたままで髹が遺存している状態である。

なお、鏡を小片にするという行為は鏡を使用に関して最終段階を示している可能性がある。長田口鏡における全体摩滅度は高くこのことから伝世を含めた長期使用が想定されるが、池子鏡・東谷鏡では分割した際に生じた髹が良好に遺存していることから比較的時間をおかず、住居跡に廃棄したという流れが考えられる。

戸田小柳鏡の穿孔痕跡については長田口鏡のような回転痕跡が見られないことから、池子鏡や東谷鏡のように何らかの工具を用いた間接打撃によるものではないかと推測される。この穿孔痕跡が分割のためか、懸垂のためかといった目的は不明であるが、加工を施して利用しようとしたことを読み取ることが可能である。

また、戸田小柳鏡の破断面は、研磨はされておらず鉄製の髹で分割もしくは整形したものと考えられる。工具を用いて分割もしくは整形の加工を行っていることから、鏡片での使用を意識していることを示している。なお、池子鏡・東谷鏡のように破断面で観察される髹の遺存状態から摩滅度は低く、長期間の使用は見込まれない。

以上のことから戸田小柳鏡は破断面が加工され、懸垂用の穿孔を有するような典型的な破鏡ではないが、鏡片の利用を意識するような破断面の分離・整形加工や分割を試みた穿孔を有することから破鏡の範疇として捉えることが可能である。

5. 予察

(1) 破鏡の流通形態、加工地について

基本的には中国大陸・朝鮮半島から北部九州を窓口として舶載鏡が集約され、加工された鏡片が日本列島に流通・拡散することで破鏡が流通したと想定されている。しかし、戸田小柳遺跡跡の未貫通の穿孔痕や東谷遺跡や池子遺跡から出土した鏡片に見られる加工痕の存在から、消費地における加工が行われていた可能性が想定される。なお、戸田小柳遺跡では鏡が出土した流路とは異なる流路から弥生時代後期～古墳時代前期に帰属する髹または髹と考えられる鉄製品が出土している。非常に示唆的な出土状況で、戸田出土鏡を上記鉄製品で加工した、という可能性を想定することもできよう。

供給地におけるより具体的な加工作業、形態、生産体制を明らかにすることが必要で、そこから消費地での加工作業などを対比することで、実態に迫ることができるのではないだろうか。

(2) 破鏡の定義と観察における視点について

破鏡を認定するための要素として「破断面の研磨」が挙げられるが、今回の観察を通じて疑問点が生じたため、記しておきたい。

長田口鏡は長期間の使用と摩滅により、肉眼観察でも確認できるほどに全体的に角が取れて丸みを帯びており、鏡の外縁部をはじめ、穿孔部分や破断面である櫛歯文の端部も潰れて平滑になっていることが観察された。しかし、外縁部の破断面については、外周は他の部分と同様に摩滅し、角が取れ丸みを帯びているが、その内側に関しては、金属が割れた際に生じる髹が摩滅によって丸まっているものの、遺存していることがわかる。この状況から、破断面は必ずしも研磨されているわけではないことを示しているとの可能性が考えられるのである。仮に破断面を磨いているのであれば、金属が割れた際に生じる髹が平滑になることが想定され、また磨いた面に擦痕などの加工痕が観察されることが期待されるが、そのような状況ではなかった。

この視点は、ある種「破鏡」＝「破断面を磨いている」ということがすでに観察の前提となっており、長期

間にわたる使用と摩滅の結果、平滑になった部分を含めて破断面を磨いたものとして一括りにしてしまっている可能性があるのではないか、という考えを得るに至った。この点については、さらに観察対象遺物を追加し、検証していく必要がある。観察結果の蓄積により、仮に一定の傾向があるということが確認された場合、例えば破断面の研磨が行われる部位が決まっているなど規則性があるのか、現時点で北部九州とされている鏡の供給地での加工、消費地での加工といった判別や分類が可能かなど、さらに様々な疑問が生じることが想定されるが、破鏡の生産や加工方法に迫る新たな視点になる可能性を秘めているのではないだろうか。

（3）鏡の加工・分割方法と使用される工具について

鏡の加工を考える上で、重要となるのは前項でも触れた加工に用いられた工具である。今回は破断面の整形に関しては鑿を、池子鏡、東谷鏡の加工痕から何らかの鉄製工具を用いた間接打撃によるものを想定したが、特に後者に関しては、弥生時代後期～古墳時代後期における基本的な鉄器器種組成にはない特殊な工具を想定するべきであろうか。長田口鏡における未貫通の穿孔については、竹管状の列打用工具が想定されているが、具体的にどのようなものかまでは判明していない。

日本海沿岸地域ではより効率的な玉類製作を行うため、鉄製工具を用いていた遺跡が確認されている。それらの遺跡では、鉄製工具をより玉類製作に特化した形で製作し、利用したことが明らかとなっている。

鏡片の加工に関しても、これに特化した鉄製工具が存在した可能性は十分にあらう。またはすでに出土しているが欠けて一部分しか遺存しておらず、結果としてそういった工具の存在を認識できていないという可能性もあるが、今後の出土を期待したい。なお、既存のもので対応するなら鑿の先端部（角）や穿孔具、先端部が尖った工具（例えば、先端部が錐状で、末端部が鑿や鑿のように打撃によってつぶれを有するもの）を利用した間接打撃や行う、といった方法も考えられようか。

金属に穿孔を行うという技術そのものや加工に用いられた道具については遺存状態の良い破鏡の観察事例を増やすことで詳細にせまることができる可能性がある。

鏡を加工するために用いられた工具や技術に関して、不明な点が多く課題が残されており、破鏡を考えていく上で解決しなければならない問題の一つであると考えている。

また、戸田小柳鏡では意図的に鏡面を傷つけるということが行われている。今回は恒例の有無など言及することはできなかったが、鏡の扱われ方を示唆しているものと推測されるため、この点についても今後の検討課題とした。

本稿は平成29年度公益財団法人かながわ考古学財団研究助成による研究「厚木市戸田小柳遺跡出土双頭龍文鏡破断面の観察と比較」の成果である。

資料調査に際し、下記の機関・諸氏にお世話になりました。記して感謝申し上げます（敬称略）。

近野正幸・本多成美（神奈川県埋蔵文化財センター）、酒巻忠史・中能 隆、齋藤礼司郎（本更津市教育委員会）、佐藤仁彦（逗子市教育委員会・池子遺跡群資料館）、一之瀬敬一（山梨県立考古博物館）

また、本資料について、報告書作成の際に国立歴史民俗博物館の上野祥史氏に直接ご教示いただいた。

執筆分担は以下のとおりである。

戸羽：第2・4・5節、岸本：第1・3・4節

註

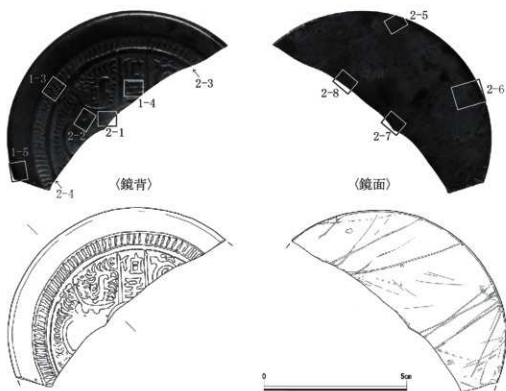
- 1: 鏡式の認識については、註5参照。
- 2: 報告書本文では初鋳1056年の「喜口通寶」とされているが、初鋳1056年の北宋銭は嘉祐元寶であるため、誤植と考えられる。拓本（山梨県埋蔵文化財センター1993；第56図2）からも嘉祐元寶の銘を確認できる。
- 3: 本例は三角縁神帳鏡で唯一の破鏡加工例でもある。
- 4: 大庭論考では鑿状工具となっているが、本稿では以下「鑿状工具」の語を用いることにする。鑿と鑿はその形能からの区別、ましてや工具痕からの使用工具識別は困難であるが、主として木材加工に用いる工具を鑿、主として金属加工に用いる工具を鑿とするならば、この場合鑿としておくことが妥当であろう。
- 5: 報告書中では船載の内行花文鏡と結論づけられている（神奈川県立埋蔵文化財センター1994:p.70）が、鏡背の文様構成を考えると、連弧文鏡（内行花文鏡）と認定するのは難しい。櫛歯文の内側には幅1mm程の圓線がめぐり、櫛歯の一部はその圓線を越えて内側にはみ出している。また圓線の内側3～4mmのスペースに文様はない。もし櫛歯文を有する連弧文鏡（内行花文鏡）であるなら、櫛歯文の内側これだけのスペースがあれば雲雷文帯（あるいはその省略形の圓線帯）または連弧文の一部がかかるはずである。また櫛歯文が圓線を越える例も後漢の連弧文鏡には見られない。鏡の復原径は、残存する円周が短いため不安定だが、直径9～10cmである。鉛同位体比の分析を持たなければ製作地に関する見解は出せないが、鏡背文様の観察からすると、連弧文鏡（内行花文鏡）以外の径10cm弱の鏡にその候補を求めた方がよい。

図版出典

- 第1図：1・2：公益財団法人かながわ考古学財団2016より転載、1上段は一部改変。神奈川県教育委員会所蔵
 第1図3～5、第2図：筆者撮影、神奈川県教育委員会所蔵
 第3図：筆者撮影、逗子市教育委員会所蔵
 第4図：筆者撮影、本更津市教育委員会所蔵
 第5・6図：筆者撮影、山梨県立考古博物館所蔵

参考文献

- 上野洋史 2016『戸田小柳遺跡出土鏡について』『戸田小柳遺跡 新東名高速道路建設事業に伴う発掘調査』かながわ考古学財団調査報告315、公益財団法人かながわ考古学財団
 大庭孝夫 2012『破鏡にみられる工具痕 福岡県みやま市藤の尾垣添遺跡出土破鏡の観察から』『九州歴史資料館研究論集』37、九州歴史資料館
 神奈川県立埋蔵文化財センター 1994『池子遺跡群1』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告27、神奈川県立埋蔵文化財センター
 本更津市教育委員会 2007『中尾遺跡群発掘調査報告書Ⅳ－東谷遺跡Ⅲ（古墳時代前期の集落）－』本更津市教育委員会
 公益財団法人かながわ考古学財団 2016『戸田小柳遺跡 新東名高速道路建設事業に伴う発掘調査』かながわ考古学財団調査報告315
 酒巻忠史 2016『千葉県君津地方における小銅鐸・鏡出土遺跡について－シャーマニクな人物の存在を推定する－』『東邦考古』第40号、東邦考古学研究会
 高橋 敏 2015『破鏡と四方軋びの箱』研究紀要第7号、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
 辻田淳一郎 2005『破鏡の伝世と崩壊－穿孔事例の観察から－』『史淵』142、九州大学大学院人文科学研究科
 辻田淳一郎 2007『鏡と初期ヤマト政権』さいけん舎
 藤丸詔八郎 1993『破鏡の出現に関する一考察』『古文化談叢』第30集（上）、九州古文化研究会
 南健太郎 2016『日本列島における漢鏡の東方拡散と保有・廃棄の意義』『考古学研究』第62巻第4号
 柳田康雄 2002『摩滅鏡と踏返し鏡』『九州歴史資料館 研究論集』27、九州歴史資料館
 山梨県埋蔵文化財センター 1993『長田口遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第82集、山梨県埋蔵文化財センター



1. 戸田小柳鏡 顕微鏡写真撮影箇所・実測図 (S=3/4)



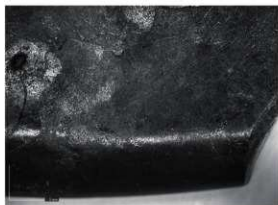
2. 穿孔箇所



3. 桐文 [50倍]



4. 銘文 (至) [50倍]



5. 外縁 (鏡背側) [50倍]

図1 戸田小柳鏡



1. 穿孔 [50 倍]



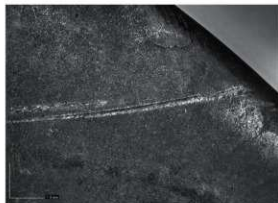
2. 穿孔 [50 倍]



3. 破断面 [50 倍]



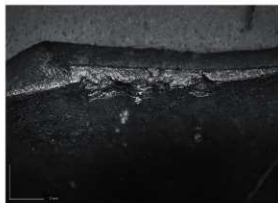
4. 破断面 [50 倍]



5. 鏡面傷跡 [50 倍]



6. 鏡面傷跡 [30 倍]

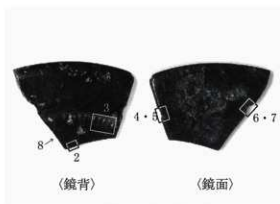


7. 打痕・工具痕 [50 倍]



8. 破断面と傷跡 [50 倍]

図2 戸田小柳鏡



1. 池子鏡 顕微鏡写真撮影箇所



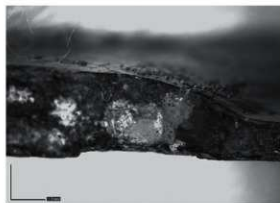
2. 文様か [120 倍]



3. 栴檀文 [50 倍]



4. 加工痕 鏡面側から [80 倍]



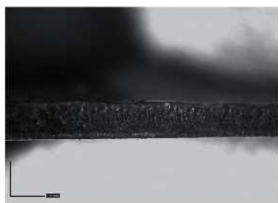
5. 加工痕と破断面 [50 倍]



6. 加工痕 鏡面側から [80 倍]

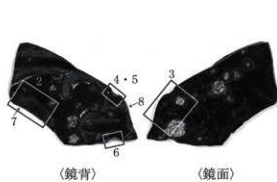


7. 加工痕 鏡面側斜めから [50 倍]



8. 破断面 [50 倍]

図3 池子鏡



1. 東谷鏡 顕微鏡写真撮影箇所



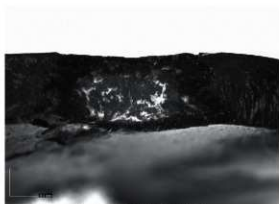
2. 主文・破断面 [50倍]



3. 鏡面 [50倍]



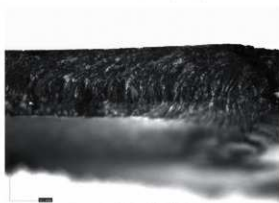
4. 加工痕 鏡背側斜めから [80倍]



5. 加工痕 横から [80倍]



6. 加工痕 鏡背側から [80倍]



7. 破断面 [80倍]



8. 破断面 [80倍]

図4 東谷鏡



1. 長田口鏡 顕微鏡写真撮影箇所



2. 帯面文 [50 倍]



3. 外縁 鏡面側から [50 倍]



4. 穿孔 鏡背側から 上が内区側 [50 倍]



5. 穿孔 鏡面側斜めから [50 倍]



6. 穿孔 鏡背側から 上が内区側 [50 倍]



7. 穿孔 鏡面側斜めから [50 倍]

図5 長田口鏡



1. 穿孔 鏡面側から [50 倍]



2. 穿孔 横から [50 倍]



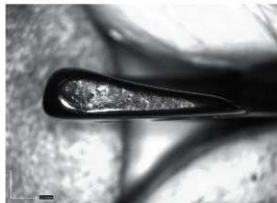
3. 穿孔未成痕 鏡背側から [50 倍]



4. 穿孔未成痕 鏡面側から [50 倍]



5. 穿孔 鏡面側から [50 倍]



6. 破断面 [20 倍]

図 6 長田口鏡

研究紀要23

かながわの考古学

発行日 2018（平成30）年3月26日
発行 公益財団法人かながわ考古学財団
〒232-0033 神奈川県横浜市中区中村町3-191-1
TEL : 045-252-8689 FAX : 045-261-8162
<http://www.kaf@kaf.or.jp>
印刷 アンクベル・ジャパン株式会社

KANAGAWA NO KOUKOGAKU

Vol.23

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

CONTENTS

Project Team for Paleolithic Studies: Studies of Paleolithic on the Sagamino: present and prospects for the future	1
Project Team for Jōmon Period Studies: Change of the Jōmon culture in Kanagawa (Ⅷ): An example in the first part of late period. An aspect of the Horinouchi-type pottery Period, part 9	13
Project Team for Yayoi Period Studies: Study of pit dwellings in the Yayoi period (2)	29
Project Team for Kofun Period Studies: Track of Dr. Naotada Akaboshi, A Pioneer of archaeological research in Kanagawa (15): A report of materials of the Kofun Period in the So-called "Akaboshi Note"	39
Project Team for Nara and Heian Periods Studies: Ancient Buddhist related relics in Kanagawa (1)	53
Project Team for Medieval Age Studies: Remains of the medieval period in central Kanagawa (3)	65
Project Team for Early Modern Age Studies: The corpus of structural remains of the road in the Early Modern Age (3)	77
Research-aid paper Aspects of the mountain forest temples in Sagami and Musashi Provinces -Focusing on the Gato (Earthen pagoda)	89
Research-aid paper Processing trace of division left in fragmented bronze mirror -Observation and comparison of fracture surface in excavated mirror at the Toda Koyanagi Site, Atugi	103

March, 2018

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan